基　本　計　画　書

基　本　計　画		
事　項	記　入　欄	備　考
計画の区分	学部の設置	
フリガナ 設置者	ガッコウホウジン キョウトセイカダイガク 学校法人 京都精華大学	
フリガナ 大学の名称	キョウトセイカダイガク 京都精華大学（Kyoto Seika University）	
大学本部の位置	京都市左京区岩倉木野町137番地	
大学の目的	京都精華大学は、人間を尊重し人間を大切にすることを教育の基本とし、学問・芸術によって、人類社会に尽くそうとする自立した人間の形成を目的とする。	
新設学部等の目的	ポピュラーカルチャー学部は、ポピュラーカルチャーという生活に密着したクリエイティブ領域において、急激に変化し続けるメディアと産業システムの動向をふまえたうえで、豊かな文化の発展に寄与し、時代の先端を切り開くコンテンツを創造できる人材を養成することを目的とする。	

新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地
		年	人	年次 人	人		年　月 第　年次	
	ポピュラーカルチャー学部［faculty of popular culture］ ポピュラーカルチャー学科［department of popular culture］	4	118	ー	472	学士（芸術）	平成25年4月 第1年次	京都市左京区 岩倉木野町137番地
	計		118		472			

同一設置者内における変更状況（定員の移行，名称の変更等）	
	デザイン学部 イラスト学科 （届出設置） （　64） ※平成24年4月届出中 デザイン学部 ビジュアルデザイン学科〔定員減〕（△32） デザイン学部 プロダクトデザイン学科〔定員減〕（△16） デザイン学部 建築学科〔定員減〕（△16） マンガ学部 マンガ学科〔定員増〕（　72） マンガ学部 マンガプロデュース学科 （廃止） （△40） ※平成25年4月学生募集停止 人文学部 総合人文学科〔定員減〕（△150）

教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数
		講義	演習	実験・実習	計	
	ポピュラーカルチャー学部 ポピュラーカルチャー学科	81 科目	85 科目	24 科目	190 科目	124 単位

教員組織の概要	学部等の名称		専任教員等 教授	准教授	講師	助教	計	助手	兼任教員
			人	人	人	人	人	人	人
	新設分	ポピュラーカルチャー学部 ポピュラーカルチャー学科	9 (5)	3 (3)	3 (3)	0 (0)	15 (11)	2 (2)	55 (21)
	新設分	計	9 (9)	3 (3)	3 (3)	0 (0)	15 (15)	2 (2)	55 (21)
	既設分	芸術学部　造形学科	10 (10)	4 (4)	2 (2)	0 (0)	16 (16)	3 (3)	51 (51)
	既設分	素材表現学科	6 (6)	1 (1)	1 (1)	0 (0)	8 (8)	2 (2)	33 (33)
	既設分	メディア造形学科	6 (6)	1 (1)	3 (3)	0 (0)	10 (10)	2 (2)	60 (60)
	既設分	デザイン学部　ビジュアルデザイン学科	4 (4)	7 (7)	0 (0)	0 (0)	11 (11)	2 (2)	41 (41)
	既設分	プロダクトデザイン学科	5 (5)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	7 (7)	2 (2)	28 (28)
	既設分	建築学科	5 (5)	0 (0)	2 (2)	0 (0)	7 (7)	1 (1)	43 (43)
	既設分	イラスト学科（届出中）	5 (2)	3 (3)	3 (3)	0 (0)	11 (8)	1 (1)	34 (23)
	既設分	マンガ学部　マンガ学科	9 (9)	14 (14)	6 (6)	0 (0)	29 (29)	6 (6)	44 (44)
	既設分	アニメーション学科	6 (6)	3 (3)	2 (2)	0 (0)	11 (11)	2 (2)	17 (17)
	既設分	人文学部　総合人文学科	23 (23)	12 (12)	3 (3)	0 (0)	38 (38)	0 (0)	107 (107)
	既設分	共通教育センター	2 (2)	1 (1)	3 (3)	0 (0)	6 (6)	5 (5)	8 (8)
	既設分	キャリアデザインセンター	0 (0)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	2 (2)	0 (0)	0 (0)
	既設分	計	81 (78)	50 (50)	25 (25)	0 (0)	156 (153)	26 (26)	466 (455)
	合計		90 (87)	53 (53)	28 (28)	0 (0)	171 (168)	28 (28)	521 (476)

教員以外の職員の概要	職種	専任	兼任	計	
		人	人	人	
	事務職員	85 (83)	31 (31)	116 (114)	大学全体
	技術職員	0 (0)	0 (0)	0 (0)	
	図書館専門職員	6 (6)	19 (19)	25 (25)	
	その他の職員	0 (0)	0 (0)	0 (0)	
	計	91 (89)	28 (28)	119 (117)	

校地等	区分	専用	共用	共用する他の学校等の専用	計	大学全体
	校舎敷地	107,911 ㎡	0 ㎡	0 ㎡	107,911 ㎡	借用面積：2,774㎡ 借用期間：27年（平成40年1月迄） 貸与者：京阪電気鉄道㈱
	運動場用地	92,562 ㎡	0 ㎡	0 ㎡	92,562 ㎡	
	小計	200,473 ㎡	0 ㎡	0 ㎡	200,473 ㎡	
	その他	39,466 ㎡	0 ㎡	0 ㎡	39,466 ㎡	
	合計	239,939 ㎡	0 ㎡	0 ㎡	239,939 ㎡	

校舎	専用	共用	共用する他の学校等の専用	計	大学全体
	69,380 ㎡ （ 66,048 ㎡）	0 ㎡ （ 0 ㎡）	0 ㎡ （ 0 ㎡）	69,380 ㎡ （ 66,048 ㎡）	

教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設	大学全体
	45 室	23 室	168 室	15 室 （補助職員 0人）	3 室 （補助職員 0人）	

専任教員研究室	新設学部等の名称	室数	
	ポピュラーカルチャー学部 ポピュラーカルチャー学科	8 室	

図書・設備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	大学全体共用分
	ポピュラーカルチャー学部　ポピュラーカルチャー学科	25500〔5680〕 (23,176〔5,168〕)	170〔60〕 (153〔53〕)	0〔0〕 (0〔0〕)	1,240 (1,128)	1204 (684)	615 (597)	図書 222,849冊〔49,747冊〕、学術雑誌 922冊〔339冊〕、電子ジャーナル 589タイトル〔309タイトル〕、視聴覚資料10,843点、機械・器具5,455点、標本 5,741点
	計	25500〔5680〕 (23,176〔5168〕)	170〔60〕 (153〔53〕)	0〔0〕 (0〔0〕)	1,240 (1,128)	1204 (684)	615 (597)	

図書館	面積	閲覧座席数	収納可能冊数	大学全体
	4,746 ㎡	530 席	250,000 冊	

体育館	面積	体育館以外のスポーツ施設の概要	大学全体
	3,106 ㎡	テニスコート5面、サブアリーナ、アスレチック・ジム	

経費の見積り及び維持方法の概要	区分	開設前年度	第１年次	第２年次	第３年次	第４年次	第５年次	第６年次	図書購入費には電子ジャーナル・データベースの整備費（運用コスト含む）を含む。
経費の見積り	教員１人当り研究費等		500千円	500千円	500千円	500千円	－ 千円	－ 千円	
	共同研究費等	47,373千円	50,000千円	50,000千円	50,000千円	50,000千円	－ 千円	－ 千円	
	図書購入費	16,064千円	20,000千円	20,000千円	20,000千円	－ 千円	－ 千円	－ 千円	
	設備購入費	31,772千円	45,000千円	45,000千円	45,000千円	－ 千円	－ 千円	－ 千円	

学生１人当り納付金	第１年次	第２年次	第３年次	第４年次	第５年次	第６年次
	1,779千円	1,579千円	1,579千円	1,579千円	－ 千円	－ 千円

学生納付金以外の維持方法の概要	資産運用収入，寄付金などの自己資金，国庫補助金等で充当する

既設大学等の状況	大学の名称	京都精華大学								
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地	
	芸術学部						0.91			学部に関しては、平成22年度に編入学定員を変更
	造形学科	4	112	－	448	学士（芸術）	0.99	昭和54年度		
	素材表現学科	4	64	－	256	学士（芸術）	0.75	平成18年度		
	メディア造形学科	4	64	－	256	学士（芸術）	0.95	平成18年度		
	デザイン学部						0.89			
	ビジュアルデザイン学科	4	96	－	384	学士（芸術）	1.06	平成18年度		
	プロダクトデザイン学科	4	64	－	256	学士（芸術）	0.83	平成18年度		
	建築学科	4	48	－	194	学士（芸術）	0.66	平成18年度		
	マンガ学部						1.04			
	マンガ学科	4	96	－	384	学士（芸術）	1.07	平成18年度		
	マンガプロデュース学科	4	40	－	160	学士（芸術）	0.89	平成18年度		
	アニメーション学科	4	64	－	256	学士（芸術）	1.07	平成18年度		
	人文学部						0.64			
	環境社会学科	4	－	－	－	学士（人文）	－	平成12年度	京都市左京区岩倉木野町137番地	平成21年度より学生募集停止
	社会メディア学科	4	－	－	－	学士（人文）	－	平成15年度		平成21年度より学生募集停止
	文化表現学科	4	－	－	－	学士（人文）	－	平成15年度		平成21年度より学生募集停止
	総合人文学科	4	450	－	1,800	学士（人文）	0.64	平成21年度		
	芸術研究科						1.18			
	博士前期課程 芸術専攻	2	20	－	40	修士（芸術）	1.26	平成16年度		
	博士後期課程 芸術専攻	3	5	－	15	博士（芸術）	0.85	平成15年度		
	デザイン研究科						0.86			
	修士課程 デザイン専攻	2	10	－	20	修士（芸術）	0.80	平成22年度		
	修士課程 建築専攻	2	5	－	10	修士（芸術）	1.00	平成22年度		
	マンガ研究科						0.81			
	博士前期課程 マンガ専攻	2	20	－	40	修士（芸術）	1.22	平成22年度		
	博士後期課程 マンガ専攻	3	4	－	4	博士（芸術）	0.75	平成24年度		
	人文学研究科						0.57			
	修士課程 人文学専攻	2	10	－	20	修士（人文学）	0.57	平成5年度		
附属施設の概要	該当なし									

教　育　課　程　等　の　概　要

（ポピュラーカルチャー学部 ポピュラーカルチャー学科）

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
基礎講義・演習科目	表現ナビ	1前	2			○								兼2
	哲学	1･2･3･4前		2		○								兼1
	現代思想	1･2･3･4後		2		○								兼1
	宗教学	1･2･3･4前		2		○								兼1
	倫理と社会	1･2･3･4前		2		○								兼1
	日本文学	1･2･3･4前後		2		○								兼1
	世界文学	1･2･3･4前		2		○								兼1
	民俗学	1･2･3･4前後		2		○								兼1
	考古学	1･2･3･4前後		2		○								兼1
	日本近現代史1	1･2･3･4前		2		○								兼1
	日本近現代史2	1･2･3･4後		2		○								兼1
	社会学	1･2･3･4後		2		○								兼1
	政治学	1･2･3･4前		2		○								兼1
	法学概論	1･2･3･4後		2		○								兼1
	日本国憲法	1･2･3･4前		2		○								兼1
	文化人類学	1･2･3･4後		2		○								兼1
	芸術と経済	1･2･3･4前		2		○								兼1
	芸術学1	1･2･3･4前		2		○								兼1
	芸術学2	1･2･3･4後		2		○								兼1
	東洋古典講座1	1･2･3･4前		2		○								兼1
	東洋古典講座2	1･2･3･4後		2		○								兼1
	西洋古典講座1	1･2･3･4前		2		○								兼1
	西洋古典講座2	1･2･3･4後		2		○								兼1
	現代日本社会論1	1･2･3･4前		2		○								兼1
	現代日本社会論2	1･2･3･4後		2		○								兼1
	言葉の科学	1･2･3･4後		2		○								兼1
	視覚認知論	1･2･3･4前		2		○								兼1
	科学の歴史	1･2･3･4前		2		○								兼1
	自然科学論	1･2･3･4前		2		○								兼1
	文明と環境	1･2･3･4前		2		○								兼1
	生物学	1･2･3･4前		2		○								兼1
	数学	1･2･3･4前		2		○								兼1
	マンガ文化論1	1･2･3･4前		2		○								兼1
	マンガ文化論2	1･2･3･4後		2		○								兼1
	創作論1	1･2･3･4前		2		○								兼1
	創作論2	1･2･3･4後		2		○								兼1
	情報処理基礎1	1･2･3･4前後		1			○							兼2
	情報処理基礎2	1･2･3･4前後		1			○							兼2
	キャリアデザイン1	1･2･3･4後		2		○								兼1
	キャリアデザイン2	1･2･3･4前		2		○								兼1
	キャリアデザイン3	2後		2		○								兼3
	キャリアデザイン4	3前		2		○								兼3
	点字講座1	1･2･3･4前		2		○								兼1
	点字講座2	1･2･3･4後		2		○								兼1
	健康学1	1･2･3･4前		2		○								兼1
	健康学2	1･2･3･4後		2		○								兼1
	スポーツ実習1	1･2･3･4前		1				○						兼10
	スポーツ実習2	1･2･3･4後		1				○						兼10
	スポーツ実習3	1･2･3･4前		1				○						兼10
	スポーツ実習4	1･2･3･4後		1				○						兼10
	英語1	1前		2			○							兼6
	英語2	1後		2			○							兼6

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
基礎講義・演習科目	英語3	2･3･4前		2			○							兼2	
	英語4	2･3･4後		2			○							兼1	
	日本語1	1前		2			○							兼3	
	日本語2	1後		2			○							兼3	
	日本語3	2･3･4前		2			○							兼3	
	日本語4	2･3･4後		2			○							兼3	
	フランス語1	1･2･3･4前		2			○							兼2	
	フランス語2	1･2･3･4後		2			○							兼1	
	フランス語3	2･3･4前		2			○							兼1	
	フランス語4	2･3･4後		2			○							兼1	
	中国語1	1･2･3･4前後		2			○							兼1	
	中国語2	1･2･3･4後		2			○							兼1	
	中国語3	2･3･4前		2			○							兼1	
	中国語4	2･3･4後		2			○							兼1	
	朝鮮語1	1･2･3･4前		2			○							兼1	
	朝鮮語2	1･2･3･4後		2			○							兼1	
	朝鮮語3	2･3･4前		2			○							兼1	
	朝鮮語4	2･3･4後		2			○							兼1	
	タイ語1	1･2･3･4前後		2			○							兼3	
	タイ語2	1･2･3･4後		2			○							兼1	
	タイ語3	2･3･4前		2			○							兼1	
	タイ語4	2･3･4後		2			○							兼1	
	ドイツ語1	1･2･3･4前		2			○							兼1	
	ドイツ語2	1･2･3･4後		2			○							兼1	
	ドイツ語3	2･3･4前		2			○							兼1	
	ドイツ語4	2･3･4後		2			○							兼1	
	スペイン語1	1･2･3･4前		2			○							兼1	
	スペイン語2	1･2･3･4後		2			○							兼1	
	スペイン語3	2･3･4前		2			○							兼1	
	スペイン語4	2･3･4後		2			○							兼1	
	教育学概論	1･2･3･4前		2		○								兼1	
	図書館概論	1･2･3･4前		2		○								兼1	
	生涯学習概論	1･2･3･4後		2		○								兼1	
	人権教育論	1･2･3･4前		2		○								兼1	
	現代学校論	1･2･3･4後		2		○								兼1	
	ワークショップ1	1･2･3･4前		2			○							兼2	集中
	ワークショップ2	1･2･3･4前		2			○							兼2	集中
	ワークショップ3	1･2･3･4前		2			○							兼2	集中
	ワークショップ4	1･2･3･4前		2			○							兼1	集中
	国内フィールドワーク1	1･2･3･4前		2			○							兼1	
	国内フィールドワーク2	1･2･3･4後		2			○							兼1	
	海外フィールドワーク1	1･2･3･4前		2			○							兼1	
	海外フィールドワーク2	1･2･3･4後		2			○							兼1	
	写真技法演習1	1･2･3･4前		2			○							兼2	
	写真技法演習2	1･2･3･4後		2			○							兼2	
	キャリアアップ演習1	1･2･3･4前後		2			○							兼2	
	キャリアアップ演習2	1･2･3･4前後		2			○							兼2	
	作品ポートフォリオ演習1	3前		1			○							兼1	
	作品ポートフォリオ演習2	3後		1			○							兼1	
	キャリアのためのデッサン1	2前		2			○							兼1	
	キャリアのためのデッサン2	2後		2			○							兼1	
	キャリアのためのデッサン3	3前		2			○							兼1	
	キャリアのためのデッサン4	3後		2			○							兼1	
	クリエイティブの現場	2･3･4後		2		○								兼1	
	キャリアインターンシップ	2･3･4前後		2			○							兼1	集中
	小計（107科目）	―	2	204	0	―			0	0	0	0	0	兼76	―

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
学部専門講義科目	【分野基盤科目群】													
	ポピュラーカルチャー原論	1前	2			○			1					
	クリエイティブ概論	1前	2			○			1					
	サウンドデザイン概論	1･2･3･4後		2		○								兼1
	ファッションデザイン概論	1･2･3･4後		2		○								兼1
	身体感覚構造概論	2･3･4前		2		○								兼1
	比較文化概論	2･3･4前		2		○								兼1
	ポピュラー音楽史	1･2･3･4前		2		○					1			
	ファッション史	1･2･3･4前		2		○					1			
	テクスト分析法研究	2･3･4前		2		○					1			
	作品作家研究	2･3･4後		2		○					1			
	スタイル素材研究	2･3･4後		2		○								兼1
	スタイル編集研究	2･3･4後		2		○								兼1
	舞台表現論	2･3･4前		2		○								兼1
	身体表現論	2･3･4後		2		○								兼1
	視聴覚表現論	2･3･4後		2		○								兼1
	ストリート表現論	2･3･4前		2		○								兼1
	【文化理論科目群】													
	ポップ批評	2前	2			○				1				
	ポップ美学	2後	2			○			1					
	文化社会学	1･2･3･4後		2		○								兼1
	メディア論	1･2･3･4前		2		○								兼1
	文化装置論	1･2･3･4後		2		○								兼1
	サブカルチャー論	1･2･3･4前		2		○								兼1
	広告文化論	1･2･3･4前		2		○								兼1
	近代社会文化誌	2･3･4後		2		○								兼1
	京都の文化装置1	2･3･4前		2		○				1				
	京都の文化装置2	2･3･4後		2		○				1				
	【コンテンツ・ビジネス科目群】													
	文化産業研究概論	1後	2			○				1				
	知的財産権概論	2･3･4後		2		○								兼1
	マーケティング論	2･3･4前		2		○								兼1
	文化政策論	2･3･4前		2		○								兼1
	アートプロデュース論	2･3･4後		2		○								兼1
	小計（31科目）	―	10	52	0	―			3	2	2	0	0	兼20 ―
学部専門実技科目	【基幹表現科目群】													
	基礎実習1	1前	3					○		1	1			
	基礎実習2	1前	3					○		2				
	基礎実習3	1前	3					○	1	1				
	基礎実習4	1後	3					○	1	1				
	基礎実習5	1後	3					○			2			
	基礎実習6	1後	3					○	2					
	制作実習1	2前	3					○	1	1	1			兼3
	制作実習2	2前	3					○	1	2				兼3
	制作実習3	2後	3					○	1	1	2			兼2
	制作実習4	2後	3					○	1	2				兼3
	領域横断基礎演習1	2前	2				○							兼6
	領域横断基礎演習2	2後	2				○							兼6
	応用実習1	3前	3					○	3		1			兼2
	応用実習2	3前	3					○	2	1	1			兼2
	応用実習3	3後	3					○	2		1			兼3
	応用実習4	3後	3					○	3	1				兼2
	領域横断演習1	3前	2				○							兼6
	領域横断演習2	3後	2				○							兼6
	自由制作1	4前	3					○	3	1	2			
	自由制作2	4前	3					○	3	1	2			

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
学部専門実技科目	自由制作3	4前	3					○	3	1	2				
	卒業制作1	4後	3					○	3	1	2				
	卒業制作2	4後	3					○	3	1	2				
	卒業制作3	4後	3					○	3	1	2				
	【表現融合科目群】														
	企画演習1	1･2･3前		2			○				1			兼1	
	企画演習2	1･2･3後		2			○				1			兼1	
	企画演習3	1･2･3前		2			○				1			兼1	
	企画演習4	1･2･3後		2			○				1			兼1	
	企画演習5	1･2･3前		2			○				1			兼1	
	企画演習6	1･2･3後		2			○				1			兼1	
	【メディア制作科目群】														
	メディア制作1	1･2･3前		2			○							兼1	
	メディア制作2	1･2･3後		2			○							兼1	
	メディア制作3	1･2･3前		2			○							兼1	
	メディア制作4	1･2･3後		2			○							兼1	
	メディア制作5	1･2･3前		2			○							兼1	
	メディア制作6	1･2･3後		2			○							兼1	
	メディア制作7	1･2･3前		2			○							兼1	
	メディア制作8	1･2･3後		2			○							兼1	
	【表現越境科目群】														
	デッサン1	2･3･4前		2			○							兼1	
	デッサン2	2･3･4後		2			○							兼1	
	身体表現1	2･3･4前		2			○							兼1	
	身体表現2	2･3･4後		2			○							兼1	
	文章表現1	2･3･4前		2			○							兼1	
	文章表現2	2･3･4後		2			○							兼1	
	クラフト1	2･3･4前		2			○							兼1	
	クラフト2	2･3･4後		2			○							兼1	
	調理表現	2･3･4前		2			○							兼1	
	【実務研修科目群】														
	インターンシップ	3･4前		2			○				1			兼1	集中
	制作実務研修1	2･3･4前		2			○				1			兼1	
	制作実務研修2	2･3･4後		2			○				1			兼1	
	制作実務研修3	2･3･4前		2			○				1			兼1	
	制作実務研修4	2･3･4後		2			○				1			兼1	
	小計（52科目）	－	68	56	0	－			8	4	3	0	0	兼39	－
合計（190科目）		－	80	312	0	－			8	4	3	0	0	兼130	－

学位又は称号	学士（芸術）	学位又は学科の分野	美術関係

卒業要件及び履修方法	授業期間等	
基礎講義・演習科目から「表現ナビ」2単位と「英語」（留学生は「日本語」）6単位を含む20単位以上を必修、学部専門講義科目から必修10単位を含む20単位以上を必修、専門実技科目から必修68単位を含む78単位以上を必修。計124単位以上を修得すること。	1学年の学期区分	2 学期
	1学期の授業期間	15 週
	1時限の授業時間	90 分

授　業　科　目　の　概　要

（ポピュラーカルチャー学部ポピュラーカルチャー学科）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎講義・演習科目		表現ナビ	京都精華大学の歴史や学びを理解し、大学の構成員であることを自覚するとともに、充実した大学生活を過ごすための基礎知識を学ぶことを目的とする。自身の考えを表現することや他者とのコミュニケーションの取り方を学ぶことによって、学習するために必要な基礎的な姿勢と技能を身に付ける。また、他学部で展開される教育内容を知り、自身の興味の幅を広げる。さらに、キャリアデザインの概念を理解し、4年間の学生生活の見通しと将来の目標を立てることを目的とする。	
		哲学	古代から近現代に登場した様々な哲学者の見解を考察の手引きとし、「人間とは何か」「私とは何か」という概念を創作的に解読することを目的とする。現代における「人間」及び「私」という概念の多義性を検証し、人間概念を再構築することで、社会の中における私と他者とのあり方を改めて捉え直す。各テーマに沿って哲学的探求の基礎を固めることで、自己と世界と他者に向けて発信する力を養い、自分という人間を開く糸口とする。	
		現代思想	思想的・哲学的な視点から芸術を捉え、それらが持つ意味を多義的に解釈し理解を深める力を身に付ける。主に、英米系の哲学や美学、フランス現代思想に現れる理論を参照する。そこでテーマとなったアートと関連する諸概念を通して「アート」とは何か、「作品」とは何かを考察する。例として、「作品」「作者」「コピー／オリジナル」「写実性」「表象」「虚構性」といった諸概念を、思想的・哲学的な角度から捉え、芸術作品が内在するもの及び、超越するものについて考察を深める。	
		宗教学	宗教の本質である「人間とは何か」及び「人間としての生き方」について考察し、「自分」をより深く多角的に見る力を養うことを目的とする。主に、「多神教的精神風土」を持つ日本の立場から、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教などの「一神教世界」が持つ思想文化や芸術を探ることで、諸外国の宗教と歴史、芸術への理解を深める。また、それら異文化との比較によって、私たち自身をより深く理解することにつなげる。また、「聖書」の歴史理解を美術と関連して取り上げ、西洋美術への見解を広げる。	
		倫理と社会	「新たなものの見方を切り開くもの」としてアートと哲学に共通点を見出したうえで、「哲学」という常識をあえて問う学問へと誘う。その中で、既存の思考からの展開や批判的視野を獲得し、新たなものの見方を身に付ける。哲学の中でもとりわけ社会的問題を考察する「倫理学」の諸問題に焦点を当てながら、通常自明とされている「常識」を改めて見つめ直し考察していく。また、哲学的に「考える」とはどういうことかを探り、自分自身及び社会を捉える視点の幅を広げることを目的とする。	
		日本文学	ひとりの近代文学作家を取り上げ、「ことば」のもつ力に注意を向ける。作家の生涯を学んだ上で作品を読み込み、一語一語をおろそかにしない読み方を習得する。作家の紡ぐ言葉の適切さや豊かさを理解し、一語ずつを大切に捉える態度を養うことで、自分自身の語彙力と表現方法を養う。それにより、自身の発信の幅を広げ、制作に対するこまやかな精神を育てる。また、辞書を引く習慣を身に付ける。作品によっては音読を行いながら作品の持つ意味への理解を深め、世界観を深く感じる力を養う。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎講義・演習科目		世界文学	世界文学では、国外の文学作品を読み解く中で、日本の文学には無い特有の表現や文構造、世界観に触れていく。その作品を生み出した背景を学んだ上で、その文化及び作者の生み出した表現の豊かさを感じとり、作品の持つ意味への理解を深める。新しい世界観に触れると共に、登場人物の心理や行動原理、風景描写などにおいて、日本文学とは異なる豊かさや鮮やかさを発見する。また、ことばの持つ力に注意を向けることで、作家の紡ぐ言葉の適切さや豊かさを理解し、自分自身の語彙力と表現方法を養う。	
		民俗学	民俗学とは、風俗や習慣、伝説、民話、歌謡、生活用具、家屋など古くから民間で伝承されてきた民俗資料をもとに、人間の営みの中で伝承されてきた現象の歴史的変遷を明らかにし、それを通じて現在の生活文化を相対的に説明しようとする学問である。本講義では、伝統行事や信仰文化といった、できる限り身近な民俗的事象を取り上げながら、現代文化の持つ意味や背景を読み解いていく。また、伝統行事の学習を通して、日本人の思考様式についての理解を深める。現代生活と民俗の深いかかわりを認識することで、自分自身を民俗の視点から今一度見つめ直すことを目的とする。	
		考古学	考古学とは、遺跡や遺構といった痕跡から歴史を考える学問である。痕跡から歴史を読み取る方法は、文献から読み取る方法とは大きく異なる。また、そこから読み取られた歴史も、文献から読み取った歴史とは異なってくる。こういった特性を押さえたうえで、考古資料の読み取り方を体得し、図面とその意味を理解できるようになることを目指す。考古学資料を元に、環境と素材と技術および物作りの視点から、それぞれの時代の人と文化を探り、環境と人と文化の関係についての視野を広げる。	
		日本近現代史1	日本の近代のうち後半となる、戦後日本の歩みについて学ぶ。最も身近な時代についての歴史的知識を習得することで、現代の日本を見つめ直すきっかけを得ることを目的とする。太平洋戦争、その後の占領期、復興と経済成長、バブルとその崩壊、そして21世紀へとつなぐ日本のあり方を学ぶ。時間軸における社会の移り変わりを理解し、戦後日本の世界における位置づけを理解する。歴史的関心を持ち続けるきっかけを作り、自らが調べ考える態度を身に付けることを目標とする。	
		日本近現代史2	日本の近代のうち前半となる、幕末、明治、大正、昭和前期の歴史を学ぶ。この時期は、黒船の来航に始まり敗戦にいたるまでの、日本の全歴史を通じて最も重要な時期と言える。歴史的に重要な出来事での局面では、必ず決定にいたるまでの緊迫の瞬間があり、その連続こそが歴史であるということを理解する。また、日本の近代は世界史のなかの一こまであり、一国の時系列だけを見てはいけないということを理解する。特に、日本を取り囲む国々に注意を向け、中国、朝鮮半島、アメリカ、ロシアのその時どきの状況をたえず把握しながら、日本の近代史に対する考察を深める。	
		社会学	社会学はさまざまな形で起こる社会の出来事を調査し、その原因や関連性などを研究する学問である。その対象は家族、人権、福祉、環境、エネルギー、戦争、宗教、ジェンダー、芸術など多岐にわたり、それぞれがボーダレスかつ複雑に組み合わされている。私たちを取り巻く「社会」で起こっている出来事に注意を向け、その実態や因果関係を客観的に解明し、考察を深める。また、そういった問題を自分のこととして考え、その解決のためにどのような対応ができるかを考え、行動する力を養うことを目的とする。	
		政治学	最近のニュースを読み解きながら「政治」とは何かについて考察を深める。また、国会や内閣などの日本の政治の基本的な仕組み（選挙、議員内閣制、二元代表制など）について理解する。続けて、アメリカ、中国、ヨーロッパなど外国の政治について学び、日本の政治との違いを理解する。また、自分たちが住んでいる地域における政治を取り上げ、地方自治体の仕組みなどを理解する。新しい公共とは何かについて、自分の考えを述べることができるようになることを目標とする。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎講義・演習科目		法学概論	時事問題を通して基礎的な法律の知識を習得する。身近なニュースや問題を題材に、憲法、刑法、民法という代表的な3つの法律を学習する。我々の暮らしは法律に守られ、法律に従っているということに気づくことで、法律や社会問題に対する意識を高める。また、私たちの日常の中にある何気ない風景や場面に潜む「法律」を発見し、「法律」という視点から物事を考える力を養うことを目標とする。「法律」を理解することで、社会問題に対する意識を高め、自分の意見を持ち表現する力を身に付けることを目標とする。	
		日本国憲法	「憲法」の働きを学習し、よりよい憲法のあり方を考えることを目標とする。憲法の基本的な知識を習得するとともに、身近なニュースや問題の中に潜む「憲法」を発見し考察していく。日本の法のシステムや、憲法誕生までのプロセスについて学び、憲法が必要とされた背景について知識を深める。また、基本的人権や憲法9条について学び、人間が生きるために必要な権利を憲法が保障していることを理解する。憲法を通して時事問題を読み解く力を身に付け、憲法に関する自分の意見を論理的に説明・議論する力を養うことを目的とする。	
		文化人類学	「文化」が現代人類社会の展開において、物質的・精神的に影響を与えてきた経緯について考察する。人類出現以前の「文化」から現代の「文化」に至るまで、時間的・空間的に縦横にテーマをとりあげ、さまざまな領域に関連させながら考察を深める。人類にとっての「文化」の諸相を学ぶことで、芸術を含む文化が社会に与える影響について理解を深める。さらに、「文化」の生物学的側面及び諸側面について、その特徴を説明できるようになることを目標とする。	
		芸術と経済	芸術作品に焦点を当てながら、市場取引の経済学的な長所と短所を理解する。さらに、芸術を含めた文化財が市場主義に馴染まない側面についても言及する。留保価格と市場価格の関連について理解し、消費者余剰や生産者余剰の概念について学ぶ。そして、オークションの役割について理解し、ギャラリー販売との違いを明らかにする。さらに、芸術作品の取引で頻繁に発生する「情報の非対称性」について理解し、それを避ける方法を学ぶ。文化財・文化サービスが社会的共通資本であることを理解し、豊かな社会を形成する役割を担っていることを理解する。	
		芸術学1	視覚的イメージをコミュニケーションのためのメディアとして捉え、ヴィジュアル・リテラシー、すなわち視覚的な読み書き能力について理解を深めることを目標とする。絵画、写真、映画、マンガなどの視覚イメージが、どのように「意味」を作り上げているのか、そのメカニズムについて理解を深める。さまざまな視覚メディアの構造を理解するとともに、それらの視覚的イメージを「読む」という感覚を身に付け、「イメージ」と社会の関係への理解を深める。	
		芸術学2	芸術学1の内容を踏まえ、視覚的イメージをコミュニケーションのためのメディアとして捉えたうえで、とくに近代における「芸術」という制度の成立とその変容を幅広く考察する。芸術と近代社会・近代文化との関わりを再考することにより、現代芸術の状況を理解する。音楽、デザイン、ファッション、建築などのさまざまなメディアにおける「モダニズム」について学ぶことで、近代社会における芸術の位置付けについての理解を深める。	
		東洋古典講座1	東洋古典講座1では、一つの古典作品に焦点を絞り、始めから終わりまで「自分で」読み通すことを主な目的とする。作家の生涯について学んだ後、作品の世界をじっくりと読み解き理解を深める。一冊の古典をじっくり読んでみることで、その世界観を深く味わい、表現の幅を広げるきっかけとする。古くから現在に至るまで広く読みつがれてきた作品の持つ魅力を深く理解する。また、長く時代を超えて示される規範や、褪せない美学などについても理解を深め、芸術を時間軸で捉える力を身に付ける。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎講義・演習科目		東洋古典講座2	かつて日本人の生き方や考え方に大きな影響を与えた「儒教」について、その大きな輪郭を捉えるとともに、本場中国においての儒教のあり方について考察を深める。中国人の血肉となり、朝鮮や日本に圧倒的な影響を与えてきた儒教とは何か、孔子とはどういう人だったのか、中国歴代王朝は儒教をどう扱ったのかということについて知識を深める。儒教の在り方を通して、中国の歴史をつかむとともに、中国人のものの考え方への理解を深める。また、中国と日本の儒教理解の相違点や、近代化における儒教の変容を理解し、伝統思想と近代の関係について考察を深める。	
		西洋古典講座1	西洋古典講座1では、一つの古典作品に焦点を絞り、始めから終わりまで「自分で」読み通すことを主な目的とする。本講義では自伝を取り上げ、作品にまつわる地理や歴史、文化に対する理解を深める。作品の歴史的背景に関する知識を深めた上で作品を読み込み、その時代や土地や人々の思想についての理解を深める。また、「自伝」とは何であるかについて学び、作中の出来事を通して作者自身がどのように人間形成を行っていったかについて読み解く。	
		西洋古典講座2	「西洋古典講座1」に続き、一つの古典作品に焦点を絞り、始めから終わりまで「自分で」読み通すことを目的とする。本講義では寓話集を取り上げ、寓話の持つ意味について探る。寓話は、まだ宗教も倫理学も確立していない時代に生まれ、はるか昔から語り継がれてきた。一見すると他愛のないような話に聞こえるが、実際には鋭く真理を付いており、おそろしいほどに奥が深い。読み手の立場によってさまざまな解釈が可能であるということを理解し、そこに含まれる真理を解明していく。	
		現代日本社会論1	現代日本社会を読み解く材料として「新聞」を題材に扱い、いま日本がどういう問題に直面しているかを発見し、その輪郭をとらえることを目的とする。社会全体の動きをとらえるうえで、依然「新聞」はメディアの中心的役割を果たしている。読みようによっては新聞には現代日本社会のすべてが書かれており、さらに訓練を積むと、新聞に書かれていない問題も見えてくる。新聞を読むことの意味を理解し、新聞の読み方を学ぶことで、一つの報道記事が照らす日本社会の深部を深く読み解く力を養う。	
		現代日本社会論2	「現代日本社会論1」に続き、新聞報道を材料にして、いまの日本が直面している問題を読み解く。現代日本社会論1が「日本の社会」中心だったのに対し、現代日本社会論2ではその観点を「日本をめぐる国際関係」に置きかえて考察する。いま日本が直面している問題の大部分は、諸外国からの影響を受けていることが多い。日本の新聞には海外報道が少ないが、しかしそれらの記事をよく注意して読むことで、外国で起こっている諸問題が日本にどう関係してくるか先を読む力を養うことができる。諸外国との関係を通し、日本という国自身の輪郭を探ることを目的とする。	
		言葉の科学	美術作品のなかの「言葉」にふれることで、「言葉」の持ち得る表現力について解明していく。その上で、自身の作品を制作する際や、他者の作品を鑑賞する際の視点を増やすことを目的とする。物語や絵画などの作品の中に表れる言葉や、作品のタイトルにおける言葉の使い方から、女性や他者、社会を描く言葉のあり方まで、あらゆる「言葉」のあり様を解説する。また、「文体」を深く理解することにより、言葉の表現方法によるニュアンスの違いを理解し、記号としての言葉や、記憶としての言葉の概念を身に付ける。	
		視覚認知論	視覚とは、ヒトにとってひときわ重要な感覚であり、我々は多くの点で視覚に依存していると言える。本講義では、目から入ってきた情報がどのように処理されて行動に影響を与えるのかについて、認知心理学を中心に、心と脳の二つの側面から概説する。「目の構造」や「知覚の現象」に関してだけでなく、視覚の情報処理に重要な「記憶」や「視覚的注意」についても説明する。また、「視覚の発達」や「脳内機構」についても扱い、視覚情報の処理過程について、さまざまな角度からの包括的な理解を目指す。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎講義・演習科目		科学の歴史	本講義では、医学生物学系から社会科学系にまたがる「科学の歴史」を扱う。主に「性」をテーマとして取り上げ、「性」に関わる学問や思想の変換を、「性」をめぐる現在の問題構造との関係を念頭に置きながら解説する。現代の「性」が歴史の刻印を帯びていることを知り、また、医学生物学的な「性」理解に深く影響されていることを学ぶ。また、現代の「性」のあり方と社会科学的な「性」についての情報の関係を知る。最終的には科学とは何かを把握し、科学と社会はどのように関係しているかを理解することを目的とする。	
		自然科学論	自然科学論では、宇宙科学の基礎的な知識を得るとともに、宇宙科学と人文社会科学・芸術表現との関わりを学ぶ。宇宙に関連した自然科学には、天文学、物理学、地球惑星科学、宇宙工学など様々な分野がある。さらに現代においては、宇宙における社会システムや人類のあり方など、人文社会科学に関連した問題が出現しつつある。また、宇宙は新たな芸術表現の場であり、同時に宇宙科学の内容を一般に伝える際には芸術表現が強力なツールとなり得る。宇宙科学の最新の動向に触れ、理解を深めるとともに、人文・芸術・表現分野との連携について解説する。	
		文明と環境	本講義では、技術文明の発展が環境破壊に大きく影響していることを改めて認識し、これからの文明の発展と環境問題とのあり方について考察する。技術文明の発展のために消費されたエネルギー資源が、どれほど環境を破壊してきたのか実態を探る。また、環境を破壊しないエネルギー資源の利用はどこまで可能であるか検証する。環境破壊を防ぐために今後どのような科学技術の開発が必要であるか、その研究はどこまで進んでいるのかについて考察を深める。	
		生物学	生物学では、現代の進化生物学と多様性生物学に基づいた生物観を学ぶことによって、人間とは何か、社会とは何かという根源的な問いに対する進化生物学的思考を身に付けることを目標とする。さまざまな生物の行動や生態について理論的に考察を進める中で、循環社会の基礎となる生態系の原理、ジェンダー論の生物学的な背景、共生社会の基礎となる生物間相互作用などの理解を深める。生物多様性の現状を理解し、その意義について考察していく。	
		数学	数学の基底にある「線形思想」と「極限の思想」について、対照させながら考察を深める。人はものごとを認識し判断しようとするときに、線形思想や極限の思想に基づいて判断している。授業では、比をとる作業や極限をとる作業を実際に行い、それらを通じて「比をとること」「極限をとること」とはどういうことであるか理解を深める。また極限をとることによって比が崩れるかどうかについて検証し、これら二つの基本思想の関係について考察を深める。	
		マンガ文化論1	マンガ文化論1では、マンガとアニメに見る時間芸術の歴史について考察する。マンガとアニメは、ともに「物語芸術」として相互に影響を与え合いながら発展した経緯を持つ。物語の本質は「時間」であり、マンガ・アニメは時間の流れを視覚的に表現したものである。物理的な時間表現であるアニメはもとより、マンガにおいても、静止した平面の上で時間を表現するために、さまざまな技法や表現が開発されてきた。主にアメリカ・カートゥーンの黄金時代から日本の戦時下のマンガとアニメーションへの発展期といった歴史を取り上げ、マンガとアニメが持つ芸術的な本質を解明する。	
		マンガ文化論2	「マンガ文化論1」に続き、マンガとアニメに見る時間芸術の歴史について考察する。マンガとアニメがともに「物語芸術」として相互に影響を与え合いながら発展した経緯をふまえ、それぞれの目的が時間の流れを視覚的に表現することであることを理解する。本講義では、戦後のアニメーションの表現革命に始まり、手塚治虫のアニメ進出、少年マンガ誌や少女マンガ誌の発展など、現在に至るまでのマンガとアニメの歴史を取り上げ、これらが持つ芸術的な本質を解明する。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎講義・演習科目		創作論1	創作論1ではまず、英語以外の外国語についての関心を深めることを目的とする。次に、言語・記号論と美術との関係を解き明かし、芸術創作への応用が可能であるということを理解する。言語学・記号論は、言葉を抽象化して後ろにある普遍的・特異的な構造を見出す学問である。こうした考え方を「視覚言語」「音楽言語」として捉え、新しい芸術創作への道筋として捉える。具体的には言語の音や文法、文字のシステムについて学び、言語学的な抽象論へ導く。	
		創作論2	「創作論１」に続き、英語以外の外国語についての関心を深めることを第一の目的とする。次に、言語・記号論と美術との関係を解き明かし、芸術創作への応用が可能であるということを理解する。言葉を抽象化して、後ろにある普遍的・特異的な構造を見出すという考え方への理解を深める。そして、その考え方を新しい芸術創作への道筋として捉え発展させる。具体的には言語の音や文法、文字のシステムについて学び、言語学的な抽象論へ導く。	
		情報処理基礎1	デジタル情報の検索・利用、およびデジタル文書作成法の実習を行う。その中で情報化社会に対する理解を深め、どのように情報を処理していくかを学ぶ。これらに加えて情報受発信におけるモラルの学習を行う。講義では、Webメールの使い方やファイルの管理、記憶媒体の種類や特徴といった、情報処理を行う上での基礎的な知識を習得する。実習ではMicrosoft Wordを利用したＤＴＰの基礎知識及び、Adobe Photoshop・Adobe Illustratorを用いたデジタルデザインと画像編集の基礎技術を習得する。	
		情報処理基礎2	情報処理基礎2では、プレゼンテーションツールを用いて、自己の作品を発表し伝える手段を身に付ける。プレゼンテーション用ソフト「PowerPoint」を用いて、より表現力豊かなプレゼンテーション資料を作成するスキルを習得するほか、表計算ソフト「Excel」を利用し、統計処理に必要なデータベース機能を習得する。また、自己の作品をオンラインで発信する手段として、Webページ作成の基本操作を身に付ける。HTMLドキュメントやCSSの活用などを学び、インターネットでの発信技術を習得する。	
		キャリアデザイン1	大学生活での学びと卒業後の働き方についてのライフデザインを行い、就職のための基礎技術と基礎知識を身に付ける。各自が卒業後に志望する業界への基礎知識を学び、ライフデザインを試行することで、表現活動を通じて主体的に自己形成を行うことを目的とする。キャリアデザイン1では、仕事をすることが前向きで楽しいものであることを認識した上で、自分の志向を把握し、将来像やどういう仕事をしたいかを確立していく。	
		キャリアデザイン2	大学生活での学びと卒業後の働き方についてのライフデザインを行い、就職のための基礎技術と基礎知識を身に付ける。各自が卒業後に志望する業界への基礎知識を学び、ライフデザインを試行することで、表現活動を通じて主体的に自己形成を行うことを目的とする。キャリアデザイン2では、業界全般についての基礎知識を身に付け、業界研究の方法について学ぶ。自分が志望する業界について、全体像や将来性、働き方について分析する力を身に付ける。	
		キャリアデザイン3	大学生活での学びと卒業後の働き方についてのライフデザインを行い、就職のための基礎技術と基礎知識を身に付ける。各自が卒業後に志望する業界への基礎知識を学び、ライフデザインを試行することで、表現活動を通じて主体的に自己形成を行うことを目的とする。キャリアデザイン3では、就職活動に必要な作文技術を身に付ける。就職活動における筆記試験及び面接試験の対策について方法を学び、実践を通して自らを表現する力を習得する。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎講義・演習科目		キャリアデザイン4	大学生活での学びと卒業後の働き方についてのライフデザインを行い、就職のための基礎技術と基礎知識を身に付ける。各自が卒業後に志望する業界への基礎知識を学び、ライフデザインを試行することで、表現活動を通じて主体的に自己形成を行うことを目的とする。キャリアデザイン4では、グループワークを通して将来について話し合うことで、今までの自分にはない考え方を取り入れる姿勢を身に付ける。グループワークで自分のことを表現する中で、自らを客観的に見る力を養い、仲間や社会と繋がることの大切さを学ぶ。	
		点字講座1	点字の学習を通して福祉への理解を深めることを目的とする。点字とは、6つの点の組み合わせによる表音文字である。点字の規則やアルファベットについて学び、点字の読み書きができるようになることを目指す。また、手紙の書き方や、点字絵本の作り方などについても学習する。同時に、教育の場、労働の場、家庭、そして地域で視覚障害者と共に歩むことを目的に、視覚障害の意味や視覚障害者への支援のあり方、及び関連する福祉について解説する。	
		点字講座2	点字の学習を通して福祉への理解を深めることを目的とする。点字講座2では、点字の学習を通して視覚障害者福祉についての理解を深める。「点字講座1」に引き続き、まず点字の基本を学んだ上で、読み書きの方法を習得する。さらに、英語点字の読み書きや、手紙の書き方についても学ぶ。また、時計やパソコンなど、視覚障害者のための福祉機器について解説し、盲導犬の役割についても紹介する。視覚障害福祉の現状と今後のあり方について考察を深める。	
		健康学1	身体各部の機能についての理解を深めることで、よりよく生きる基礎を築くことを目的とする。精神を含めた人間の身体というものは、未だに解明されていない部分が多い。そのような「人体組織の不思議理解」の下に、身体を構成している各諸器官の基本的な機能を理解していく。「身体」についての理解を深めることで、自己をより深く理解し、さらには他者理解を通して今後の社会生活をよりよく進めていくことを目指す。	
		健康学2	脳機能についての理解を深め、自らの日常生活に反映することを目標とする。人間の脳細胞は未発達で未成熟であり、社会的環境の中で駆使することで成長するものと考えられている。現代の医学や科学においても未だに明確にされていない部分が多く、不明な領域が多い。そういった「脳生理の不思議理解」の下に、日常生活の中に見られる人間行動の素朴な疑問を解明する。脳機能についての理解を深めることで自己をより深く理解し、さらには他者理解を通して今後の社会生活をよりよく進めていくことを目指す。	
		スポーツ実習1	体力と健康の保持、増進を図ることを目的として、各種スポーツ、すなわち卓球、バスケットボール、テニス、バレーボール、バドミントン、フットサル、ウェイトトレーニングなどの種目から受講生が選択し、それぞれのスポーツの基本的な技能に関する練習とゲームを行う。故障を防ぐための基礎的な注意事項についても説明する。またスポーツ活動の有用性についての認識を深め、日常生活の中で実践できる「生涯スポーツ」への契機とすることも目的とする。	
		スポーツ実習2	体力と健康の保持、増進を図ることを目的として、各種スポーツ、すなわち卓球、バスケットボール、テニス、バレーボール、バドミントン、フットサル、ウェイトトレーニングなどの種目から受講生が選択し、それぞれのスポーツの基本的な技能に関する練習とゲームを行う。故障を防ぐための基礎的な注意事項についても説明する。またスポーツ活動の有用性についての認識を深め、日常生活の中で実践できる「生涯スポーツ」への契機とすることも目的とする。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎講義・演習科目		スポーツ実習3	体力と健康の保持、増進を図ることを目的として、各種スポーツ、すなわち卓球、バスケットボール、テニス、バレーボール、バドミントン、フットサル、ウェイトトレーニングなどの種目から受講生が選択し、それぞれのスポーツの基本的な技能に関する練習とゲームを行う。故障を防ぐための基礎的な注意事項についても説明する。またスポーツ活動の有用性についての認識を深め、日常生活の中で実践できる「生涯スポーツ」への契機とすることも目的とする。	
		スポーツ実習4	体力と健康の保持、増進を図ることを目的として、各種スポーツ、すなわち卓球、バスケットボール、テニス、バレーボール、バドミントン、フットサル、ウェイトトレーニングなどの種目から受講生が選択し、それぞれのスポーツの基本的な技能に関する練習とゲームを行う。故障を防ぐための基礎的な注意事項についても説明する。またスポーツ活動の有用性についての認識を深め、日常生活の中で実践できる「生涯スポーツ」への契機とすることも目的とする。	
		英語1	英語1では、英語の基礎力を向上させることを目的とする。英語の基礎的な文法の復習を行い、日常表現の基礎を身に付ける。また、英語の思考法及び言葉に表れる文化の諸相について考察し、英語圏の文化に対する理解を深める。これらに加えて、芸術やデザインに関するディスカッションやプレゼンテーションを英語で行う力を養い、英語によるコミュニケーション能力の向上を図る。これにより、自身及び自身の作品を世界に向けて発信する能力を伸ばす。	
		英語2	英語2では「英語1」に続き、英語の基礎力を向上させることを目的とする。英語の基礎的な文法の復習を行い、日常表現の基礎を身に付ける。また、英語の思考法及び言葉に表れる文化の諸相について考察し、英語圏の文化に対する理解を深める。これらに加えて、芸術やデザインに関するディスカッションやプレゼンテーションを英語で行う力を養い、英語によるコミュニケーション能力の向上を図る。これにより、自身及び自身の作品を世界に向けて発信する能力を伸ばす。	
		英語3	英語3では、英語の基礎を押さえた上で、さらなる英語表現の向上を目的とする。英文の読解トレーニングを通して、語彙力と読解力の向上を図る。また、英語的表現の考え方を知り、英語の発声方法を通して、話す・書くといった言語コミュニケーション能力を向上させる。また、芸術や自分自身の作品について、英語で表現し理解できる力を身に付ける。英語での表現方法の応用力を養うことで、自身及び自身の作品を世界に向けて発信する能力を伸ばす。	
		英語4	（英文）The goals of this course are to provide students focused vocabulary and grammar as well as writing structures for discussing their Designs, and practice in writing about, presenting and describing their own work at a professional level. Also the goals are to increase confidence and comfort in public speaking, and interest in other forms of art and design. （和訳）英語4では、英語の文章構造とそれに伴う単語や文法について学習し、芸術やデザインについて英語でディスカッションできるようになることを目的とする。さらに、ライティングの力を伸ばすことで、自身の作品を英語で表現し、プレゼンテーションできるようになることを目指す。英語でのコミュニケーション能力を向上させることで、公の場において英語で話すことへの自信を身に付ける。また、グローバルな視点で情報を得る力を伸ばし、芸術やデザインの様々な分野へのさらなる興味を促すことも目的とする。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎講義・演習科目		日本語1	日本語1では、大学でレポートや論文を書くための基本的な技術を養う。与えられた情報を整理し、レポートや論文にふさわしい形式と組み立て方で、自分が言いたいことが読者に誤解なく伝わるようにまとめることを学ぶ。文体レベルで気を付けるべき句読点や記号の使い方について学び、さらに事柄に視点をあてた客観的な文、主述関係、引用のしかた、参考文献表の書き方、アウトラインの作り方、報告型のレポートの書き方などを学ぶ。レポートや論文にふさわしい基本的な「形式」を身に付けることを目標とする。	
		日本語2	日本語2では、大学で学ぶために必要な、レポートを作成する方法を学ぶ。的確な表現を使い、正しい構造の文で、論理的な文章を書く力を身に付ける。また、さまざまなジャンルの作品における記述や批評をレポートし、合評における自分の作品のコンセプトや説明に役立てる。さらに、ショートショート、短編小説、エッセイ、新聞記事、論説文などさまざまなテキストを読み、あらすじをつかむ力を身に付け、解説文の必要な項目に着目する力を養う。また、簡単な批評や論文などを読み、作品のどこに着眼して批評が行われているかを考察する。	
		日本語3	日本語3では、日本語能力試験1級レベルの日本語能力の習得を目指す。文字・語彙、聴解、文法、読解の問題を解きながら、日本語への理解を深める。また、現代小説やエッセイに加え、新聞記事などの生きた教材を読み、日本語の読解力を伸ばし語彙力を身に付ける。読解問題に取り組む際には、まず語彙や表現について学習した上で、練習問題を解いて理解を深める。本文について話し合いレポートを作成することで、アカデミックな文章を書く技術を養う。	
		日本語4	日本語4では、日本語能力試験1級レベルの日本語能力の習得を目指す。漢字力と語彙力を伸ばし、時間や様子や関係などを表す機能語について理解を深める。また、現代小説やエッセイに加え、新聞記事などの生きた教材を読み、日本語の読解力を伸ばす。読解問題に取り組む際には、まず語彙や表現について学習した上で、練習問題を解いて理解を深める。また、アカデミックな文章を書く技術を養うため、論理的なレポートを作成する実習を行う。	
		フランス語1	フランス語1は、フランス語の初級会話の習得を目的とする。文法の学習とともに、聞き取り練習も多く行う。フランス語の表記と発音の関係を理解し、澱みなく発音できるようになることを目指す。そして会話練習に重点を置き、簡単な自己紹介をフランス語でできるようになることを目指す。文法においては、動詞の現在形を使った簡単な文章が作成できるようになることを目指す。また、フランスの美術、音楽、料理、ファッション、映画などに触れ、フランス文化への理解を深める。	
		フランス語2	フランス語2は、フランス語の初級会話の習得及び、フランス文化の知識を習得することを目的とする。テキストの会話文を繰り返し読み、会話特有の表現を習得する。また、練習問題を解きながら、新しい文法項目を学習する。さらに、テキスト以外の補助教材を用いて、フランス文化についての知識を広める。美術、音楽、料理、ファッション、映画などを鑑賞し、フランスとフランス人に対する理解を深めるとともに、フランスの文化気質について、日本語で議論を行う。	
		フランス語3	フランス語3は「フランス語2」に続き、フランス語の初級会話の習得及び、フランス文化の知識を習得することを目的とする。テキストの会話文を繰り返し読み、会話特有の表現を習得する。また、練習問題を解きながら、新しい文法項目を学習する。さらに、テキスト以外の補助教材を用いて、フランス文化についての知識を広める。美術、音楽、料理、ファッション、映画などを鑑賞し、フランスとフランス人に対する理解を深めるとともに、フランスの文化気質について、日本語で議論を行う。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎講義・演習科目		フランス語4	フランス語4は「フランス語2・3」に続き、フランス語の初級会話の習得及び、フランス文化の知識を習得することを目的とする。テキストの会話文を繰り返し読み、会話特有の表現を習得する。また、練習問題を解きながら、新しい文法項目を学習する。さらに、テキスト以外の補助教材を用いて、フランス文化についての知識を広める。美術、音楽、料理、ファッション、映画などを鑑賞し、フランスとフランス人に対する理解を深めるとともに、フランスの文化気質について、日本語で議論を行う。	
		中国語1	中国語1は、中国語の基本的な文の構造を学ぶとともに、発音システムや簡体字に触れ、中国語への理解を深める。はじめに、中国語の発音記号である「ピンイン」について学び、発音を習得する。続いて、簡単な挨拶や自己紹介のための表現方法を学び、自分の願望や経験について説明できる力を身に付ける。さらに、文法における時間的概念などを理解する。また、「簡体字」と呼ばれる中国の簡略化された漢字を学び、中国語の基本的な文の構造を理解する。	
		中国語2	中国語2では、「中国語1」で学習した基礎文法を押さえた上で、より複雑な文構造を学習する。まず、助動詞について学習し、聞き手に自分の意志や気持ちを伝える方法を習得する。また、結果補語、方向補語、可能補語といった、動詞を修飾する語句の使い方を習得する。また、使役文や受け身文を学び、それぞれの立場からの目線で言葉を表現する方法を学ぶ。基礎文法をおさえた上で、修飾語を乗せ、より幅広い中国語表現を習得することを目的とする。	
		中国語3	中国語3は、「中国語1」「中国語2」で発音及び基本的語彙や文型などをマスターした上で、より豊富な表現を身に付けることを目的とする。文法などの理論的学習を進めると同時に、ネイティブな基準で発音やイントネーションなどをチェックしていく。また、中国の歴史や文化、社会についても、教科書の内容と関連付けて紹介していく。語彙や文型の拡充によって、人間関係を考慮しながら自分の主張や考えを表現する初歩的な力を身に付けることを目的とする。	
		中国語4	中国語4は、「中国語1」「中国語2」及び「中国語3」を修了し、一定の口語力をマスターした上で、より高度な口語的実用力を身に付けることを目指す。文法など理論的学習を進めると同時に、ネイティブな基準で発音やイントネーションなどをチェックしていく。また、中国の歴史や文化、社会についても、教科書の内容と関連付けて紹介していく。語彙や文型の拡充によって、人間関係を考慮しながら自分の主張や考えを表現する、より高度な口語力を身に付けることを目的とする。	
		朝鮮語1	朝鮮語1は、日本に最も近い朝鮮半島の文化とその言葉に触れ、親しむことを目的とする。まずは韓国語の文字であるハングルの成り立ちから学び、正確に発音できるようになることを目指す。何度も繰り返して発音しながら書くことにより、耳と目と手から韓国語になじむよう進める。まずは文字が読め、書けて、やさしい会話ができるように訓練していく。また、民俗の風土や習俗等を紹介し、朝鮮半島の文化への理解を深める。	
		朝鮮語2	朝鮮語2は「朝鮮語1」に続き、日本に最も近い朝鮮半島の文化とその言葉に触れ、親しむことを目的とする。「朝鮮語1」に引き続き、文字を見て正確に発音できることを目指すとともに、韓国語で簡単な会話ができるようになることを目指す。また、韓国語の歌や漫画などを取り上げることで、簡単な会話の言い回しを学ぶとともに、韓国の文化や風習に触れる。また、民俗の風土や習俗等を紹介し、朝鮮半島の文化への理解を深めることも目的とする。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎講義・演習科目		朝鮮語3	朝鮮語3は「朝鮮語1」「朝鮮語2」で初級韓国語をマスターしたうえで、さらなる習熟をはかり、韓国語でコミュニケーションできるようになることを目指す。会話に必要な韓国語の基本的な文型や文法などを身に付け、日常会話能力を養う。実用的な会話の場面を掲示し、会話の練習を行うことで、単語及び文法を確実に身に付け、自然な基礎会話ができるように導く。また、韓国の絵本を読むことで朝鮮半島の文化および風習への理解を深める。	
		朝鮮語4	朝鮮語4は「朝鮮語3」に続き、韓国語のさらなる習熟をはかり、韓国語でのコミュニケーション能力を伸ばすことを目的とする。会話に必要な韓国語の基本的な文型や文法などを身に付け、日常会話能力を養う。実用的な会話の場面を掲示し、会話の練習を行うことで、単語及び文法を確実に身に付け、自然な基礎会話ができるように導く。また、韓国の絵本を読むことで朝鮮半島の文化および風習への理解を深める。	
		タイ語1	タイ語1では、タイ語を習得することによって、タイを身近に感じ、日タイの相互理解を深めることを目的とする。まずはタイ語の発音の特徴について学ぶ。次に挨拶などの基本的な表現を覚えて、初歩的な会話の力を身に付ける。タイの文字は子音文字と母音符号によって成り立っている。これらの書き方を練習して、簡単な読み書きができるようになることを目指す。さらに総合的な学習として、タイの文化を紹介し、タイをより身近に感じ、タイ語及び文化への理解を深める。	
		タイ語2	タイ語2では、「タイ語1」に続き、タイ語の習得を通して日タイの相互理解を深めることを目的とする。まずはタイ語の発音の特徴について学ぶ。次に挨拶などの基本的な表現を覚えて、初歩的な会話の力を身に付ける。タイの文字は子音文字と母音符号によって成り立っている。これらの書き方を練習して、簡単な読み書きができるようになることを目指す。さらに総合的な学習として、タイの文化を紹介し、タイをより身近に感じ、タイ語及び文化への理解を深める。	
		タイ語3	タイ語3では、「タイ語1」「タイ語2」で発音及びタイ語の基礎をマスターした上で、より豊富な表現と実用会話を身に付けることを目的とする。授業はタイ語を中心に進め、1対1の会話形式を行うことで、会話能力を高める。簡単な文章を読む練習を通して発音を強化するとともに、重要単語を習得して会話力の基礎を身に付ける。また、タイ語による問答や会話を反復練習することで、日常生活で通用するだけの会話能力を養う。	
		タイ語4	タイ語4では、日常生活に必要な生きたタイ語を滑らかに話せるようになることを目的とする。発音、ヒアリング、会話を重点的に指導し、初級会話の習得を目指す。タイ語独特の発音方法を習得するため、口の筋肉を使う練習を行い、発音の基礎を強化する。また、タイ語の文字や文法には、タイ独特の人間関係の社会構造が反映されているということを理解する。その上で、タイ文字一覧表を参考にしながらタイ語の読み書きを習得し、タイの社会構造についての理解を深める。	
		ドイツ語1	ドイツ語1では、聞く、読む、書く、話す、という言葉の４技能の練習を通して、ドイツ語の基礎を養い、日常生活を簡単なドイツ語で表現できるようになることを目指す。まずは、日常のあいさつや自己紹介をドイツ語で表現できるようになることを目標とする。また、ドイツ語を通じてドイツという国や文化に触れ、理解を深める。さまざまな場面での表現や決まり文句、基礎的な文法事項をしっかりと学び、最終的にはドイツ語技能検定試験５級に対応できるドイツ語の力を身に付けることを目標とする。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎講義・演習科目		ドイツ語2	ドイツ語2では「ドイツ語1」に続き、聞く、読む、書く、話す、という言葉の４技能の練習を通して、ドイツ語の基礎を養い、日常生活を簡単なドイツ語で表現できるようになることを目指す。予定や過去の出来事を話す力を身に付け、実際の生活や旅行等で役立つ会話力の習得を目指す。また、ドイツ語を通じてドイツという国や文化に触れ、理解を深める。さまざまな場面での表現や決まり文句、基礎的な文法事項をしっかりと学び、最終的にはドイツ語技能検定試験4級に対応できるドイツ語の力を身に付けることを目標とする。	
		ドイツ語3	ドイツ語3では、「ドイツ語1」「ドイツ語2」で一通りの初級文法を学習したうえで、その他の重要な文法項目を習得する。これにより、初級文法の完成を目指し、ドイツ語の基礎を定着させ、さらに応用させる力を身に付ける。同時に、聞く、読む、書く、話す、という言葉の４技能の練習を通して、コミュニケーション力のさらなる向上を目指す。また、身近な事柄についてドイツ語圏の諸事情を学ぶことにより、ドイツの社会や文化への理解を深める。	
		ドイツ語4	ドイツ語4では、「ドイツ語1」「ドイツ語2」「ドイツ語3」で学習した文法事項をもとに、長文読解力の向上を目指す。同時に、聞く、読む、書く、話す、という言葉の４技能の練習を通して、自分の日常生活全般についてドイツ語で表現できるようになることを目指す。さまざまな場面での表現や慣用句、初級文法全般にわたる知識を身に付ける。また、最終的にはドイツ語技能検定試験3級に対応できる実践的ドイツ語能力を養成することを目的とする。	
		スペイン語1	スペイン語1では、スペイン語での初級レベルの会話能力を養い、スペイン・中南米諸国の文化についての理解を深めることを目的とする。スペイン語の母音は日本語とほぼ同じであるため、日本人にとっては発音しやすい外国語である。その一方で、動詞の活用や男性名詞・女性名詞など英語にはない文法要素が多く、文法への理解を深める必要がある。本講義は、会話を中心に授業を進め、日常生活や旅行で使えるスペイン語を習得することを目指す。また、スペイン・中南米諸国の文化や社会についても紹介し、理解を深める。	
		スペイン語2	スペイン語2では、「スペイン語1」で学習した内容をさらに発展させ、特に会話能力を強化することを目的とする。スペイン語1に引き続き、会話を中心に授業を進め、日常生活や旅行で使えるスペイン語を習得することを目指す。また、過去時制について学び、現在･過去･未来の時制を使って会話ができる能力を身に付ける。修了時には、スペイン語検定5級合格レベルのスペイン語の能力を身に付けることを目的とする。	
		スペイン語3	スペイン語3では、「スペイン語1」「スペイン語2」でスペイン語の基礎をふまえた上で、より豊富な表現と実用会話を身に付けることを目的とする。「スペイン語1」「スペイン語2」と同じく会話を中心に授業を進め、さらなるスペイン語の会話力向上を目指す。現在形動詞の復習とともに、現在進行形、現在完了などの表現について学び、スペイン語会話の基礎力を磨く。また、スペイン・中南米諸国の文化や社会についても触れ、理解を深める。	
		スペイン語4	スペイン語４では、「スペイン語3」での学習内容をさらに発展させ、より豊富な表現と実用会話を身に付けることを目的とする。「スペイン語3」での学習に引き続き、過去時制・未来時制などについて学ぶことで、スペイン語会話の基礎力を強化させる。「スペイン語3」に引き続き、会話中心に授業を進め、なるべくスペイン語のみで授業ができるようになることを目指す。また、スペイン・中南米諸国の文化や社会についても触れ、理解を深める。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎講義・演習科目		教育学概論	教育学概論では、教育学の核心テーマを、人間の成長過程における「変容する心とその存在」であるとし、開かれた学習と心の変容の様々な可能性を探ることを目的とする。人間の生とは「出会い」を通して変容が可能であると言える。開かれた学習ないし教育の可能性は、その変容のプロセスを洞察することにかかっている。そのことをふまえたうえで、人のライフサイクルを様々な出会いの諸相として跡づけ、開かれた学習と心の変容の可能性について探る。	
		図書館概論	司書課程の導入として、図書館をできるだけ幅広い視野からとらえ、図書館への興味や関心を高めながら司書課程学習への基礎とする。図書館が果たす社会的役割と意義を知るとともに、図書館の基本的機能を理解する。図書館の誕生とその歴史について説明するとともに、現在の図書館に関する諸法規と行政による施策を紹介し、図書館の社会的背景を解説する。また図書館同士や類似の機関との間の相互協力の実際についても理解を深める。図書館員が守るべき倫理、図書館の自由など、知識社会の中心機関である図書館の原理についても学ぶ。	
		生涯学習概論	生涯学習概論では、現代社会における生涯学習の意義を理解し、日本の教育という大きな流れから生涯学習を考える視点を養う。まず、生涯教育が誕生するまでの日本の教育状況について把握し、生涯教育導入に至った経緯を把握する。そして、現代の具体的な学習課題を理解し、教育状況がかかえる課題について考察を深める。それらを学んだ上で、今後「生涯学習」に期待される課題について考え、社会における生涯学習の意義を自らの言葉で考察できるようになることを目指す。	
		人権教育論	私たちにとって差別とは何かについて考え、差別に対する自分のスタンスを確立することを目標とする。差別行為や差別語について学び、差別に対する意識を高めるきっかけとする。また差別発生のメカニズムや根拠について学び、なぜ差別がなくならないのかを探る。さらに、差別と区別、個性と差異などの違いについて学び、差別を減らすための手がかりとする。差別と向き合うことで「どうしたらいいのか」という原点に立ち戻り、自分自身の差別に対する姿勢を見つめ直すことを目的とする。	
		現代学校論	現代日本における学校の在り方を相対化することで、その特質について理解し、「学校」とはどういう場なのかを科学的に考察する。また、自分自身の被教育体験を検証し考察することで、今後、学校に対する自分自身の関わり方についての大まかなイメージを構築する。まず、近代学校システムの成立と日本への導入について学ぶ。続いて学校内の「モノ」から見る、近代から現代に至る日本の学校の在り方について考察する。さらに、地域社会と学校のつながりについて学び、これからの日本社会における学校の在り方を考察する。	
		ワークショップ1	芸術制作の初歩的な体験を通して、芸術の魅力に触れるとともに、芸術への理解を深めることを目的とする。デッサンや陶芸などの複数の芸術制作講座の中から興味のあるものを選択し、基礎的な制作の技法を学び、実際に制作を行う。その中で、芸術制作を通して自らを表現することの楽しさや魅力を感じ取る。制作の大まかな流れを習得するとともに、実際に手を動かして制作をすることで、作品を生み出すことの魅力を体感し、芸術世界に対する視野を広げる。	
		ワークショップ2	芸術制作の初歩的な体験を通して、芸術の魅力に触れるとともに、芸術への理解を深めることを目的とする。デッサンや陶芸などの複数の芸術制作講座の中から興味のあるものを選択し、基礎的な制作の技法を学び、実際に制作を行う。その中で、芸術制作を通して自らを表現することの楽しさや魅力を感じ取る。制作の大まかな流れを習得するとともに、実際に手を動かして制作をすることで、作品を生み出すことの魅力を体感し、芸術世界に対する視野を広げる。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎講義・演習科目		ワークショップ3	芸術制作の初歩的な体験を通して、芸術の魅力に触れるとともに、芸術への理解を深めることを目的とする。デッサンや陶芸などの複数の芸術制作講座の中から興味のあるものを選択し、基礎的な制作の技法を学び、実際に制作を行う。その中で、芸術制作を通して自らを表現することの楽しさや魅力を感じ取る。制作の大まかな流れを習得するとともに、実際に手を動かして制作をすることで、作品を生み出すことの魅力を体感し、芸術世界に対する視野を広げる。	
		ワークショップ4	芸術制作の初歩的な体験を通して、芸術の魅力に触れるとともに、芸術への理解を深めることを目的とする。デッサンや陶芸などの複数の芸術制作講座の中から興味のあるものを選択し、基礎的な制作の技法を学び、実際に制作を行う。その中で、芸術制作を通して自らを表現することの楽しさや魅力を感じ取る。制作の大まかな流れを習得するとともに、実際に手を動かして制作をすることで、作品を生み出すことの魅力を体感し、芸術世界に対する視野を広げる。	
		国内フィールドワーク1	日本国内の特定の地域に赴き、現地で調査研究を行う。自然や文学、歴史や社会といった文化的テーマを設定して、土地と人に触れながら調査を行う。対象を直接観察し、関係者に聞き取り調査を行うことで、肌で感じ考える力を養う。実際に足を使って調査をすることで、文献や資料調査にはない考察と視点を育む。現地に行くことではじめて知る課題や、現地の人たちと直接話すことで得られる共感や理解を通して、研究の視野を広げ、新しい価値観を得るきっかけとする。	
		国内フィールドワーク2	日本国内の特定の地域に赴き、現地で調査研究を行う。自然や文学、歴史や社会といった文化的テーマを設定して、土地と人に触れながら調査を行う。対象を直接観察し、関係者に聞き取り調査を行うことで、肌で感じ考える力を養う。実際に足を使って調査をすることで、文献や資料調査にはない考察と視点を育む。現地に行くことではじめて知る課題や、現地の人たちと直接話すことで得られる共感や理解を通して、研究の視野を広げ、新しい価値観を得るきっかけとする。	
		海外フィールドワーク1	海外の実習地に滞在して、その国の言葉や文化について学ぶ。「語学研修型」では、海外の現地大学を拠点に語学力を集中的に鍛えることを目的とする。「テーマ設定型」では、特定の地域に赴き、その土地や文化について調査・研究を行う。海外の文化や環境に触れ、ライフスタイルを体験することで、視野を広げ新しい価値観を育む。現地の人たちと直接話すことで得られる共感や理解を通して、その国や文化に対する理解を深めるとともに、肌で感じ考える力を身に付ける。	
		海外フィールドワーク2	海外の実習地に滞在して、その国の言葉や文化について学ぶ。「語学研修型」では、海外の現地大学を拠点に語学力を集中的に鍛えることを目的とする。「テーマ設定型」では、特定の地域に赴き、その土地や文化について調査・研究を行う。海外の文化や環境に触れ、ライフスタイルを体験することで、視野を広げ新しい価値観を育む。現地の人たちと直接話すことで得られる共感や理解を通して、その国や文化に対する理解を深めるとともに、肌で感じ考える力を身に付ける。	
		写真技法演習1	写真表現のための必要な基礎知識と技術を学び、作品制作やプレゼンテーション用の資料制作に役立てることを目的とする。主に、デジタルカメラによる撮影や画像編集を通して、写真表現の技術を高める。はじめに、光、カメラ、写真についての基礎知識を学ぶ。続いてライティングなどの実習を行いながら、実際に撮影トレーニングを行う。さらに、画像編集ソフトを用いた画像の編集及び修正技術を習得する。写真を用いて実際に作品を記録することで、自らの作品のプレゼンテーション能力を向上させる。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎講義・演習科目		写真技法演習2	「写真技法演習1」に引き続き、写真表現のための必要な基礎知識と技術を学び、作品制作やプレゼンテーション用の資料制作に役立てることを目的とする。主に、デジタルカメラによる撮影や画像編集を通して、写真表現の技術を高める。はじめに、光、カメラ、写真についての基礎知識を学ぶ。続いてライティングなどの実習を行いながら、実際に撮影トレーニングを行う。さらに、画像編集ソフトを用いた画像の編集及び修正技術を習得する。写真を用いて実際に作品を記録することで、自らの作品のプレゼンテーション能力を向上させる。	
		キャリアアップ演習1	デジタル画像編集におけるグラフィック描画ソフト「Adobe Photoshop」の基礎力を強化し、さらに発展的なテクニックを学ぶ。「Adobe Photoshop」は、デジタル画像編集のグラフィック描画ソフトにおいて世界標準とされている。写真の加工、画像補正、効果設定などの応用スキルを習得し、ビットマップ画像とベクトル画像への理解を深める。Photoshopの機能を理解し使いこなすことで、作業効率の改善を図り、より効果的な作品の見せ方を習得することを目標とする。	
		キャリアアップ演習2	ベクトルグラフィックソフト「Adobe Illustrator」の基礎力を強化し、さらに発展的なテクニックを学ぶ。「Adobe Illustrator」は、ベクトルグラフィックソフトの世界標準とされている。パス操作への理解を深めたうえで、パスの効果的な操作を学び、アピアランスやマスクなどの応用スキルを習得する。Illustratorの機能を理解し使いこなすことで、作業効率の改善を図り、より効果的な作品の見せ方を習得することを目標とする。	
		作品ポートフォリオ演習1	クリエイティブ職の就職に必要な「ポートフォリオ」を作成するスキルを身に付ける。まず就職活動の流れを理解し、ポートフォリオの概念および重要性について理解を深める。さらに、クリエイティブ業界・職種の概要を説明し、それぞれの業界・職種別にポートフォリオの傾向と対策を図る。実技面では、グラフィックソフトのAdobe PhotoshopとIllustratorを用いて、ポートフォリオの効果的な作成方法を習得する。これにより、ポートフォリオをブラッシュアップする際の効率化を図り、さらに複数社への同時エントリーに対応させる。ポートフォリオ作成に必要な知識とスキルを身に付けることで、将来の進路に対する準備と心構えを養う。	
		作品ポートフォリオ演習2	「作品ポートフォリオ演習1」に引き続き、ポートフォリオを作成するスキルを身に付ける。ポートフォリオの概念および重要性について理解を深めた上で、それぞれのクリエイティブ業界・職種別にポートフォリオの傾向と対策を図る。グラフィックソフトを用いたポートフォリオの効果的な作成方法を習得し、ポートフォリオをブラッシュアップする際の効率化を図る。ポートフォリオ作成に必要な知識とスキルを身に付けることで、将来の進路に対する準備と心構えを養う。	
		キャリアのためのデッサン1	今後の作家活動及び、クリエイティブ業界への就職活動で必要とされる、デッサンによる画力を向上させることを目的とする。クリエイティブ業界への就職活動では、いかなる作風や設定においても、デザインして作画していく力が求められる。その為、採用に関わるポートフォリオには鉛筆デッサン、ドローイングなどを掲載する必要がある。本講義では基本的なデッサン能力を身につけるとともに、卒業後の進路を見据えたデッサン作品を完成させることを目標とする。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎講義・演習科目		キャリアのためのデッサン2	「キャリアのためのデッサン1」に引き続き、デッサンによる画力を向上させるとともに、卒業後の進路を見据えたデッサン作品を完成させることを目標とする。「キャリアのためのデッサン2」では、明暗を表現するトレーニングを行い、モチーフの質感をつかむ力を向上させる。また、空間を把握する力を養い、魅力的な構図を生み出す方法を学ぶ。基本的なデッサン能力を身につけ、自身の作品とポートフォリオに活かすことを目的とする。	
		キャリアのためのデッサン3	「キャリアのためのデッサン1・2」に引き続き、デッサンによる画力を向上させるとともに、卒業後の進路を見据えたデッサン作品を完成させることを目標とする。「キャリアのためのデッサン3」では、風景や人物のデッサンを行う。有機的なモチーフを描くことにより、対象の質感や空気感を描く力を身に付ける。また、静物デッサンや細密描写も行う。基本的なデッサン能力を身につけ、自身の作品とポートフォリオに活かすことを目的とする。	
		キャリアのためのデッサン4	「キャリアのためのデッサン1～3」に引き続き、デッサンによる画力を向上させるとともに、卒業後の進路を見据えたデッサン作品を完成させることを目標とする。「キャリアのためのデッサン4」では、「キャリアのためのデッサン1～3」で学習した内容を発展させ、さらなる技術の向上を目指す。風景や静物デッサン、動物・人物デッサンを繰り返し、描画力に磨きをかける。デッサン力を伸ばすことで、表現の基礎を強化し、自身の作品やポートフォリオへと活かすことを目的とする。	
		クリエイティブの現場	実際にクリエイティブの現場で活躍している講師を招き、クリエイティブの現場から見た制作論を学ぶ。その中で、それぞれの現場で求められる「社会人としてのクリエイティブ力」についての考察を深めることを目的とする。本講義では、第一線で活躍中の作家やデザイナーやプロデューサーらを招き、クリエイティブの現場から見た制作論を紹介する。実際に現場で行われている物づくりのノウハウやプロセスを理解するとともに、クリエイティブな職業を目指す上での必要なものの考え方や発想法を身につける。	
		キャリアインターンシップ	財団法人大学コンソーシアム京都が窓口となって実施しているインターンシップ・プログラム制度を利用し、自分の将来に関連のある就業体験を行うことで、就業意識を高め、視野を広げることを目的とする。また、就職活動に先駆けて就業体験を積むことで、就職活動本番でのミスマッチを防ぐ。インターンシップとして実際に興味のある業界に就業することにより、学内だけでは学ぶことができない実質的な技術を習得する。社会勉強を通して、卒業後の進路を具体的に描き、今後の学生生活においての具体性な目的をともなった学習意欲を開発することを目的とする。	
学部専門講義科目	分野基盤科目群	ポピュラーカルチャー原論	ポピュラーカルチャーとはどのようなものであるかについて概説する。19世紀の産業革命により世界的な都市化が生じ、それまでとは異なる都市構造が出現した。そこには多くの人々が集合し、職業を持ち労働に従事するとともに、日々の娯楽が求められた。その娯楽の基軸となったのが、ポピュラーカルチャーである。歴史を概観したうえで、20世紀後半の文化状況の中で、ポピュラーカルチャーが獲得した重要な意味について考察し、21世紀前半におけるポピュラーカルチャーの具体像と意味と問題点を提示する。	
		クリエイティブ概論	複製性や再演性、商品性を特色とするポピュラーカルチャーにおいて、新しい文化的価値及び社会的価値とは何であるのかを考える。まず、物や作品といったクリエイティビィティの具体的様相が、どのような文脈の中で、新しさとして社会に到達するのかを概観する。そして、それらの価値が新しさとして評価され受け入れられていく過程を、図式的に提示する。具体的な人や作品や物や場を挙げ、その周りの環境とともに「クリエイティブ」とは何かを考えていく。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
学部専門講義科目	分野基盤科目群	サウンドデザイン概論	曲の構成単位である「サウンド（響き）」について考察を深め、それらを加工する際に前提となる問題意識や手法について学ぶ。身の回りのサウンドに耳を澄まし、日常生活の中でそれらがどのように利用されているかについて意識を高める。サウンドスケープの記録や調査に必要となる、フィールドレコーディングやサウンドマッピングについて学習する。また、利用者の意識調査などについても触れる。用途やシチュエーション、利用者の意識を考慮に入れることが、サウンドを扱う上での前提となっていることを理解する。	
		ファッションデザイン概論	「ファッションとは何か？」という根本的な問いに対して、様々なテーマを題材に、様々なアプローチで答えを探していく。ファッション・デザイナーの社会的な役割などについて理解を深め、制作者を目指す上で必須となるファッションの背景や知識について学習する。また、ファッションとアイデンティティ、あるいはファッションと身体の関係などについて考察を深め、私たちが生きる上でファッションがどれだけ重要な地位を占めているのかを理解する。	
		身体感覚構造概論	この講義では、まず身体論と感覚論の基本的な図式と理論を概説する。その際、ポピュラーカルチャーの現場とも関係する日常的な事例を焦点化して、身体と感覚の機能的・構造的あり方を論じる。また、人々の身体や日常における感覚に対する構図との差異や相同に注目する。その上で、ポピュラーカルチャーの諸現場で、理論的な身体理解や感覚理解、また、日常的な身体図式や感覚図式がどのような役割を果たすかについて講義する。	
		比較文化概論	文化というものは、土地や民族によってその発生や展開の仕方が異なる。そのため、ひとつの国やひとつの地域の文化を学ぶだけでは、世界の現状を見通すことはできない。本講義では、日本・アジア・ヨーロッパ・アメリカ・アフリカなど様々な地域を対象に、音楽やファッションにおける文化を比較検討していく。その中で、それらの文化が持つ共通点や相違点を浮き彫りにし、各地域の文化に対する理解度を深める。	
		ポピュラー音楽史	「大衆」という概念が生まれ「都市」が出現し、音楽生産の産業化が端緒についた十九世紀半ば以降のポピュラー音楽の歴史について学ぶ。主に、録音や再生技術、楽器、メディア、都市、社会構造、消費生活などの変遷を軸に考察を深める。日本におけるポピュラー音楽の変遷を主に扱うが、ジャズやワールドミュージック、ヒップホップなどの事例を通し、英米、欧州、アフリカ、アジアなどの様々な地域のポピュラー音楽史にも触れる。特に社会学や美学、経済学、政策学などの視座から、こうした歴史的変遷がどのように説明されてきたかについて考察を深める。	
		ファッション史	私たちが普段身につけている洋服の源流である、西洋の服飾の歴史について学ぶ。ファッションは社会情勢と深く関わっている。そのため、古代から現代までの服飾の流行の変遷をたどるだけでは、服飾の歴史を理解する上で十分とはいえない。本講義では、その時代の流行の背後にある思想や政治などの文脈なども押さえながら、西洋においてファッションがどのように発展してきたのかを理解する。その上で、現代のファッションを歴史的な観点から分析できるようになることを目的とする。	
		テクスト分析法研究	作品を分析し批評するには、そのためのツールを学ぶ必要がある。本講義では、音楽やファッションにおける「テクスト」を分析するための概念を学ぶ。また、音楽やファッションのみにとどまらず、広く文化一般におけるテクストの読み取り方や論じ方についても考察を深める。美術や映画、文学などさまざまな「テクスト」を分析するための概念を身に付ける。また、哲学・社会学・精神分析学など様々な理論の基礎を学び、作品＝テクストを論じる方法を身に付ける。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
学部専門講義科目	分野基盤科目群	作品作家研究	本講義では、文化を批評するにあたり基礎となる、作品論及び作家論の書き方を身につけることを目的とする。主に「テクスト分析法研究」で学んだ、テクストの読み取り方や分析するための概念及びアプローチを援用しながら、具体的に作品や作家を分析し論じる方法を身に付ける。授業では、毎回一人或いは複数の作家を取り上げ、どのように作品や作家を論じることができるかを検証する。具体例を挙げながら作品や作家を分析することで、実践的な批評の方法を学ぶ。	
		スタイル素材研究	ポピュラーカルチャーにおけるクリエイティビティとは、既存のスタイルを様々な方法で換骨奪胎して素材に分解し、引用し、流用する、その組み合わせ方のなかに見出される。本講義では、引用や間テクスト性などをキーワードに、ポピュラーカルチャーの作品を構成する素材について学習する。具体的な事例を踏まえながら、その美的・文化的・社会的コノテーションや、それらを可能にしている技術や技法について考える。また、身の回りから自らの創造行為に必要となる素材を見極め、それを歴史的な文脈と接合する感性を育む。	
		スタイル編集研究	スタイル編集研究では、ポピュラーカルチャーの作品を構成する素材がどのように作品として組み合わせられており、そのためにどのような手法や技術が投入され、それがどのようなクリエイティビティと結びついているのかを、実例を挙げながら紐解いていく。素材の作品への取り込み方や加工の仕方、他の素材との組み合わせ方について研究し、それがポピュラーカルチャーのなかでどのような含意を持ちうるのかについての問題意識を育み、素材のもつコノテーションや間テクスト性をどのように活かすべきなのかについての意識を高める。	
		舞台表現論	舞台表現とはどのようなもので、どのような広がりを持つのかを、歴史的視点と比較文化的視点を踏まえながら考察する。その上で、ポピュラーカルチャーにおける舞台表現とは何であるのか、その関係性について具体的な事例に即しながら講義し、考察を深める。最後に、舞台表現の諸ジャンルの最近のあり方と、そこから見えてくる未来に向けた方向性を論じる。舞台表現の諸位相と基本的コンセプトの習得を目指す。	
		身体表現論	身体表現の種類や範囲について、歴史的な視点を踏まえながら考察する。その上で、日常における身体表現と、ポピュラーカルチャーにおける身体表現と、芸術的身体表現の差異とつながりを整理し、それらの関係をどのように考えることができるかについて事例をあげつつ講義する。最後に、身体表現の諸ジャンルの最近のあり方と、そこから見えてくる未来に向けた方向性を論じる。身体表現の諸位相と基本的コンセプトを習得する。	
		視聴覚表現論	映画、アニメ、テレビCM、ビデオゲーム、ミュージックビデオ、サウンドロゴなどを事例に、視覚と聴覚を総合した表現の可能性について的確に分析できる能力を養うことを目的とする。映画と伴奏音楽の歴史などを参照しながら視聴覚表現の歴史的な展開を理解し、それを分析する方法の変遷をたどることを通して視覚表現と聴覚表現がどのような相互補完関係を持ってきたかについて学ぶ。具体的な視聴覚作品を分析する作業を通して、映像に音をつける際の様々な発想法や手法を身につける。	
		ストリート表現論	ストリートという公共空間を流用した芸術表現や文化運動について、事例を紹介しつつ分析していく。表現形式や手法のみならず、例えば同じ公共空間を彩っている企業広告などとの比較を通して、そのような表現を成立させている場所の社会的・文化的位置づけやその意味、その経済的、政治的、文化的背景を紐解いていく。また、インターネットやコンピュータ等のデジタル技術を特定の物理的な場所と相関させた新しいタイプのストリート表現や、パブリックアート、ソーシャルアートについても先端事例を紹介し、その可能性を検証する。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
学部専門講義科目	文化理論科目群	ポップ批評	ポピュラーカルチャーの作品の意味と価値を様々な視点から検証し、それを的確な言葉で伝えるために必要な方法を習得する。同じひとつの作品が持ちうる多様な解釈を、作品論、作家論、経済批評、フェミニズム批評など様々な立ち位置から説明し、それぞれの立ち位置に沿った批評の方法について紹介する。また、批評の説得力を担保する上で不可欠となる作品の分解の仕方や資料収集の方法についても説明する。最終的には、批評という行為が持つ社会的・経済的意味そのものについても考察する。	
		ポップ美学	ポップ美学では、まずプラトンやアリストテレスによって組織化された美学概念を図式化して提示する。さらに、西洋地域で近代に展開した美学について図式的に示す。それらをふまえた上で、ポピュラーカルチャーというものへの美学的批評や批判を捉え直し、ポピュラーカルチャーを中軸に据えた美学の構想を示す。マンガ、アニメ、ゲーム、ライトノベル、ダンス、ファッション、ポップミュージックなどを貫く美学的な原理を素描し、20世紀末から広がった、クールジャパンという美的意識や、カワイイという美的感覚を、理念型化する可能性について論じる。	
		文化社会学	ポピュラーカルチャーの諸実践について、社会学的な視座から分析する方法を習得し、自らの制作活動を社会と結びつける際に不可欠となる社会学的な感性を養う。ポピュラーカルチャーは定義上「商品」として流通することを前提としているが、金銭的な価値の多寡だけでは説明できない文化的・社会的な属性や価値を有している。これらについて分析する方法を身に付け、そのために必要となる調査法について学ぶ。自分自身の好みを相対化し、作品の制作や流通のプロセスにおいても文化社会学的な視点に立った戦略立てが不可欠であるという意識を高める。	
		メディア論	ポピュラーカルチャーに深く関わっている様々なメディア技術について、記号論やコミュニケーション理論を手がかりに、その社会的、文化的含意を理解する。マスコミュニケーションの成立に不可欠な活字、ラジオ、テレビが大衆のライフスタイルや流行にどのような影響を及ぼしてきたか、そしてそれらの共存関係がどのように変化してきたかを概観する。また、それを踏まえた上でインターネット技術が今日どのような意義を持つのかを検証し、今後のメディアのあり方を考える。	
		文化装置論	近代の都市社会の中で重要な意味を持つ「文化装置」に関し、その起源、歴史、意味について考察していく。「国家装置」が国民国家へ従属する主体を形成するのに対し、「文化装置」は国民国家を超える文化的・社会的主体を形成すると考えられる。その意義を具体的に、事例を挙げながら探る。また、ポピュラーカルチャーと「文化装置」の関係についても、具体的に提示する。それらを通して、ポピュラーカルチャーが創出する主体とは何であるか、考察を深める。	
		サブカルチャー論	サブカルチャーはもともとマイノリティの文化であったと言える。しかし現代においてはしばしば「サブカル」の名のもとに大衆文化としての側面を持ち、ポピュラーカルチャーとして扱われている。本講義では、現代日本の文化を理解するために必要不可欠な、マンガ・アニメ・ドラマ・Jポップなどのサブカルチャーの分析方法を学ぶ。また、各ジャンルの作品群の分析をもとに、現代社会の諸相を浮き彫りにすることを目指す。	
		広告文化論	雑誌やテレビ、インターネット、都市空間などを使った広告の最新事例を通して、その手法を分析すると共に、現代社会における広告の位置づけや意義について考察する。広告表象の記号学的分析を通し、広告というコミュニケーションがどのような記号のメカニズムを通して成立しているかについて考える。また、商品の魅力や機能、性能などを端的に消費者に伝えるために、「文化」がどのように使われているのかを検証し、その利点と限界について考える。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
学部専門講義科目	文化理論科目群	近代社会文化誌	本講義ではまず、近代とはどのような特色を持った時代であり空間なのか、また、どのような特色ある現象なのかを概観する。その上で、具体的な文化現象と社会現象を取りあげ、その起源、移動、拡散、転換、発展などの諸相をたどることを通して、近代の社会と文化の特質を図式化する。それらをふまえて、そうした特質とポピュラーカルチャーの関連性について、ジャンル間の相互関連を視野に入れながら、具体的な現象を追いつつ考察する。これらを通して、近代における社会と文化の基本的枠組みを習得する。	
		京都の文化装置1	京都の文化装置の歴史と意味について論じる。具体的なムーブメントや社会意識の変動につれて、京都での文化装置がどのように変容し、どのように新たに創造されたかについて学ぶ。たとえば、明治末期から大正期にかけて出現したカフェと現在の喫茶店やカフェのつながりや差異、1925年以降大きな役割を担った映画事業の役割、1970年代に青年文化や音楽文化の拠点となった喫茶店の意味など、京都における具体的事例を学びながら、都市における文化装置の役割を事例的かつ具体的に学習する。	
		京都の文化装置2	京都の文化装置の現状について、その問題点と広がりを論じる。最近まで運営されていた文化装置及び、現在営業されている文化装置の事例を取りあげ、その文化的意味、社会的意味、観光的意味を資料や当事者の声をもとに、より臨床的かつ現場的に学ぶ。さらに、その経営戦略と経営成績、コンセプトとコンテンツについて、より広い社会的文脈と関係づけながら基本的な枠組みをまとめ、考察を深める。	
	コンテンツ・ビジネス科目群	文化産業研究概論	20世紀初頭、大量複製技術の普及と大衆市場の出現により、「文化」が「商品」として工場で大量生産されるようになった。当初の悲観的な見方から、コンテンツ産業・クリエイティブ産業ということばで示されるような最近の議論に至るまで、産業的な文化の生産及びその消費というものがどのように分析され、理解されてきたかを概観する。音楽産業やファッション産業の事例を中心に、さらに出版やゲームなどの周辺産業やテレビやラジオなどのメディア産業など、音楽やファッションを取り巻く様々な産業についても扱う。	
		知的財産権概論	今日の音楽ビジネスやブランドビジネスでは、コンテンツそのものの販売益よりも、楽曲の二次使用料やブランドのライセンス料など、知的財産権による収益の占める割合が高くなっている。クリエイティブな活動をするうえで不可欠なものとなっている知的財産権ビジネスの仕組みについて、具体的な事例をあげながら知識を深める。また、知的財産権を守ることの意義や方法について学ぶ。さらに、過度の権利保守が文化的なクリエイティビティの抑制につながる可能性についても意識を高める。	
		マーケティング論	マーケティング論では、人びとや社会に潜在するニーズを見出すための視点や調査法について学ぶ。マーケティングの基礎とは、自分の制作した作品を理解し、意義を見出してくれる人を見つけることである。それゆえ、経済的な利益だけではなく、文化的・社会的な利益を持続可能なかたちで追求していくことが必要である。そのために必要な発想法、分析法、そして実践的な戦略について具体的な事例と共に考察し、新しいマーケティングのかたちを模索する。	
		文化政策論	文化が国や地方自治体の政策の中に位置づいてきた過程とその意味について、世界的動向及び歴史も見据えて考察し、現在の文化政策とはどのようなものであるのかについて概観する。さらに、現在の国と地方自治体の文化政策の方向と傾向を整理し、特に京都市や京都府における文化政策の特徴と問題点を講義する。最後に、ポピュラーカルチャーやコンテンツ生産がどのような形で文化政策的に扱われるのか、その事例や可能性をまとめ、文化政策の基本的な枠組みを習得する。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
学部専門講義科目	コンテンツ・ビジネス科目群	アートプロデュース論	アートは作家だけで成立する世界ではない。キュレーター、ギャラリスト、批評家、ジャーナリストなどによって、作家や作品が社会へと結びつけられることも多い。本講義では、アートの現場である美術館、ギャラリー、展覧会、ビエンナーレなどにおいて、作家のプロデュースやサポートがどのようになされているかを学ぶ。これらに加えて、ビジネス的側面があまり語られることのないアートの世界で、市場がどのように機能しているのかについても理解する。	
学部専門実技科目	基幹表現科目群	基礎実習1	ポピュラーカルチャーを担う「もの」「場」「メディア」の中で、「もの」は商品として流通するという点で大きな役割を担っている。この授業では、その「もの」をつくっていく上での導入的な実習を行う。「もの」は、ポピュラーカルチャーにとってどのような部分であるのか、どのようなデザインや形や素材から構成されるのかについて、実習を通して学ぶ。また、「もの」が人や社会のどのようなつながりの中にあるのかについて考察する。「もの」全体からその構成要素や「部分」へという観点を重視して、授業を進める。	
		基礎実習2	「基礎実習１」に引き続き、「基礎実習１」とは異なったテーマと課題を設け、「もの」をつくっていく上での導入的な実習を行う。「もの」は、ポピュラーカルチャーにとってどのような部分であるのか、どのようなデザインや形や素材から構成されるのかについて、実習を通して学ぶ。また、「もの」が人や社会のどのようなつながりの中にあるのかについて考察する。「もの」全体からその構成要素や「部分」へという観点を重視して、授業を進める。	
		基礎実習3	「基礎実習１・2」に引き続き、「基礎実習１・2」とは異なったテーマと課題を設け、「もの」をつくっていく上での導入的な実習を行う。「もの」は、ポピュラーカルチャーにとってどのような部分であるのか、どのようなデザインや形や素材から構成されるのかについて、実習を通して学ぶ。また、「もの」が人や社会のどのようなつながりの中にあるのかについて考察する。「もの」全体からその構成要素や「部分」へという観点を重視して、授業を進める。	
		基礎実習4	「基礎実習1・2・3」での導入的実習をより深め、制作実習につなげるスキルを身につけることを目的とする。商品として流通する「もの」が、どのように構築され、どういう形で構成されるのかについて学ぶ。「部分」から「全体」へという視点で、ポピュラーカルチャーの様々なジャンルの「もの」づくりについて学習する。「もの」が社会とどうつながるのか、また人々へどう届けるのかについて、実習を通して学び、ものづくりの基礎を身に付ける。	
		基礎実習5	「基礎実習4」に引き続き、制作実習につなげる基本的なスキルを磨くことを目的とする。「部分」から「全体」へという視点で、ポピュラーカルチャーの様々なジャンルの「もの」づくりについて学習する。基礎実習5では、基礎実習2で学んだ内容をさらに発展させ、ものを作ることについて考察を深める。「もの」が社会とどうつながるのか、また人々へどう届けるのかについて、実習を通して学び、ものづくりの基礎を身に付ける。	
		基礎実習6	「基礎実習4・5」に引き続き、制作実習につなげる基本的なスキルを磨くことを目的とする。「部分」から「全体」へという視点で、ポピュラーカルチャーの様々なジャンルについて学習する。基礎実習6では、「届ける」ということをテーマに考察を深める。音楽やファッションを、どのように社会につなげるのか、また人々へどう届けるのかについて、実習を通して学ぶ。コンセプトを明らかにしながらより魅力的に表現する方法を見つけ出し、様々な形で「届ける」方法について学んでいく。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
学部専門実技科目	基幹表現科目群	制作実習1	「基礎実習1～6」での導入的実習で身に付けた「もの」づくりへの基礎をふまえて、より発展的な制作スキルを習得する。ポピュラーカルチャーを担う「もの」「場」「メディア」づくりの基本的な技術を、ファッションやサウンドといったいくつかのポピュラーカルチャーのジャンルの中で、具体的かつ実践的に学習する。その中で、ポピュラーカルチャーの商品性や娯楽性という側面が、社会とどのように連動するのかを考える姿勢を身に付けていく。	
		制作実習2	「制作実習1」に引き続き、より発展的な制作スキルを習得する。「基礎実習１」とは異なったテーマと課題を設けた上で、ポピュラーカルチャーを担う「もの」「場」「メディア」づくりの基本的な技術を習得する。ファッションやサウンドといったいくつかのポピュラーカルチャーのジャンルの中で、具体的かつ実践的に学習する。その中で、ポピュラーカルチャーの商品性や娯楽性という側面が、社会とどのように連動するのかを考える姿勢を身に付けていく。	
		制作実習3	「制作実習1・2」での基礎的スキルを、さらに深化し発展させた実習を行う。各ジャンルにおいて、作品を完成へ導くプロセスを見直し、次年度以降の制作へ応用するために必要なスキルと技能を身に付ける。制作実習3では、制作実習1のテーマをさらに発展させ、技能を磨いていく。その上で、ポピュラーカルチャーを担う「もの」「場」「メディア」を完成形まで作り上げる。さらにその完成物について自ら説明し、第三者による解釈や批評を受けることを通して、獲得したスキルを再把握できる力を身に付ける。	
		制作実習4	「制作実習3」に引き続き、「制作実習1・2」での基礎的スキルを、さらに深化し発展させた実習を行う。各ジャンルにおいて、作品を完成へ導くプロセスを見直し、次年度以降の制作へ応用するために必要なスキルと技能を身に付ける。制作実習4では、制作実習2のテーマをさらに発展させ、技能を磨いていく。その上で、ポピュラーカルチャーを担う「もの」「場」「メディア」を完成形まで作り上げる。さらにその完成物について自ら説明し、第三者による解釈や批評を受けることを通して、獲得したスキルを再把握できる力を身に付ける。	
		領域横断基礎演習1	ポピュラーカルチャーは複数のジャンルやサブジャンルに分かれている。しかし、総体としてはネットワーク化しており、ジャンル間に横断が見られる。そうしたポピュラーカルチャーの性格や社会的なあり方をより深く把握し、自らが主要に関わるジャンルとは異なる領域のポピュラーカルチャーや表現領域のスキルを獲得することで、自らの表現活動の幅を広げることを目的とする。表現的なアウトプットを行うことで、自由制作や卒業制作に関わるスキルとアイディアを入手する。	
		領域横断基礎演習2	「領域横断基礎演習1」で学んだ内容をさらに発展させ、ファッションと音楽の双方をまたぐジャンルについてより深い知識を習得する。ポピュラーカルチャーの性格や社会的なあり方をより深く把握し、自らが主要に関わるジャンルとは異なる領域のポピュラーカルチャーや表現領域のスキルを獲得することで、自らの表現活動の幅を広げることを目的とする。表現的なアウトプットを行うことで、自由制作や卒業制作に関わるスキルとアイディアを入手する。	
		応用実習1	「制作実習1～4」で学んだ基礎的スキルを基に、ポピュラーカルチャー及びサブジャンルにおける、より発展的な制作スキルの習得を目指す。ポピュラーカルチャーを担う「もの」「場」「メディア」づくりのプロセスを、実習を通して一通り体験する。その中で、ポピュラーカルチャーの各ジャンルでの「ものづくり」の内実を学ぶ。また「場」の組み立て方を学び、さらに「メディア」の形を作る方法についても学習する。それらの過程を通じて、市場を通して人々に提供できる物を作る力を身に付け、方向性を探っていく。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
学部専門実技科目	基幹表現科目群	応用実習2	「応用実習1」に引き続き、ポピュラーカルチャー及びサブジャンルにおける、より発展的な制作スキルの習得を目指す。「応用実習１」とは異なったテーマと課題を設け、ポピュラーカルチャーを担う「もの」「場」「メディア」づくりのプロセスを、実習を通して一通り体験する。その中で、ポピュラーカルチャーの各ジャンルでの「ものづくり」の内実を学ぶ。また「場」の組み立て方を学び、さらに「メディア」の形を作る方法についても学習する。それらの過程を通じて、市場を通して人々に提供できる物を作る力を身に付け、方向性を探っていく。	
		応用実習3	「応用実習1・2」での実習体験とそこで獲得したスキル及び技能や方向性を、さらに深化し発展させる。4年次での自由制作や卒業制作を見据えた上で、それに関係した視点や方法を習得し、企画を立ち上げる力を身に付ける。応用実習3では、応用実習1で学んだ課題をさらに発展させ、より高度な技能を獲得する。さらに自らのテーマ設定に関係する歴史や現状の情報を収集し把握する。その上で、ポピュラーカルチャーを担う「もの」「場」「メディア」を、市場との関係を測り、人々の欲望を分析しながら、完成形まで作り上げる。	
		応用実習4	「応用実習3」に引き続き、スキル及び技能や方向性をさらに深化し発展させる。4年次での自由制作や卒業制作を見据えた上で、それに関係した視点や方法を習得し、企画を立ち上げる力を身に付ける。応用実習4では、応用実習2で学んだ課題をさらに発展させ、より高度な技能を獲得する。さらに自らのテーマ設定に関係する歴史や現状の情報を収集し把握する。その上で、ポピュラーカルチャーを担う「もの」「場」「メディア」を、市場との関係を測り、人々の欲望を分析しながら、完成形まで作り上げる。	
		領域横断演習1	本講義では「領域横断基礎演習1・2」をふまえ、異なる表現領域における、より高度なスキルを獲得することを目的とする。ポピュラーカルチャーは複数のジャンルやサブジャンルに分かれているが、総体としてはネットワーク化しておりジャンル間に横断が見られる。本講義では、自らが主要に関わるジャンルとは異なる領域のポピュラーカルチャーや表現領域のスキルを獲得することで、自らの表現活動の幅を広げることを目的とする。表現的なアウトプットを行うことで、自由制作や卒業制作に関わるスキルとアイディアを入手する。	
		領域横断演習2	「領域横断演習1」での学習をさらに発展させ、異なる表現領域におけるより高度なスキルを獲得することを目的とする。ポピュラーカルチャーは複数のジャンルやサブジャンルに分かれているが、総体としてはネットワーク化しておりジャンル間に横断が見られる。本講義では、自らが主要に関わるジャンルとは異なる領域のポピュラーカルチャーや表現領域のスキルを獲得することで、自らの表現活動の幅を広げることを目的とする。表現的なアウトプットを行うことで、自由制作や卒業制作に関わるスキルとアイディアを入手する。	
		自由制作1	大学4年間の実習や演習、講義聴講、自主学習の集大成である卒業制作に向けて準備となる制作を行う。ポピュラーカルチャーを担う「もの」「場」「メディア」の制作、或いはそれらに関わるプロジェクトを行う。「基礎実習」「制作実習」「応用実習」などを通して得たスキルやネットワークを基盤とし、制作を進める。自らのポピュラーカルチャーへの姿勢と思想を明確化した上で、自らのアイデンティティと関わるテーマを設定する。相互の教員や外部者による講評を受けながら完成度を高める。	
		自由制作2	「自由制作1」に引き続き、卒業制作に向けて準備となる制作を行う。ポピュラーカルチャーを担う「もの」「場」「メディア」の制作、或いはそれらに関わるプロジェクトを行う。「基礎実習」「制作実習」「応用実習」などを通して得たスキルやネットワークを基盤とし、制作を進める。自らのポピュラーカルチャーへの姿勢と思想を明確化した上で、自らのアイデンティティと関わるテーマを設定する。相互の教員や外部者による講評を受けながら完成度を高める。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
学部専門実技科目	基幹表現科目群	自由制作3	「自由制作1・2」に引き続き、卒業制作に向けて準備となる制作を行う。ポピュラーカルチャーを担う「もの」「場」「メディア」の制作、或いはそれらに関わるプロジェクトを行う。「基礎実習」「制作実習」「応用実習」などを通して得たスキルやネットワークを基盤とし、制作を進める。自らのポピュラーカルチャーへの姿勢と思想を明確化した上で、自らのアイデンティティと関わるテーマを設定する。相互の教員や外部者による講評を受けながら完成度を高める。	
		卒業制作1	「自由制作1・2・3」でのプロセスと成果を基礎にして、大学4年間の学習及び実践の成果物を制作する。成果物は、ポピュラーカルチャー及びサブジャンルに関わる「もの」「場」「メディア」であり、広義の意味での批評や研究が内在化され、クリエイティブな批判精神が内面化されたものであることが求められる。また、市場性や商品性を備えた上でオリジナルなもの、表現の多様性と新しい価値観の可能性を開示するものが求められる。合わせて、成果を社会へ届ける形を作るために、一般の人々へ向けた公の場での発表がのぞまれる。	
		卒業制作2	「卒業制作1」に引き続き、大学4年間の学習及び実践の成果物を制作する。成果物は、ポピュラーカルチャー及びサブジャンルに関わる「もの」「場」「メディア」であり、広義の意味での批評や研究が内在化され、クリエイティブな批判精神が内面化されたものであることが求められる。また、市場性や商品性を備えた上でオリジナルなもの、表現の多様性と新しい価値観の可能性を開示するものが求められる。合わせて、成果を社会へ届ける形を作るために、一般の人々へ向けた公の場での発表がのぞまれる。	
		卒業制作3	「卒業制作1・2」に引き続き、大学4年間の学習及び実践の成果物を制作する。成果物は、ポピュラーカルチャー及びサブジャンルに関わる「もの」「場」「メディア」であり、広義の意味での批評や研究が内在化され、クリエイティブな批判精神が内面化されたものであることが求められる。また、市場性や商品性を備えた上でオリジナルなもの、表現の多様性と新しい価値観の可能性を開示するものが求められる。合わせて、成果を社会へ届ける形を作るために、一般の人々へ向けた公の場での発表がのぞまれる。	
	表現融合科目群	企画演習1	ポピュラーカルチャーの各ジャンルや各サブジャンル、また、ポピュラーカルチャー以外の諸文化領域などで、各諸領域をまたぎ、繋いでいる表現活動、或いはジャンルが特定しにくいような表現活動について、実践的に学習する。その中で、自らの視野やスキルやネットワークを広げる方法を獲得する。表現活動の実践だけでなく、企画立案や発信についても実践を通して身に付ける。同時に、その表現活動が、どのように社会と関わり、歴史的・現代的文脈と関わるかについても、実践を通して学んでいく。	
		企画演習2	「企画演習1」に引き続き、各文化領域を繋いでいる表現活動や特定のジャンルに当てはまらない表現活動について実践的に学習する。その中で、自らの視野やスキルやネットワークを広げる方法を獲得する。「企画演習1」とは異なるテーマから表現活動の実際について学び、新たな可能性を探っていく。また、企画立案や発信についても実践を通して身に付ける。同時にその表現活動が、どのように社会と関わり、歴史的・現代的文脈と関わるかについても、実践を通して学んでいく。	
		企画演習3	「企画演習1・2」に引き続き、各文化領域を繋いでいる表現活動や特定のジャンルに当てはまらない表現活動について実践的に学習する。その中で、自らの視野やスキルやネットワークを広げる方法を獲得する。「企画演習1・2」とは異なるテーマから表現活動の実際について学び、新たな可能性を探っていく。また、企画立案や発信についても実践を通して身に付ける。同時にその表現活動が、どのように社会と関わり、歴史的・現代的文脈と関わるかについても、実践を通して学んでいく。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
学部専門実技科目	表現融合科目群	企画演習4	「企画演習1～3」に引き続き、各文化領域を繋いでいる表現活動や特定のジャンルに当てはまらない表現活動について実践的に学習する。その中で、自らの視野やスキルやネットワークを広げる方法を獲得する。「企画演習1～3」とは異なる新たなテーマから表現活動の実際について学び、新たな可能性を探っていく。また、企画立案や発信についても実践を通して身に付ける。同時にその表現活動が、どのように社会と関わり、歴史的・現代的文脈と関わるかについても、実践を通して学んでいく。	
		企画演習5	「企画演習1～4」に引き続き、各文化領域を繋いでいる表現活動や特定のジャンルに当てはまらない表現活動について実践的に学習する。その中で、自らの視野やスキルやネットワークを広げる方法を獲得する。「企画演習1～4」とは異なる新たなテーマから表現活動の実際について学び、新たな可能性を探っていく。また、企画立案や発信についても実践を通して身に付ける。同時にその表現活動が、どのように社会と関わり、歴史的・現代的文脈と関わるかについても、実践を通して学んでいく。	
		企画演習6	「企画演習1～5」に引き続き、各文化領域を繋いでいる表現活動や特定のジャンルに当てはまらない表現活動について実践的に学習する。その中で、自らの視野やスキルやネットワークを広げる方法を獲得する。「企画演習1～5」とは異なる新たなテーマから表現活動の実際について学び、新たな可能性を探っていく。また、企画立案や発信についても実践を通して身に付ける。同時にその表現活動が、どのように社会と関わり、歴史的・現代的文脈と関わるかについても、実践を通して学んでいく。	
	メディア制作科目群	メディア制作1	メディア制作科目群は、ポピュラーカルチャーを中心とした表現活動や制作活動で必要となる制作ツールや表現技法の使い方を学ぶ。ツール使用法や表現技法それ自体を学ぶとともに、そうしたスキルを通して、形になる作品を残すことを到達点とする。以上の基本方針をふまえて、メディア制作1では、制作ツールとしての写真技術を学び、成果物を作り上げる。背景の選択や構図のとり方、光の利用や空間の活用、媒体の性格に応じた対応や機材の特質などを学びながら、表現活動や制作活動で使いこなせる写真技術を獲得する。	
		メディア制作2	メディア制作科目群は、ポピュラーカルチャーを中心とした表現活動や制作活動で必要となる制作ツールや表現技法の使い方を学ぶ。ツール使用法や表現技法それ自体を学ぶとともに、そうしたスキルを通して、形になる作品を残すことを到達点とする。以上の基本方針をふまえて、メディア制作2では、表現技法としてのグラフィックを学び、成果物を作り上げる。まず、フォトショップやイラストレーターなどの基本的なグラフィック用ソフトの基礎を学び、最終的には、様々な局面で応用可能なスキルを獲得する。	
		メディア制作3	メディア制作科目群は、ポピュラーカルチャーを中心とした表現活動や制作活動で必要となる制作ツールや表現技法の使い方を学ぶ。ツール使用法や表現技法それ自体を学ぶとともに、そうしたスキルを通して、形になる作品を残すことを到達点とする。以上の基本方針をふまえて、メディア制作3では、制作ツールとしての映像技術を学び、成果物を作り上げる。機材の特色や種類、撮影の仕方の多様性、構想の実地化方法、演出や編集の基礎などを学び、表現活動や制作活動で使いこなせる映像技術を獲得する。	
		メディア制作4	メディア制作科目群は、ポピュラーカルチャーを中心とした表現活動や制作活動で必要となる制作ツールや表現技法の使い方を学ぶ。ツール使用法や表現技法それ自体を学ぶとともに、そうしたスキルを通して、形になる作品を残すことを到達点とする。以上の基本方針をふまえて、メディア制作4では、表現技法としてのボイス＆リズムを学び、成果物を提示する。音や声を作る身体技法、息継ぎによりリズムをとる技法、言葉と声の関係を意識化する技法などを学び、自らの身体を通して表出する表現技法を獲得する。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
学部専門実技科目	メディア制作科目群	メディア制作5	メディア制作科目群は、ポピュラーカルチャーを中心とした表現活動や制作活動で必要となる制作ツールや表現技法の使い方を学ぶ。ツール使用法や表現技法それ自体を学ぶとともに、そうしたスキルを通して、形になる作品を残すことを到達点とする。以上の基本方針をふまえて、メディア制作5では、エディトリアル技術を学び、成果物を作成する。DTPの一連の技術を、インデザインなどのソフト使用法を学びつつ習得し、ページレイアウトや装丁や編集などのエディトリアル技術を獲得する。	
		メディア制作6	メディア制作科目群は、ポピュラーカルチャーを中心とした表現活動や制作活動で必要となる制作ツールや表現技法の使い方を学ぶ。ツール使用法や表現技法それ自体を学ぶとともに、そうしたスキルを通して、形になる作品を残すことを到達点とする。以上の基本方針をふまえて、メディア制作6では、ウェブ制作及びデザイン技術を学び、成果物を立ち上げる。ウェブ構築言語の基礎を学び、ウェブ制作ソフトの使用法を習得しつつ、ウェブデザインの構築編集作業を学び、表現活動や制作活動を発信可能とするウェブ制作・デザイン技術を獲得する。	
		メディア制作7	メディア制作科目群は、ポピュラーカルチャーを中心とした表現活動や制作活動で必要となる制作ツールや表現技法の使い方を学ぶ。ツール使用法や表現技法それ自体を学ぶとともに、そうしたスキルを通して、形になる作品を残すことを到達点とする。以上の基本方針をふまえて、メディア制作7では、プレゼンテーション技術を学ぶ。ある商品やイベントなどを、パワーポイントなどのプレゼンテーションツールを用いて、効率的にプレゼンテーションする過程を学び、表現活動や制作活動を効果的円滑に進めるプレゼンテーション技術を獲得する。	
		メディア制作8	メディア制作科目群は、ポピュラーカルチャーを中心とした表現活動や制作活動で必要となる制作ツールや表現技法の使い方を学ぶ。ツール使用法や表現技法それ自体を学ぶとともに、そうしたスキルを通して、形になる作品を残すことを到達点とする。以上の基本方針をふまえて、メディア制作8では、インタラクションデザイン技術を学び、成果物を提示する。あるシステムとユーザーとのやりとりをいかにデザインしていくかを、光や音への反応性という次元から舞台やショーの演出性といった次元までを含めて学ぶ。	
	表現越境科目群	デッサン1	デッサンとは、物体の形体、明暗などを平面に描画する美術の制作あるいは作品のことであり、ペン、鉛筆、木炭、パステル、コンテなどを用い、主に輪郭線によって対象の視覚的特徴を正確につかむことを目的とする。デッサンは単なる描写力の修練ではなく、自己と外界とを認識すること、またそれを具現化する場である。デッサン１では、ポピュラーカルチャー領域における実制作の場面で、思考やイメージを正確に表現するための基礎的なデッサン能力を身につける。	
		デッサン2	デッサンとは、物体の形体、明暗などを平面に描画する美術の制作あるいは作品のことであり、ペン、鉛筆、木炭、パステル、コンテなどを用い、主に輪郭線によって対象の視覚的特徴を正確につかむことを目的とする。デッサンは単なる描写力の修練ではなく、自己と外界とを認識すること、またそれを具現化する場である。デッサン２では、ポピュラーカルチャー領域における実制作で必要となる基礎的なデッサンに自己のアイデアを加え、独自の表現力を身につける。	
		身体表現1	生活の中で人は様々な身体の動きを無意識に行っており、身体の動き方、動かし方は自己を形作るための大きな要素の一つとなっている。身体表現とは、自己の内面・主観から生まれる思考やイメージを、身体の動きによって外面的・感性的に捉え伝達しようとすることである。身体表現１では身体表現の観察などを通して、日常生活の中で通常は意識することが少ない身体の動きを認識し、身体を使った表現方法を見つけ出すことを目的とする。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
学部専門実技科目	表現越境科目群	身体表現2	生活の中で人は様々な身体の動きを無意識に行っており、身体の動き方、動かし方は自己を形作るための大きな要素の一つとなっている。身体表現とは、自己の内面・主観から生まれる思考やイメージを、身体の動きによって外面的・感性的に捉え伝達しようとすることであり、表現する側と受け手とのコミュニケーションの手段ともいえる。多様なジャンルや文化における身体表現に触れ、コミュニケーションの一つとしての身体の動きの「意味」を学ぶ。	
		文章表現1	文字を用いた表現は、マンガや小説といったポピュラーカルチャー領域における一つの表現手法としてだけでなく、カルチャーシーンを彩る多様な事柄を人に伝達したり批評するための手段ともなる。文章表現１では、自己の内面・主観から生まれる思考や感情などを、外面的・客観的な形として文章に落とし込み、ストーリーや論述を組み立てる能力を養う。作品制作の他、発信や批評といった形にも活用できる文章表現を幅広く学ぶ。	
		文章表現2	文字を用いた表現は、マンガや小説といったポピュラーカルチャー領域における一つの表現手法としてだけでなく、カルチャーシーンを彩る多様な事柄を人に伝達したり批評するための手段ともなる。文章表現２では、自己の内面・主観から生まれる思考や感情などを、外面的・客観的な形として文章に落とし込み、ストーリーや論述を組み立てる能力を養う。文章を人に届けるための演出等も含め、表現を商業的に成立させるための技法についても学ぶ。	
		クラフト1	コスチューム、アクセサリーなどといった身に着けるものから日用品まで、日常生活で私たちが触れる様々な商品は、国や地域性の違いによる文化的背景や、各時代特有の大衆文化の影響を少なからず受けており、ある商品の存在そのものが一つのカルチャーシーンを象徴するといった現象も多く見受けられる。この授業では、自身の表現に適した商品ジャンルを探り、そのジャンルに対する深い洞察と解釈を行った上で、実際の作品を制作する。	
		クラフト2	コスチューム、アクセサリーなどといった身に着けるものから日用品まで、日常生活で私たちが触れる様々な商品は、国や地域性の違いによる文化的背景や、各時代特有の大衆文化の影響を少なからず受けており、ある商品の存在そのものが一つのカルチャーシーンを象徴するといった現象も多く見受けられる。クラフト２では、大衆的な製品を実際に生み出すプロを様々なジャンルからゲストとして招き、現場についての理解を深め、創作の幅を広げる。	
		調理表現	たとえば音楽イベントでのフード提供のように、ポピュラーカルチャーにおける各ジャンルにおいて「食」は密接なつながりを持っており、コンテンツやデザイン等と併記されてクールジャパンの要素の一つともなっている。この授業では「食」をコミュニケーションツールの一つとしてとらえ、食材を活かすための取扱い方のほか、人に振る舞うまでの過程、環境を考える事を目的とする。空間演出、運営、経理など、ビジネスとしての実際も学び、食を介した表現の現実性を探る。	
	実務研修科目群	インターンシップ	地元京都を中心とした企業で、インターンシップとして実際に就業体験を行う。主に、デザイン、印刷、出版、映像、美術などの企業へ赴き、学内だけでは学ぶことができない実質的な技術を習得する。自分の将来に関連のある就業体験を行うことで、就業意識を高め、視野を広げる。社会勉強を通して、卒業後の進路を具体的に描き、今後の学生生活においての具体性な目的をともなった学習意欲を開発することを目的とする。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
学部専門実技科目	実務研修科目群	制作実務研修1	ポピュラーカルチャーと関連する企業や店舗に赴き、就業体験を行うことで、就業意識を高め視野を広げることを目的とする。さらに、そこで得たスキルを卒業研究へと活かし、卒業後のキャリアへと繋げる。イベントの企画や実施、コンテンツや商品の制作、情報の発信など、ポピュラーカルチャーに関わる企業や店舗で就業体験を行う。また、ポピュラーカルチャーに関わる活動を行っているグループや、文化政策や事業に関わる諸機関においても、就業体験を実施する。社会活動を体験することで現場の実情を知り、学内では学ぶことができない実質的な技術を習得する。	
		制作実務研修2	「制作実務研修1」とは異なる就業先へ赴き、新たな技術と視野を獲得する。ポピュラーカルチャーと関連する企業や店舗に赴き、就業体験を行うことで、就業意識を高め視野を広げることを目的とする。イベントの実施、コンテンツや商品の制作、情報の発信など、ポピュラーカルチャーに関わる企業や店舗、グループ、文化事業に関わる諸機関において、就業体験を実施する。社会活動を体験することで現場の実情を知り、学内では学ぶことができない実質的な技術を習得する。	
		制作実務研修3	「制作実務研修1・2」とは異なる就業先へ赴き、新たな技術と視野を獲得する。ポピュラーカルチャーと関連する企業や店舗に赴き、就業体験を行うことで、就業意識を高め視野を広げることを目的とする。イベントの実施、コンテンツや商品の制作、情報の発信など、ポピュラーカルチャーに関わる企業や店舗、グループ、文化事業に関わる諸機関において、就業体験を実施する。社会活動を体験することで現場の実情を知り、学内では学ぶことができない実質的な技術を習得する。	
		制作実務研修4	「制作実務研修1～3」とは異なる就業先へ赴き、新たな技術と視野を獲得する。ポピュラーカルチャーと関連する企業や店舗に赴き、就業体験を行うことで、就業意識を高め視野を広げることを目的とする。イベントの実施、コンテンツや商品の制作、情報の発信など、ポピュラーカルチャーに関わる企業や店舗、グループ、文化事業に関わる諸機関において、就業体験を実施する。社会活動を体験することで現場の実情を知り、学内では学ぶことができない実質的な技術を習得する。	

①京都精華大学　都道府県内位置図

②京都精華大学　交通機関図

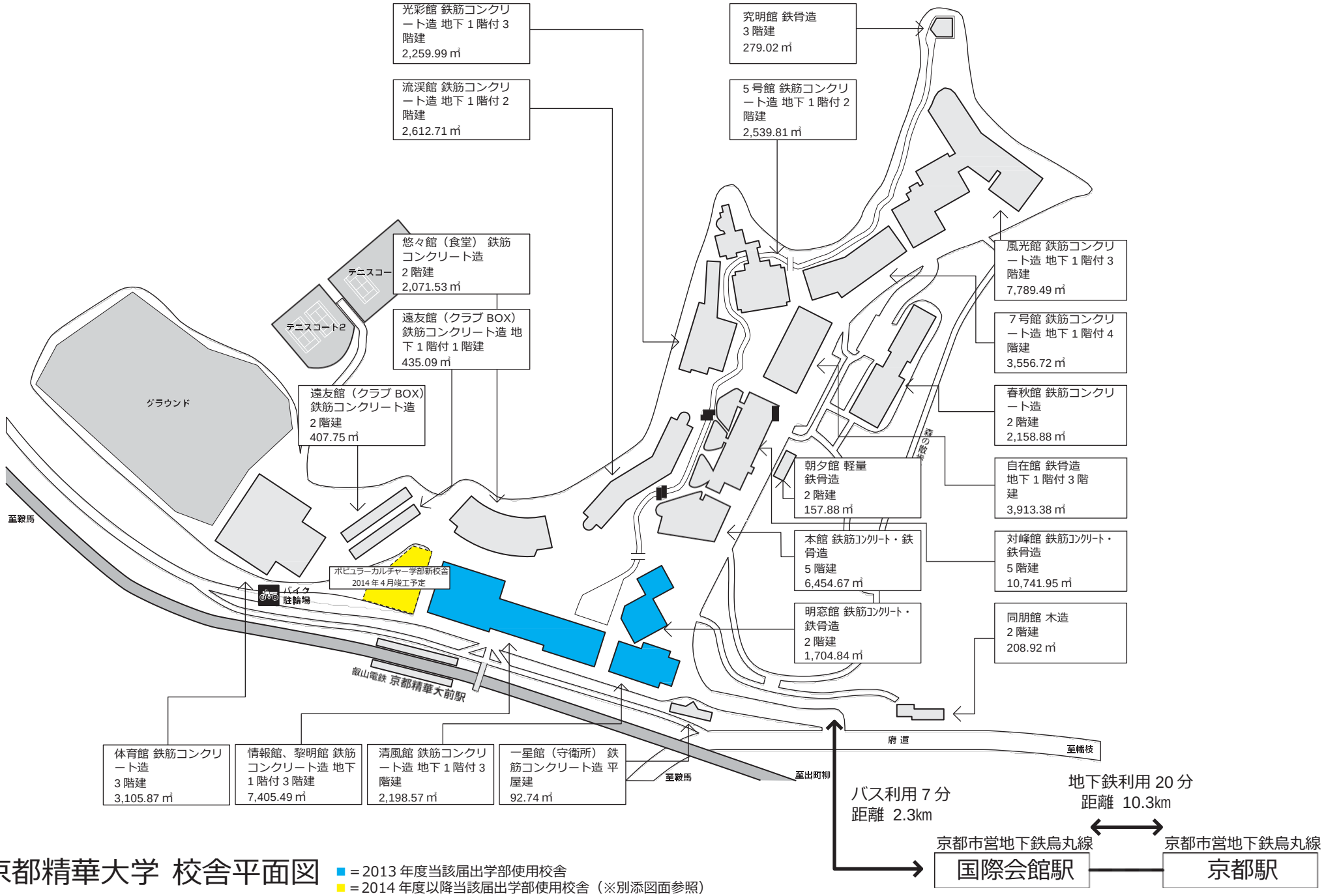
京都精華大学

・JR 京都駅または阪急烏丸駅から地下鉄に乗り換え、国際会館駅下車。スクールバスに乗り換え約 5 分。

・京阪出町柳駅より叡山電鉄鞍馬行き（または二軒茶屋行き･市原行き）に乗り換え、京都精華大学前駅下車すぐ。

京都精華大学　田中校地

・京阪出町柳駅より叡山電鉄鞍馬行き（または二軒茶屋行き･市原行き）に乗り換え、元田中駅下車徒歩 5 分。



④京都精華大学 校舎平面図

■＝2013 年度当該届出学部使用校舎
■＝2014 年度以降当該届出学部使用校舎（※別添図面参照）

京都精華大学学則（案）

第 1 章　総　　則

(目的)

第 1 条　本学は学校教育法および教育基本法の規定するところに従い、大学教育を施し、広く知識を授けるとともに、深奥な学問芸術を研究・教授し、よりよき社会人としての人間形成を行うことを目的とする。

(自己評価等)

第 2 条　本学は、教育研究水準の向上を図り、本学の目的および社会的使命を達成するため、本学における教育研究活動等の状況について自ら点検および評価を行い、その結果を公表する。

2　前項の点検および評価を行うため、委員会を設ける。

3　委員会に関する規程は、これを別に定める。

4　点検、評価の項目等については、別にこれを定める。

(学部、学科、入学定員および収容定員)

第 3 条　本学に次の学部・学科をおく。

芸術学部	造形学科
	素材表現学科
	メディア造形学科
デザイン学部	イラスト学科
	ビジュアルデザイン学科
	プロダクトデザイン学科
	建築学科
マンガ学部	マンガ学科
	アニメーション学科
ポピュラーカルチャー学部	ポピュラーカルチャー学科
人文学部	総合人文学科

2　前項の学部・学科の入学定員および収容定員は次のとおりとする。

学部	学科	入学定員	収容定員
芸術学部	造形学科	112 人	448 人
	素材表現学科	64 人	256 人
	メディア造形学科	64 人	256 人
デザイン学部	イラスト学科	64 人	256 人
	ビジュアルデザイン学科	64 人	256 人
	プロダクトデザイン学科	48 人	192 人

	建築学科	32 人	128 人
マンガ学部	マンガ学科	168 人	672 人
	アニメーション学科	64 人	256 人
ポピュラーカルチャー学部	ポピュラーカルチャー学科	118 人	472 人
人文学部	総合人文学科	300 人	1,200 人

(人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的)

第 3 条の 2　前条の学部・学科の人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的は次のとおりとする。

芸術学部

歴史的文化芸術、とりわけ京都の文化芸術を理解継承しまた多様化する芸術領域の可能性を探究すること、および自立した思考力によって新たな表現を創造する作家、クリエーターの資質を備えた、よりよき社会人としての人間形成を行うことを目的とする。

造形学科

伝統的造形芸術の知識技法にとどまらず、多角的な観察によって新たな造形芸術を開拓できる資質を備えた人材の養成を行う。

素材表現学科

素材重視の芸術表現領域において伝統的技法を継承し、さらに現代における用と美の新たな発展に貢献できる資質を備えた人材の養成を行う。

メディア造形学科

紙からデジタル・メディアまで媒体の特性を重視する造形芸術において、伝統的技法知識および先端的技法知識を修得し、新たなメディア芸術を開拓できる資質を備えた人材の養成を行う。

デザイン学部

デザイン領域において高度な技法知識を修得し新たな可能性を探究すること、および自立した思考によってグローバル社会および地域社会に現実的に貢献するデザイナー・プランナーの資質を備えた、よりよき社会人としての人間形成を行うことを目的とする。

イラスト学科

デザインやアートといった多様なフィールドで展開が可能となるイラスト領域において、現実の社会に貢献できる資質を備えた人材の養成を行う。

ビジュアルデザイン学科

情報技術の発展によってその目的および手法が飛躍的に拡大した視覚デザインの領域において、現実の社会に貢献できる資質を備えた人材の養成を行う。

プロダクトデザイン学科

社会活動や生活に使用される道具、器具、装置などのデザインの領域において、現実の社会に貢献できる資質を備えた人材の養成を行う。

建築学科

環境、建築、居住空間などのデザイン・設計の領域において、現実の社会に貢献できる資質を備えた人材の養成を目的とする。

マンガ学部

マンガ文化の再評価とともに重要視されるマンガやアニメーションの制作と理論について多角的な教育研究を行い新たな可能性を探究すること、およびマンガ文化の継承と発展に貢献する資質を備えた、よりよき社会人としての人間形成を行うことを目的とする。

マンガ学科

マンガの作品史、表現などについての理論および技法の修得にとどまらず、実践によってマンガ表現の発展に貢献できる資質を備えた人材の養成を目的とする。

アニメーション学科

アニメーションの作品史、表現などについての理論および技法の修得にとどまらず、実践によってアニメーションの発展に貢献できる資質を備えた人材の養成を目的とする。

ポピュラーカルチャー学部

国際的に注目される、ポピュラーカルチャー領域において、多角的な教育研究を行い、豊かな人間性を育む文化表現を通して、次世代の産業界の発展に貢献する資質を備えた、よりよき社会人としての人間形成を行うことを目的とする。

ポピュラーカルチャー学科

ポピュラーカルチャー領域においての制作および理論の修得にとどまらず、時代の先端を切り開くコンテンツを創造し、次世代産業の発展に貢献できる資質を備えた人材の要請を目的とする。

人文学部

国際的な視野と体験を重視し、地球環境問題の深刻化、情報技術化、経済のグローバル化の時代に求められる人間の社会と文化についての学際的な教育研究を行うこと、および自立した思考力によって現実の社会と文化に貢献する資質を備えた、よりよき社会人としての人間形成を行うことを目的とする。

総合人文学科

主に以下の 5 つの専門基礎領域で学士課程教育を行うが、これら領域間の学際的な連関にも配慮して異なる領域の学習も保証しつつ、総合的な教養を備えた人材の養成を目的とする。

(1) 現代の大衆文化に関して理論的、実践的な深い理解を持ち、大衆文化の発展と深化に貢献できる人材の養成。(2) 優れた語学能力、特に英語の運用能力、異文化に関する深い理解を持ち、グローバル社会における人間の共存を構想できる人材の養成。(3) 日本の伝統文化とそれを育んだ風土、およびアジア諸地域との文化的交流に関して歴史的な理解を持ち、伝統文化の継承と発展に貢献できる人材の養成。(4) 地球環境問題の社会的、文化的な理解を深め、環境と共存する将来の人間社会の実現に貢献できる人材の養成。(5) 現代社会において急速に変化しつつある人間像を、思想的、社会的、心理的な観点から深く理解し、より人間的な地域社会の構築に貢献できる人材の養成。

(大学院)

第 4 条　本学に大学院をおく。

2　大学院の学則は、別に定める。

(修業年限)

第 5 条　本学の修業年限は 4 年とする。ただし、8 年を超えて在学することはできない。

2　教授会が有益と認めるときは、他の大学等における修学期間を修業年限に算入することができる。ただし、修業年限については 1 年を超えて算入することはできない。

3　前項の規定は、外国の大学における修学期間についても準用する。

第 2 章　学年・学期および休業日

(学年)

第 6 条　本学の学年は 4 月 1 日に始まり、翌年 3 月 31 日に終わる。

(学期および授業日数)

第 7 条　1 学年の授業日数は定期試験の日数を含めて 35 週、210 日を下らないものとし、1 学年を分けて次の学期とする。

① 前　期　4 月 1 日より 9 月 30 日まで

② 後　期　10 月 1 日より 3 月 31 日まで

(休業日)

第 8 条　休業日は次のとおりとする。

①　日曜日

②　国民の祝日に関する法律(昭和 23 年法律第 178 号)に規定する休日

③　春季・夏季・冬季の休業期間は、各年度ごとに定める。

2　学長が必要と認めたときは、臨時に休業日を設け、または休業日を変更することができる。

3　学長が必要と認めたときは、休業日に授業を行うことができる。

第 3 章　教育課程・単位・教育課程の履修

(教育課程の編成)

第 9 条　本学は、学部および学科等の教育上の目的を達成するために必要な授業科目を開設し、体系的に教育課程を編成する。

2　教育課程は、各授業科目を必修科目、選択科目に分け、これを各年次に配当して編成する。

(授業科目および単位数)

第 10 条　本学の授業科目および単位数は別表Ⅰ、別表Ⅱ、別表Ⅲ、別表Ⅳ、別表Ⅴ、別表Ⅵ、および別表Ⅶのとおりとする。

2　教授会は他学部および他学科が開設する授業科目の中から学部交流科目および学科交流科目を定め、当該学部および学科の卒業に必要な単位とすることができる。

(単位計算方法)

第 11 条　各授業科目の単位数は、1 単位の授業科目を 45 時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準とし、次の各号の基準によって計算する。

(1) 講義および演習については、15 時間から 30 時間までの範囲で定められた時間の授業をもって 1 単位とする。

(2) 実験、実習および実技等の授業については、30 時間から 45 時間までの範囲で定められた時間の授業をもって 1 単位とする。ただし、個人指導による実技の授業については、相応の時間の授業をもって 1 単位とする。

2　前項の規定にかかわらず、卒業論文、卒業制作、学外学修・個別課題学習等の授業科目および公の技能審査等による認定を受けた者については、これらの学修の成果を評価して適切な単位を授与することができる。

(教育課程の履修)

第 12 条　学生は原則として、別表Ⅰに定める教育課程に従い、各年次に配当された授業科目を履修する。

2　学生は当該学部の定めるところ(学部履修規程)により、授業科目を履修し、その単位を修得しなければならない。

3　卒業に必要な単位は、124 単位とする。

(他の大学または短期大学における授業科目の履修等)

第 13 条　教授会が教育上有益と認めるときは、学生が他の大学または短期大学の授業科目を履修することを認める。

2　前項の規定に基づいて学生が履修した単位は 30 単位を超えない範囲で、本学で修得したものとみなすことができる。

3　前項の規定は、学生が外国の大学に留学する場合に準用する。

4　留学に関する規程は、別にこれを定める。

(大学以外の教育施設等における学修)

第 14 条　教授会が本学における教育水準を有し、教育上有益と認めるときは、学生が行う高等専門学校の専攻科における学修、修業年限 2 年以上の専修学校専門課程における学修、文部科学大臣の認定を受けた技能審査の合格に係る学修を本学における履修とみなし単位を与えることがで

きる。

2　前項により与えることができる単位数は30単位を超えないものとする。

(入学前の既習得単位等の認定)

第 15 条　教授会が教育上有益と認めるときは、学生が本学入学前に大学または短期大学において履修した授業科目について修得した単位を本学で修得したものとみなすことができる。

2　教授会が教育上有益と認めるときは、本学に入学する前に行った前条第1項に規定する学修を本学における授業科目の履修とみなし、単位を与えることができる。

3　前2項により修得したものとみなし、または与えることのできる単位数は、編入学の場合を除き、本学において修得した単位以外のものについては、あわせて30単位を超えないものとする。

(特別聴講生)

第 16 条　他の大学等の学生で、当該他の大学等との協議に基づき、本学において授業科目を履修することを志願する者については特別聴講生として、学長がこれを許可することがある。

2　特別聴講生に関する規程は本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(履修登録)

第 17 条　学生は履修しようとする授業科目を毎学期始め、所定の期日までに届け出なければならない。

2　学生は当該学部が定める登録上限単位数の範囲内で履修登録しなければならない。

(資格の取得)

第 18 条　本学に教育職員免許状授与の所要資格を得させるための課程をおく。

本学において教育職員免許状の取得を希望する者は、教育職員免許法および教育免許法施行規則に基づき、本学が別表Ⅱに定める教職および教科に関する専門科目を履修し、その単位を修得しなければならない。

本学における教育職員免許状の教科および種類は、以下の表に掲げるとおりとする。

学　部	学　科	免許状の種類(教科)
芸術学部	造形学科	中学校教諭一種免許状(美術) 高等学校教諭一種免許状(美術)
	素材表現学科	中学校教諭一種免許状(美術) 高等学校教諭一種免許状(美術) 高等学校教諭一種免許状(工芸)
	メディア造形学科	中学校教諭一種免許状(美術) 高等学校教諭一種免許状(美術)

デザイン学部	ビジュアルデザイン学科	中学校教諭一種免許状(美術) 高等学校教諭一種免許状(美術)
	プロダクトデザイン学科	中学校教諭一種免許状(美術) 高等学校教諭一種免許状(美術) 高等学校教諭一種免許状(工芸)
マンガ学部	マンガ学科	中学校教諭一種免許状(美術) 高等学校教諭一種免許状(美術)
	アニメーション学科	中学校教諭一種免許状(美術) 高等学校教諭一種免許状(美術)
人文学部	総合人文学科	中学校教諭一種免許状(国語) 中学校教諭一種免許状(英語) 中学校教諭一種免許状(社会) 高等学校教諭一種免許状(国語) 高等学校教諭一種免許状(英語) 高等学校教諭一種免許状(地理歴史) 高等学校教諭一種免許状(公民)

2　図書館司書の資格を取得しようとする者は、図書館法および図書館法施行規則に基づき、本学が別表Ⅲに定める図書館司書課程に関する授業科目を履修し、その単位を修得しなければならない。

図書館司書課程を設置する学部および学科は、以下の表に掲げるとおりとする。

学部	学科
芸術学部	造形学科
	素材表現学科
	メディア造形学科
デザイン学部	ビジュアルデザイン学科
	プロダクトデザイン学科
マンガ学部	マンガ学科
	アニメーション学科
人文学部	総合人文学科

3　博物館学芸員の資格を取得しようとする者は、博物館法および博物館法施行規則に基づき、本学が別表Ⅳに定める博物館学芸員課程に関する授業科目を履修し、その単位を修得しなければならない。

博物館学芸員課程を設置する学部および学科は、以下の表に掲げるとおりとする。

学部	学科
	造形学科

芸術学部	素材表現学科
	メディア造形学科
デザイン学部	ビジュアルデザイン学科
	プロダクトデザイン学科
マンガ学部	マンガ学科
	アニメーション学科
人文学部	総合人文学科

4　学校図書館司書教諭の資格を取得しようとする者は、学校図書館法および学校図書館司書教諭講習規程に基づき、本学が別表Ⅴに定める学校図書館司書教諭課程に関する授業科目を履修し、その単位を修得しなければならない。

学校図書館司書教諭課程を設置する学部および学科は、以下の表に掲げるとおりとする。

学部	学科
芸術学部	造形学科
	素材表現学科
	メディア造形学科
人文学部	総合人文学科

5　社会教育主事の資格を取得しようとする者は、社会教育法および社会教育主事講習等規程に基づき、本学が別表Ⅵに定める社会教育主事課程に関する授業科目を履修し、その単位を修得しなければならない。

社会教育主事課程を設置する学部および学科は、以下の表に掲げるとおりとする。

学部	学科
人文学部	総合人文学科

6　社会調査士の資格を取得しようとする者は、一般社団法人社会調査協会が別表Ⅶに定める標準カリキュラムに準拠した授業科目を履修し、その単位を修得しなければならない。

社会調査士課程を設置する学部および学科は、以下の表に掲げるとおりとする。

学部	学科
デザイン学部	プロダクトデザイン学科
人文学部	総合人文学科

第 4 章　教育課程修了の認定・単位の授与・卒業および称号

(教育課程修了の認定)

第 19 条　教育課程修了の認定は授業科目の試験、研究報告の成績を審査し、その結果に基づき、教授会の議を経て行う。

2　成績の評価はS(100点～90点)、A(89点～80点)、B(79点～70点)、C(69点～60点)、F(59点以下)、K（評価対象外）とし、S、A、B、Cをもって合格とする。

3　総合成績評価としてGPAを用いる場合は、前項の成績評価のSを4、Aを3、Bを2、Cを1、FおよびKを0の評点に置き換え、履修科目の単位数で乗じた点数の合計を、総履修科目単位数で除して算出する。

(単位の授与)

第 20 条　学長は、別表ⅠからⅦに定める授業科目を履修した学生に対し、当該授業科目の試験および研究報告の成績を審査し、その結果に基づき、教授会の議を経て、相当する数の単位を与える。

(卒業)

第 21 条　学長は本学の学部に4年以上在学し、第12条に規定する卒業に必要な単位を修得し、かつ学費等納入金について大学への諸債務を滞納していない者について、教授会の議を経て卒業を認定する。

2　学長は卒業を認定した者に対し、学位記を授与する。

(学位の授与)

第 22 条　本学の芸術学部、デザイン学部、マンガ学部およびポピュラーカルチャー学部を卒業した者に、学士（芸術）の学位を授与する。

2　本学の人文学部を卒業した者に、学士（人文）の学位を授与する。

第 5 章　入学・編入学・転入学・休学・復学・退学・転学・除籍および再入学

(入学)

第 23 条　本学の入学は学年の始めとする。

2　前項の規定にかかわらず、人文学部については、外国人留学生・帰国生徒の後期よりの入学を認めることができる。

(入学資格)

第 24 条　本学の第 1 年次に入学することのできる者は、次の各号のいずれかに該当する者でなければならない。

①　高等学校を卒業した者

②　通常の課程による12年の学校教育を修了した者(通常の課程以外の課程によりこれに相当する学校教育を修了した者を含む)

③　外国において学校教育における 12 年の課程を修了した者、またはこれに準ずる者で文部科学大臣の指定した者

④　文部科学大臣の指定した者

⑤　文部科学大臣が高等学校の課程と同等の課程を有するものとして認定した在外教育施設の当該課程を修了した者

⑥　大学入学資格検定規程により文部科学大臣の行う大学入学資格検定に合格した者

⑦　相当の年齢に達し、高等学校を卒業した者と同等以上の学力があるものと本学が認めた者

(入学志願手続および合否判定)

第 25 条　入学を志願する者は、本学所定の出願書類に別表Ⅷに定める入学検定料を添えて提出しなければならない。

2　提出の方法、時期、同時に提出すべき書類等については別に定める。

3　学長は入学を志願する者に対して入学試験を実施し、教授会における合否判定に基づき、結果を通知する。

(入学手続金の納入および入学許可)

第 26 条　入学試験に合格した者は、学長が指定する期日までに所定の納付金を納入し、かつ必要書類を提出しなければならない。

2　学長は、前項の規定により所定の納付金を納入し、必要書類を提出した者に対して、入学を許可する。

(編入学)

第 27 条　本学の第 3 年次および第 2 年次に編入学を希望する者については、選考のうえ、学長はこれを許可することがある。

2　第 3 年次に編入学できる者は、次の各号のいずれかに該当する者とする。

①　大学を卒業した者、または大学に 2 年以上在学した者

②　短期大学または高等専門学校を卒業した者

③　専修学校の専門課程を修了した者のうち、学校教育法第 82 条の 10 の規定により大学に編入学できる者

3　第 2 年次に編入学できる者は、次の各号のいずれかに該当する者とする。

①　大学に 1 年以上在学した者

②　短期大学または高等専門学校を卒業した者

4　前 2 項の規定により入学を許可された者がすでに履修した科目および単位の取扱いについては、別にこれを定める。

(転入学)

第 28 条　他の大学に 1 年以上在学してから、本学の学部に転入学しようとする者について、選考のうえ、既に在学していた大学および履修した授業科目の内容と成績とを考慮して、学長は入学を許可することがある。

2　本条により入学を許可された者の修学年限は、他大学における在学年数が 1 年であった者は 3 年、2 年以上であった者は 2 年とし、それぞれ 6 年、4 年を超えて在学することはできない。

3　転入学を許可された者が既に履修した授業科目および単位の取扱いについては、別に定めるところによる。

(転学部、転学科)

第 28 条の 2　転学部および転学科に関する規程は、別にこれを定める。

(休学)

第 29 条　学生が疾病その他の事由によって 3 ヶ月以上就学することができないときは、保証人と連署のうえ、所定の様式により願い出て、学長の許可を得たうえ休学することができる。

2　休学期間は 1 年以内とする。ただし、特別の理由がある場合は 1 年を限度として、休学期間の延長を認めることができる。

3　休学の期間は通算して 4 年を超えることができない。

4　休学の期間は、第 5 条に定める修業年限および在学年限に算入しない。

5　休学期間中の学費は半期 10,000 円、通年 20,000 円とし、納入等に関する規定は第 34 条による。

6　休学に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(復学)

第 30 条　休学者が復学しようとするときは、保証人連署のうえ、所定の様式により願い出て、学長の許可を得たうえ復学することができる。

2　復学は、学期の始めからとする。

3　復学に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(退学および転学)

第 31 条　疾病、その他の事由によって退学または転学しようとする者は、保証人連署のうえ、所定の様式により退学願または転学願を提出し、学長の許可を得なければならない。

2　退学および転学に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(除籍)

第 32 条　学長は、学生が各号のいずれかに該当するときは、学生を除籍する。

①　第 5 条に規定する在学年限を超えた者

② 第29条第2項および第3項に規定する休学年限を超えた者

③ 所定の授業料等学費の納付を怠り、その督促を受けてもこれを納付しない者

④ 第30条の復学手続きのない者

⑤ 本学での就学の意思のない者

⑥ 本人が死亡したとき

⑦ その他、学長が相当の理由を認めた者

2 除籍に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(再入学)

第 33 条 退学または除籍となった者が、保証人連署のうえ、所定の様式により再入学を願い出たときは、教授会の議を経て、学長がこれを許可することがある。

2 再入学を願い出ることのできる期間は、退学または除籍の日より2年以内とする。

3 再入学は学期の始めからとする。

4 再入学に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

第 6 章 入学検定料・入学金および授業料

(学費等納付金および手数料)

第 34 条 入学検定料、入学金および授業料は、別表Ⅷの①のとおりとする。

2 前項に規定する既納の入学検定料、入学金および授業料等の学費は、原則として返還しない。

3 前項の規定にかかわらず、入学許可を得た者で、指定の期日までに入学手続の取り消しを願い出た者については、入学金またはこれに相当する金額を除く学費を返還する。

4 入学検定料以外の手数料については、別にこれを定める。

5 学費納入等に関する規定は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

第 7 章 職員組織および教授会

(職員組織)

第 35 条 本学に学長、副学長、教授、准教授、講師、助教、助手、事務職員、その他の職員をおく。

2 学長は本学則に定める職務を行い、所属職員を統督する。

3 副学長は、学長の職務を助ける。

4 教授、准教授、講師、助教、助手、事務職員、その他の職員の職務は、学校教育法、その他の法令および本学諸規程の定めるところによる。

(教授会)

第 36 条　本学の重要な事項を審議するために各学部に教授会をおき、学部に属する専任の教授、准教授、講師、助教、助手、その他教授会が必要と認めた職員をもって組織する。

2　教授会はその学部に関する次の事項を審議する。

①　学生の入学・編入学・転入学・再入学・休学・退学・転学・留学・除籍・復学および卒業に関する事項

②　教育課程の編成に関する事項

③　学生の試験および課程修了の認定に関する事項

④　教授および研究に関する事項

⑤　教員の人事に関する事項

⑥　学則および諸規程の制定・改廃に関する事項

⑦　学長の諮問した事項

3　各学部に共通する重要な事項を審議するため、全学教授会をおく。

4　教授会に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

第 8 章　聴講生・科目等履修生・委託生・研究生・外国人留学生・帰国生徒および社会人

(聴講生)

第 37 条　本学の教職課程科目のうち「教職に関する専門科目」について聴講しようとする者があるときは、本学の教育・研究に支障のない場合に限り教授会の議を経て、学長がこれを許可する。

2　聴講を許可する授業科目は 1 年度につき 12 単位とし、在学年限は 1 年以内とする。

3　学長は、特定の授業科目を履修し、その単位を修得した聴講生に対して、単位修得証明書を交付することができる。

4　聴講料等の納付金については、別表Ⅷの③に定めるところによる。

5　聴講生に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(科目等履修生)

第 38 条　本学の学生以外の者が本学の特定の授業科目を履修しようとするときは、本学の教育・研究に支障がない限り、教授会の議を経て、学長がこれを許可することができる。

2　履修を許可する授業科目の単位数は、1 年度につき 12 単位とし、在学年限は 1 年以内とする。

3　学長は、特定の授業科目を履修し、その単位を修得した科目等履修生に対し、単位修得証明書を交付することができる。

4　科目等履修の納付金については、別表Ⅷの④に定めるところによる。

5　科目等履修生に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(委託生)

第 39 条　公共団体その他の機関から本学の特定の学科に修学を委託されたときは、選考のうえこれを受託し、委託の目的に合致する特定の授業科目の履修について、学長がこれを許可することができる。

2　前項の特定の授業科目の履修およびその単位は、委託者の希望を考慮し教授会においてこれを決定する。

3　学長は、特定の授業科目を聴講し、その単位を修得した委託生に対し、単位修得証明書を交付することができる。

4　委託生の委託料は、別表Ⅷの①に規定する授業料相当額とする。

5　委託生に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(研究生)

第 40 条　本学の専任教員のもとで研究しようとする者があるときは、教授会の議を経て、学長がこれを許可することがある。

2　研究生の授業料等の学費は、別表Ⅷの⑤に定めるところによる。

3　研究生に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(外国人留学生)

第 41 条　勉学の目的をもった外国人で、第 24 条に定める要件を充足する者が本学への入学を志願するときは、選考のうえ、学長が入学を許可することがある。

2　外国人留学生に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(帰国生徒)

第 42 条　長期間の海外生活を経験した者で、第 24 条に定める要件を充足する者が本学への入学を志願するときは、選考のうえ、学長が入学を許可することがある。

2　帰国生徒に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(社会人)

第 43 条　社会的経験を有する者で、第 24 条に定める要件を充足する者が本学への入学を志願するときは、選考のうえ、学長が入学を許可することがある。

2　社会人に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

第 9 章　公開講座

(公開講座)

第 44 条　本学に公開講座をおくことができる。

2　公開講座は、一般市民に対し本学の教育を公開し、学問・芸術の研究向上に資することを目的と

する。

3　公開講座は、教授会の議を経て随時公開する。

第 10 章　情報館

(情報館)

第 45 条　本学に情報館をおき、教育および研究活動に必要な図書、文献、画像、視聴覚資料および研究資料を収集管理し、教職員、学生および一般市民の利用に供する。

2　情報館に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

第 11 章　保健施設および学生寮

(保健施設)

第 46 条　本学に教職員および学生の保健衛生を管理するために、保健室をおく。

2　学生は、毎年定められた時期に健康診断を受けなければならない。

(学生寮)

第 47 条　本学に学生寮をおく。

2　学生寮に関する規程は、別にこれを定める。

第 12 章　育英奨学制度

(育英奨学制度)

第 48 条　本学に育英奨学制度を設ける。

2　育英奨学制度関する規程は、別にこれを定める。

第 13 章　賞罰

(表彰)

第 49 条　学長は、品行・学業とも優秀で他の模範となる学生に対して、表彰を行うことがある。

(懲戒)

第 50 条　学長は学則または規則に違反し、その他学生の本分に背く行為のあった学生に対して、教授会の議を経て懲戒する。

2　懲戒は訓告、停学および退学とする。

3　前項の退学は、次の各号のいずれかに該当する者に対して行う。

① 性行不良で改善の見込みがないと認められる者
② 正当の理由なく、出席が常でない者
③ 大学の秩序を乱し、その他学生の本分に背く者

附　則

第 1 項　この学則に定めるもののほか、学則の施行に関し、さらに必要な事項は別にこれを定める。

第 2 項　この学則は昭和 54 年 4 月 1 日から実施する。

第 3 項　昭和 54 年度の美術学部造形学科・デザイン学科の総定員は第 4 条の規定にかかわらず次のとおりとする。

昭和 54 年度	造 形 学 科	120 名
	デザイン学科	120 名

第 4 項　この学則は、昭和 57 年 12 月 1 日から実施する。

第 5 項　この学則は、昭和 58 年 4 月 1 日から実施する。

第 6 項　この学則は、昭和 59 年 4 月 1 日から実施する。

第 7 項　この学則は、昭和 60 年 4 月 1 日から実施する。

第 8 項　この学則は、昭和 61 年 4 月 1 日から実施する。

第 9 項　この学則は、昭和 62 年 4 月 1 日から実施する。

ただし、第 4 条の規定にかかわらず、昭和 62 年度から平成 7 年度までの間の入学定員は、次のとおりとする。

学部・学科等	入 学 定 員
美 術 学 部	人
造 形 学 科	120
デザイン学科	120
計	240

第 10 項　この学則は、昭和 63 年 4 月 1 日から実施する。

第 11 項　この学則は、平成元年 4 月 1 日から実施する。

第 12 項　この学則は、平成 2 年 4 月 1 日から実施する。

第 13 項　この学則は、平成 3 年 4 月 1 日から実施する。

第 18 条に規定する人文学部における英語・中学校 1 種免許状、高等学校 1 種免許状を取得しようとする者は、平成元年 4 月入学者より必要単位を履修できるものとする。

2　第 4 条および附則第 9 項ただし書きの規定にかかわらず、平成 3 年度から平成 11 年度までの間の入学定員は、次のとおりとする。

学部・学科等	入　　学　　定　　員
美 術 学 部	人
造 形 学 科	150　　(平成 8 年度から 11 年度までは 130 人)
デザイン学科	150　　(平成 8 年度から 11 年度までは 130 人)
計	300　　(平成 8 年度から 11 年度までは 260 人)
人 文 学 部	
人 文 学 科	300
計	300

第 14 項　　この学則は、平成 4 年 4 月 1 日から実施する。

ただし、第 22 条第 1 項については、平成 3 年 12 月 1 日より施行する。

第 15 項　　この学則は、平成 5 年 4 月 1 日から実施する。

この学則は、平成 5 年 4 月 1 日入学者より適用する。平成 5 年以前の入学者(平成 5 年度美術学部編入生を含む)については、従来の第 12 条第 1 項別表 I を適用する。

第 16 項　　この学則は、平成 6 年 4 月 1 日から実施する。

第 17 項　　この学則は、平成 8 年 4 月 1 日から実施する。

2　ただし、第 4 条の規定にかかわらず、平成 8 年度から平成 11 年度までの間の入学定員は、次のとおりとする。

学部・学科等	入 学 定 員
美 術 学 部	人
造 形 学 科	150
デザイン学科	150
計	300

第 18 項　　この学則は、平成 9 年 4 月 1 日から実施する。

第 19 項　　この学則は、平成 12 年 4 月 1 日から実施する。

2　別表 I ①に規定する芸術学部教育課程については全学年一斉に移行し、平成 11 年度以前入学者に対する移行・経過措置については、別にこれを定める。

3　第 4 条の規定にかかわらず、平成 12 年度から平成 15 年までの間の入学定員は、次のとおりとする。

学部・学科等	入　　学　　定　　員			
	平成 12 年度	平成 13 年度	平成 14 年度	平成 15 年度
芸 術 学 部	人	人	人	人
造 形 学 科	150	145	140	135
デザイン学科	170	165	160	155
計	320	310	300	290

人 文 学 部				
人 文 学 科	248	236	224	212
計	248	236	224	212

第 20 項　　この学則は、平成 13 年 4 月 1 日から実施する。

ただし、第 18 条に規定する芸術学部マンガ学科における中学校教諭 1 種免許状(美術)および高等学校教諭 1 種免許状(美術)を取得しようとする者は、平成 12 年 4 月入学者より必要単位を履修できるものとする。

また、人文学部環境社会学科において図書館司書の資格を取得しようとする者および芸術学部マンガ学科・人文学部環境社会学科において博物館学芸員の資格を取得しようとする者は、平成 12 年 4 月入学者より必要単位を履修できるものとする。

第 21 項　　この学則は、平成 15 年 4 月 1 日から実施する。

ただし、人文学部人文学科は、改定後の学則第 3 条の規定にかかわらず、当該学科に在籍する者が当該学科に在籍しなくなるまでの間、存続するものとする。

また、改定後の学則第 4 条の規定にかかわらず、平成 15 年度の人文学部社会メディア学科および文化表現学科の入学定員は、人文学部人文学科の臨時的定員の漸減計画による人数を継承し、以下のとおりとする。

学部・学科等	入 学 定 員
人 文 学 部	人
社会メディア学科	116
文 化 表 現 学 科	96
計	212

第 22 項　　この学則は、平成 16 年 4 月 1 日から実施する。

ただし、人文学部社会メディア学科において第 18 条に規定する高等学校教諭 1 種免許状(公民)を取得しようとする者は、平成 15 年 4 月入学者より必要単位を履修することができるものとする。

また、芸術学部造形学科・デザイン学科・マンガ学科、人文学部社会メディア学科・文化表現学科において図書館司書の資格を取得しようとする者、および人文学部社会メディア学科・文化表現学科において博物館学芸員の資格を取得しようとする者は、平成 15 年 4 月入学者より必要単位を履修することができるものとする。

さらに、別表 I については、平成 15 年 4 月入学者より適用する。

第 23 項　　この学則は、平成 17 年 4 月 1 日から実施する。

ただし、人文学部環境社会学科において第 18 条に規定する高等学校教諭 1 種免許状(公民)を取得しようとする者は、平成 16 年 4 月入学者より必要単位を履修することができるものとする。

第 24 項　　この学則は、平成 18 年 4 月 1 日から実施する。

ただし、別表 I に規定する教育課程のうち、芸術学部基礎講義・演習科目、デザイン学部基礎講

義・演習科目、マンガ学部基礎講義・演習科目、芸術学部専門講義科目、デザイン学部専門講義科目、デザイン学部建築学科専門教育科目の一部、マンガ学部専門講義科目については、芸術学部の平成１７年４月以前入学者に対しても一斉に適用し、履修することができるものとする。その移行・経過措置は別に定める。

第 25 項　　この学則は、平成 19 年 4 月 1 日から実施する。

ただし、別表Ｉに規定する教育課程のうち、デザイン学部建築学科専門教育科目の「身体空間演習」と「インテリア表現演習」については平成 19 年 4 月入学者より適用し、人文学部専門教育科目については平成 17 年 4 月入学者より適用し、それ以外については平成 18 年 4 月入学者より適用する。

第 26 項　　この学則は、平成 20 年 4 月 1 日から実施する。

ただし、別表Ｉに規定する教育課程のうち、芸術学部造形学科専門教育科目、デザイン学部基礎講義・演習科目、ビジュアルデザイン学科専門教育科目、マンガ学部基礎講義・演習科目、専門講義科目、アニメーション学科専門教育科目の一部については平成 20 年 4 月以前入学者に対しても一斉に適用し、履修できるものとする。その移行・経過措置は別に定める。

また、第 34 条に規定する入学金は平成 21 年 4 月入学者より適用し、授業料は、平成 20 年 4 月入学者より適用する。

さらに、第 29 条第 5 項に規定する休学期間中の学費は、平成 20 年 4 月 1 日より在籍学生に一斉適用する。

第 27 項　　この学則は、平成 21 年 4 月 1 日から実施する。

ただし、別表Ｉに規定する教育課程のうち、芸術学部基礎講義・演習科目の一部、専門講義科目、造形学科専門教育科目、素材表現学科専門教育科目の一部、デザイン学部基礎講義・演習科目の一部、ビジュアルデザイン学科専門教育科目の一部、プロダクトデザイン学科専門教育科目の一部、マンガ学部基礎講義・演習科目の一部、専門講義科目、マンガ学科専門教育科目、マンガプロデュース学科専門教育科目の一部、アニメーション学科専門教育科目については平成 21 年 4 月以前入学者に対しても一斉に適用し、履修できるものとする。その移行・経過措置は別に定める。

第 28 項　　この学則は、平成 22 年 4 月 1 日から実施する。

ただし、別表Ｉに規定する教育課程のうち、芸術学部専門講義科目の一部、造形学科専門教育科目の一部、素材表現学科専門教育科目の一部、メディア造形学科専門教育科目の一部、デザイン学部専門講義科目、ビジュアルデザイン学科専門教育科目の一部、プロダクトデザイン学科専門教育科目の一部、建築学科専門教育科目の一部、マンガ学部マンガプロデュース学科専門教育科目、アニメーション学科専門教育科目、人文学部総合人文学科専門教育科目については平成 22 年 4 月以前入学者に対しても一斉に適用し、履修できるものとする。その移行・経過措置は別に定める。

第 29 項　　この学則は、平成 23 年 4 月 1 日から実施する。

ただし、別表Ｉに規定する教育課程のうち、芸術学部専門講義科目の一部、造形学科専門教育科目の一部、素材表現学科専門教育科目の一部、メディア造形学科専門教育科目の一部、デザイン学部基礎講義・演習科目の一部、ビジュアルデザイン学科専門教育科目の一部、プロダクトデザイン学科専門教育科目の一部、建築学科専門教育科目の一部、マンガ学部基礎講義・演習科目・専門講義科目の一部、マンガ学科専門教育科目の一部、マンガプロデュース学科専門教育科目の一部、ア

ニメーション学科専門教育科目の一部、人文学部総合人文学科専門教育科目については平成 23 年 4 月以前入学者に対しても一斉に適用し、履修できるものとする。その移行・経過措置は別に定める。

第 30 項　　この学則は、平成 24 年 4 月 1 日から実施する。

ただし、別表 I に規定する教育課程のうち、芸術学部基礎講義・演習科目の一部、デザイン学部基礎講義・演習科目の一部、デザイン学部建築学科専門教育科目の一部、マンガ学部基礎講義・演習科目の一部、人文学部基礎教育科目については平成 24 年 4 月以前入学者に対しても一斉に適用し、履修できるものとする。また、芸術学部造形学科専門教育科目の一部については平成 23 年 4 月入学者に対しても適用する。その移行・経過措置については別に定める。

第 31 項　　この学則は、平成 25 年 4 月 1 日から実施する。

④ ポピュラーカルチャー学部

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数 必修	単位数 選択	単位数 計	備考
ポピュラーカルチャー学部	ポピュラーカルチャー学科	基礎講義・演習科目					「表現ナビ」2単位と「英語」（留学生は「日本語」）6単位必修を含み、基礎講義・演習科目から20単位以上必修
		表現ナビ	1	2		2	
		哲学	1･2･3･4		2	2	
		現代思想	1･2･3･4		2	2	
		宗教学	1･2･3･4		2	2	
		倫理と社会	1･2･3･4		2	2	
		日本文学	1･2･3･4		2	2	
		世界文学	1･2･3･4		2	2	
		民俗学	1･2･3･4		2	2	
		考古学	1･2･3･4		2	2	
		日本近現代史 1	1･2･3･4		2	2	
		日本近現代史 2	1･2･3･4		2	2	
		社会学	1･2･3･4		2	2	
		政治学	1･2･3･4		2	2	
		法学概論	1･2･3･4		2	2	
		日本国憲法	1･2･3･4		2	2	
		文化人類学	1･2･3･4		2	2	
		芸術と経済	1･2･3･4		2	2	
		芸術学 1	1･2･3･4		2	2	
		芸術学 2	1･2･3･4		2	2	
		東洋古典講座 1	1･2･3･4		2	2	
		東洋古典講座 2	1･2･3･4		2	2	
		西洋古典講座 1	1･2･3･4		2	2	
		西洋古典講座 2	1･2･3･4		2	2	
		現代日本社会論 1	1･2･3･4		2	2	
		現代日本社会論 2	1･2･3･4		2	2	
		言葉の科学	1･2･3･4		2	2	
		視覚認知論	1･2･3･4		2	2	
		科学の歴史	1･2･3･4		2	2	
		自然科学論	1･2･3･4		2	2	
		文明と環境	1･2･3･4		2	2	
		生物学	1･2･3･4		2	2	
		数学	1･2･3･4		2	2	
		マンガ文化論 1	1･2･3･4		2	2	
		マンガ文化論 2	1･2･3･4		2	2	
		創作論 1	1･2･3･4		2	2	
		創作論 2	1･2･3･4		2	2	
		情報処理基礎 1	1･2･3･4		1	1	
		情報処理基礎 2	1･2･3･4		1	1	
		キャリアデザイン 1	1･2･3･4		2	2	

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数 必修	選択	計	備考
ポピュラーカルチャー学部	ポピュラーカルチャー学科	キャリアデザイン 2	1･2･3･4		2	2	
		キャリアデザイン 3	2		2	2	
		キャリアデザイン 4	3		2	2	
		点字講座 1	1･2･3･4		2	2	
		点字講座 2	1･2･3･4		2	2	
		健康学 1	1･2･3･4		2	2	
		健康学 2	1･2･3･4		2	2	
		スポーツ実習 1	1･2･3･4		1	1	
		スポーツ実習 2	1･2･3･4		1	1	
		スポーツ実習 3	1･2･3･4		1	1	
		スポーツ実習 4	1･2･3･4		1	1	
		英語 1	1		2	2	
		英語 2	1		2	2	
		英語 3	2･3･4		2	2	
		英語 4	2･3･4		2	2	
		日本語 1	1		2	2	
		日本語 2	1		2	2	
		日本語 3	2･3･4		2	2	
		日本語 4	2･3･4		2	2	
		フランス語 1	1･2･3･4		2	2	
		フランス語 2	1･2･3･4		2	2	
		フランス語 3	2･3･4		2	2	
		フランス語 4	2･3･4		2	2	
		中国語 1	1･2･3･4		2	2	
		中国語 2	1･2･3･4		2	2	
		中国語 3	2･3･4		2	2	
		中国語 4	2･3･4		2	2	
		朝鮮語 1	1･2･3･4		2	2	
		朝鮮語 2	1･2･3･4		2	2	
		朝鮮語 3	2･3･4		2	2	
		朝鮮語 4	2･3･4		2	2	
		タイ語 1	1･2･3･4		2	2	
		タイ語 2	1･2･3･4		2	2	
		タイ語 3	2･3･4		2	2	
		タイ語 4	2･3･4		2	2	
		ドイツ語 1	1･2･3･4		2	2	
		ドイツ語 2	1･2･3･4		2	2	
		ドイツ語 3	2･3･4		2	2	
		ドイツ語 4	2･3･4		2	2	
		スペイン語 1	1･2･3･4		2	2	
		スペイン語 2	1･2･3･4		2	2	

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考
				必修	選択	計	
ポピュラーカルチャー学部	ポピュラーカルチャー学科	スペイン語 3	2･3･4		2	2	
		スペイン語 4	2･3･4		2	2	
		教育学概論	1･2･3･4		2	2	
		図書館概論	1･2･3･4		2	2	
		生涯学習概論	1･2･3･4		2	2	
		人権教育論	1･2･3･4		2	2	
		現代学校論	1･2･3･4		2	2	
		ワークショップ 1	1･2･3･4		2	2	
		ワークショップ 2	1･2･3･4		2	2	
		ワークショップ 3	1･2･3･4		2	2	
		ワークショップ 4	1･2･3･4		2	2	
		国内フィールドワーク 1	1･2･3･4		2	2	
		国内フィールドワーク 2	1･2･3･4		2	2	
		海外フィールドワーク 1	1･2･3･4		2	2	
		海外フィールドワーク 2	1･2･3･4		2	2	
		写真技法演習 1	1･2･3･4		2	2	
		写真技法演習 2	1･2･3･4		2	2	
		キャリアアップ演習 1	1･2･3･4		2	2	
		キャリアアップ演習 2	1･2･3･4		2	2	
		作品ポートフォリオ演習 1	3		1	1	
		作品ポートフォリオ演習 2	3		1	1	
		キャリアのためのデッサン 1	2		2	2	
		キャリアのためのデッサン 2	2		2	2	
		キャリアのためのデッサン 3	3		2	2	
		キャリアのためのデッサン 4	3		2	2	
		クリエイティブの現場	2･3･4		2	2	
		キャリアインターンシップ	2･3･4		2	2	
		ポピュラーカルチャー学部 専門講義科目 【分野基盤科目群】					必修 10 単位を含み 20 単位以上必修
		ポピュラーカルチャー原論	1	2		2	
		クリエイティブ概論	1	2		2	
		サウンドデザイン概論	1･2･3･4		2	2	
		ファッションデザイン概論	1･2･3･4		2	2	
		身体感覚構造概論	2･3･4		2	2	
		比較文化概論	2･3･4		2	2	
		ポピュラー音楽史	1･2･3･4		2	2	
		ファッション史	1･2･3･4		2	2	
		テクスト分析法研究	2･3･4		2	2	
		作品作家研究	2･3･4		2	2	
		スタイル素材研究	2･3･4		2	2	

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考
				必修	選択	計	
ポピュラーカルチャー学部	ポピュラーカルチャー学科	スタイル編集研究	2･3･4		2	2	
		舞台表現論	2･3･4		2	2	
		身体表現論	2･3･4		2	2	
		視聴覚表現論	2･3･4		2	2	
		ストリート表現論	2･3･4		2	2	
		【文化理論科目群】					
		ポップ批評	2	2		2	
		ポップ美学	2	2		2	
		文化社会学	1･2･3･4		2	2	
		メディア論	1･2･3･4		2	2	
		文化装置論	1･2･3･4		2	2	
		サブカルチャー論	1･2･3･4		2	2	
		広告文化論	1･2･3･4		2	2	
		近代社会文化誌	2･3･4		2	2	
		京都の文化装置 1	2･3･4		2	2	
		京都の文化装置 2	2･3･4		2	2	
		【コンテンツ・ビジネス科目群】					
		文化産業研究概論	1	2		2	
		知的財産権概論	2･3･4		2	2	
		マーケティング論	2･3･4		2	2	
		文化政策論	2･3･4		2	2	
		アートプロデュース論	2･3･4		2	2	
		ポピュラーカルチャー学部 専門実技科目 【基幹表現科目群】					必修 68 単位を含み 78 単位以上必修
		基礎実習 1	1	3		3	
		基礎実習 2	1	3		3	
		基礎実習 3	1	3		3	
		基礎実習 4	1	3		3	
		基礎実習 5	1	3		3	
		基礎実習 6	1	3		3	
		制作実習 1	2	3		3	
		制作実習 2	2	3		3	
		制作実習 3	2	3		3	
		制作実習 4	2	3		3	
		領域横断基礎演習 1	2	2		3	
		領域横断基礎演習 2	2	2		3	
		応用実習 1	3	3		3	
		応用実習 2	3	3		3	
		応用実習 3	3	3		3	
		応用実習 4	3	3		3	

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考
				必修	選択	計	
ポピュラーカルチャー学部	ポピュラーカルチャー学科	領域横断演習 1	3	2		2	
		領域横断演習 2	3	2		2	
		自由制作 1	4	3		3	
		自由制作 2	4	3		3	
		自由制作 3	4	3		3	
		卒業制作 1	4	3		3	
		卒業制作 2	4	3		3	
		卒業制作 3	4	3		3	
		【表現融合科目群】					
		企画演習 1	1･2･3		2	2	
		企画演習 2	1･2･3		2	2	
		企画演習 3	1･2･3		2	2	
		企画演習 4	1･2･3		2	2	
		企画演習 5	1･2･3		2	2	
		企画演習 6	1･2･3		2	2	
		【メディア制作科目群】					
		メディア制作 1	1･2･3		2	2	
		メディア制作 2	1･2･3		2	2	
		メディア制作 3	1･2･3		2	2	
		メディア制作 4	1･2･3		2	2	
		メディア制作 5	1･2･3		2	2	
		メディア制作 6	1･2･3		2	2	
		メディア制作 7	1･2･3		2	2	
		メディア制作 8	1･2･3		2	2	
		【表現越境科目群】					
		デッサン 1	2･3･4		2	2	
		デッサン 2	2･3･4		2	2	
		身体表現 1	2･3･4		2	2	
		身体表現 2	2･3･4		2	2	
		文章表現 1	2･3･4		2	2	
		文章表現 2	2･3･4		2	2	
		クラフト 1	2･3･4		2	2	
		クラフト 2	2･3･4		2	2	
		調理表現	2･3･4		2	2	
		【実務研修科目群】					
		インターンシップ	3･4		2	2	
		制作実務研修 1	2･3･4		2	2	
		制作実務研修 2	2･3･4		2	2	
		制作実務研修 3	2･3･4		2	2	
		制作実務研修 4	2･3･4		2	2	

別表Ⅱ　教職に関する専門科目

教職に関する科目

学部	学科	授業科目	単位数 必修	単位数 選択	単位数 計	備考
芸術学部・デザイン学部・マンガ学部・人文学部	課程を設置する各学科	教育の意義等に関する科目				1　「各教科の指導法」は該当教科の指導法を履修する。なお、各教科の指導法より、中一種免、高一種免ともに 4 単位以上をそれぞれ選択必修とする。ただし、中一種免（社会）、高一種免（公民）（地歴）は、6 単位以上を選択必修とする。 2　「道徳教育論」および「教育実習Ⅱ」の単位は、中一種免取得希望者のみ必修とする。 3　「教職実践演習」に対応する授業科目は平成25年度より実施し、「総合演習」に対応する授業科目は平成 24 年度をもって廃止する。なお、平成 24 年度までに「総合演習」の単位を修得すれば、「教職実践演習」の単位を修得することを要しない。
		教職論	2		2	
		教育の基礎理論に関する科目				
		教育原理	2		2	
		教育心理学	2		2	
		教育制度論	2		2	
		教育課程及び指導法に関する科目				
		教育課程論	2		2	
		美術科教育法Ⅰ		2	2	
		美術科教育法Ⅱ		2	2	
		美術科・工芸科教育法Ⅰ		2	2	
		美術科・工芸科教育法Ⅱ		2	2	
		国語科教育法Ⅰ		2	2	
		国語科教育法Ⅱ		2	2	
		国語科教育法Ⅲ		2	2	
		国語科教育法Ⅳ		2	2	
		英語科教育法Ⅰ		2	2	
		英語科教育法Ⅱ		2	2	
		英語科教育法Ⅲ		2	2	
		英語科教育法Ⅳ		2	2	
		社会科地歴科教育法Ⅰ		2	2	
		社会科地歴科教育法Ⅱ		2	2	
		社会科公民科教育法Ⅰ		2	2	
		社会科公民科教育法Ⅱ		2	2	
		道徳教育論		2	2	
		特別活動論	2		2	
		教育方法論	2		2	
		生徒指導、教育相談及び進路指導等に関する科目				
		生徒指導論	2		2	
		教育相談	2		2	
		教育実習				
		事前・事後指導	1		1	
		教育実習Ⅰ	2		2	
		教育実習Ⅱ		2	2	
		教職実践演習				
		教職実践演習（中・高）	2		2	

教科又は教職に関する科目

学部	学科	授業科目	単位数			備考
			必修	選択	計	
芸術学部・デザイン学部・マンガ学部・人文学部	課程を設置する各学科	人権教育論		2	2	「教科又は教職に関する科目」の選択科目から 2 単位以上選択必修。 「教科又は教職に関する科目」の選択科目から 2 単位以上と最低修得単位を超えて履修した「教科に関する科目」若しくは「教職に関する科目」を併せて、中一種免の場合には 8 単位以上、高一種免の場合には 16 単位以上修得する。
		現代学校論		2	2	
		差別と現代社会		2	2	
		子どもの社会史		2	2	
		子ども支援論Ⅰ		2	2	
		子ども支援論Ⅱ		2	2	
		障害者理解		2	2	
		多文化教育論		2	2	
		ジェンダーと社会		2	2	
		社会教育論		2	2	
		環境教育論		2	2	

別表Ⅲ　図書館司書課程に関する科目

学部	学科	区分	授業科目	単位数			備考
				必修	選択	計	
芸術学部・デザイン学部・マンガ学部・人文学部	課程を設置する学科	必修科目	生涯学習概論		2	2	「生涯学習概論」もしくは「生涯学習概論Ⅰ」を選択必修。
			生涯学習概論Ⅰ		2	2	
			図書館概論	2		2	
			図書館制度・経営論	2		2	
			図書館情報技術論	2		2	
			図書館サービス概論	2		2	
			情報サービス論	2		2	
			児童サービス論	2		2	
			情報サービス演習1	1		1	
			情報サービス演習2	1		1	
			図書館情報資源概論	2		2	
			情報資源組織論	2		2	
			情報資源組織演習1	1		1	
			情報資源組織演習2	1		1	
		選択科目	図書館サービス特論		2	2	3科目のうち2科目を選択必修
			図書館情報資源特論		2	2	
			図書・図書館史		2	2	

別表Ⅳ　博物館学芸員課程に関する科目

学部	学科	区分		授業科目	単位数 必修	単位数 選択	単位数 計	備考
芸術学部・デザイン学部・マンガ学部・人文学部	課程を設置する学科	必修科目		生涯学習概論		2	2	「生涯学習概論」もしくは「生涯学習概論Ⅰ」を選択必修。
				生涯学習概論Ⅰ		2	2	
				博物館概論	2		2	
				博物館経営論	2		2	
				博物館資料論	2		2	
				博物館資料保存論	2		2	
				博物館展示論	2		2	
				博物館教育論	2		2	
				博物館情報・メディア論	2		2	
				博物館実習	3		3	
		選択科目	文化史	日本文化史概論		2	2	2系列以上にわたり、それぞれ1科目以上、計2科目4単位以上を履修しなければならない。
				説話・伝承史		2	2	
			美術史	日本美術史		2	2	
				アジア美術史		2	2	
				西洋美術史		2	2	
				美術史1		2	2	
				美術史2		2	2	
				日本美術史1		2	2	
				日本美術史2		2	2	
				アジア美術史1		2	2	
				アジア美術史2		2	2	
				西洋美術史1		2	2	
				西洋美術史2		2	2	
			考古学	考古学		2	2	
			民俗学	民俗学Ⅰ		2	2	
				民俗学Ⅱ		2	2	
				民俗学		2	2	
			自然科学史	自然科学概論		2	2	
				自然科学論		2	2	
			生物学	生物学Ⅰ		2	2	
				生物学Ⅱ		2	2	
				生物学		2	2	

別表Ⅴ　学校図書館司書教諭課程に関する科目

学部	学科	授業科目	単位数 必修	単位数 選択	単位数 計	備考
芸術学部・人文学部	課程を設置する学科	学校経営と学校図書館	2		2	
		学校図書館メディアの構成	2		2	
		学習指導と学校図書館	2		2	
		読書と豊かな人間性	2		2	
		情報メディアの活用	2		2	

別表Ⅵ　社会教育主事課程に関する科目

学部	学科	区分	授業科目	単位数 必修	単位数 選択	単位数 計	備考
人文学部	課程を設置する学科	必修科目	生涯学習概論Ⅰ	2		2	
			生涯学習概論Ⅱ	2		2	
			社会教育政策論	2		2	
			学習支援論	2		2	
			社会教育演習	2		2	
			社会教育課題研究	2		2	
		選択科目	社会教育論		2	2	社会教育主事講習等規程に定められた省令上の各カテゴリーの最低修得単位数を満たしつつ、17科目より12単位以上選択必修。
			子ども支援論Ⅰ		2	2	
			子ども支援論Ⅱ		2	2	
			多文化教育論		2	2	
			ボランティア論		2	2	
			図書館概論		2	2	
			博物館情報・メディア論		2	2	
			博物館概論		2	2	
			人権教育論		2	2	
			スポーツと社会		2	2	
			スポーツと時代		2	2	
			教育学概論		2	2	
			子どもの社会史		2	2	
			ジェンダーと社会		2	2	
			高齢化社会論		2	2	
			まちづくり論		2	2	
			環境教育論		2	2	

別表Ⅶ　社会調査士課程に関する科目

学部	学科	授業科目	単位数			備考
			必修	選択	計	
デザイン学部・人文学部	課程を設置する学科	社会調査法Ⅰ	2		2	
		社会調査法Ⅱ	2		2	
		統計学	2		2	
		社会統計学	2		2	
		社会調査特論	2		2	
		社会調査技法Ⅰ	2		2	
		社会調査技法Ⅱ	2		2	

別表Ⅷ

① 正規の学生の授業料等

1. 入学検定料

費　　目	金　　額
入 学 検 定 料	35,000 円
大学入試センター試験を利用する入学試験の検定料	10,000 円

注） 入学検定料は、学内規程により減免することができる。

2. 入学金

費　　目	金　　額
入　　学　　金	200,000 円

3. 芸術学部学費

費　　目	前　　期	後　　期	年　　間
授　　業　　料	775,000 円	775,000 円	1,550,000 円

4. デザイン学部学費

費　　目	前　　期	後　　期	年　　間
授　　業　　料	789,500 円	789,500 円	1,579,000 円

5. マンガ学部学費

費　　目	前　　期	後　　期	年　　間
授　　業　　料	789,500 円	789,500 円	1,579,000 円

6. ポピュラーカルチャー学部学費

費　　目	前　　期	後　　期	年　　間
授　　業　　料	789,500 円	789,500 円	1,579,000 円

7. 人文学部学費

費　　目	前　　期	後　　期	年　　間
授　　業　　料	543,000 円	543,000 円	1,086,000 円

② 編入学・転入学・再入学の授業料等は入学年次に相当する正規の学生の年次の授業料等に準ずるものとし、入学検定料および入学金については正規の学生の 1 年生に準ずるものとする。

③ 聴講料

登　録　料	15,000 円
聴　講　料 （１単位あたり）	15,000 円

④ 科目等履修料

登　録　料	15,000 円
履　修　料 （１単位あたり）	15,000 円

⑤ 研究生学費

研究生	前　期	後　期	年　間
芸術学部	291,500 円	291,500 円	583,000 円
デザイン学部	296,500 円	296,500 円	593,000 円
マンガ学部	296,500 円	296,500 円	593,000 円
ポピュラーカルチャー学部	296,500 円	296,500 円	593,000 円
人文学部	214,500 円	214,500 円	429,000 円

京都精華大学研究生学費算出基準

(1) 研究生出願手数料 ＝ 学部入学検定料×1/3

(2) 研究生授業料 ＝ (学部入学金＋学部授業料)×1/3

(3) ただし、1,000 円未満は四捨五入とする。

学　長　の　氏　名　等						
調書番号	役職名	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	年齢	保有学位等	月額基本給 （千円）	現　職 （就任年月）
－	学長	ツボウチ　シゲアキ 坪内　成晃 ＜平成22年5月＞		芸術学士		京都精華大学 学長 (平22.5) 京都精華大学デザイン学部 教授 (平4.6)

教　員　の　氏　名　等

（ポピュラーカルチャー学部ポピュラーカルチャー学科）

調書番号	専任等区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	年齢	保有学位等	月額基本給(千円)	担当授業科目の名称	配当年次	担当単位数	年間開講数	現　職 (就任年月)	申請に係る大学等の職務に従事する週当たり平均日数
1	専	教授 (学部長就任予定)	サイトウ　ヒカル 斎藤　光 ＜平成25年4月＞		学術修士 理学修士		ポピュラーカルチャー原論 ポップ美学 自由制作1 自由制作2 自由制作3 卒業制作1 卒業制作2 卒業制作3	1前 2後 4前 4前 4前 4後 4後 4後	2 2 3 3 3 3 3 3	1 1 1 1 1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 教授 (平14.4)	5日
2	専	教授	サクマ　マサヒデ 佐久間　正英 ＜平成27年4月＞		学士 (人文学)		応用実習1 応用実習3	d	3 3	1 1	株式会社 ビタミン出版 代表取締役 (昭63.6) 株式会社 ビタミン出版 代表取締役 (昭63.6)	4日 4日
3	専	教授	タカノ　ヒロシ 高野　寛 ＜平成26年4月＞		芸術学士		制作実習1 制作実習3 応用実習2 応用実習4	2前 2後 3前 3後	3 3 3 3	1 1 1 1	音楽プロデューサー (平13.1) 音楽プロデューサー (平13.1) ミュージシャン (昭63.4)	4日 4日
4	専	教授	チカダ　ハルオ 近田　春夫 ＜平成27年4月＞		高等学校卒		応用実習1 応用実習3	3前 3後	3 3	1 1	音楽プロデューサー (昭55.6) 音楽プロデューサー (昭55.6) ミュージシャン (昭47.4)	4日 4日
5	専	教授	ナガタ　ジュン 永田　純 ＜平成27年4月＞		高等学校卒		応用実習2 応用実習4	3前 3後	3 3	1 1	有限会社スタマック 代表取締役 (平1.10)	4日
6	専	教授	ナカフシキ　ヒロシ 中伏木　寛 ＜平成25年4月＞		工学士		基礎実習6 自由制作1 自由制作2 自由制作3 卒業制作1 卒業制作2 卒業制作3	1後 4前 4前 4前 4後 4後 4後	3 3 3 3 3 3 3	1 1 1 1 1 1 1	宝塚大学 メディアデザイン学科 准教授 (平20.4)	5日
7	専	教授	ナカミチ　トモコ 中道　友子 ＜平成25年4月＞		専門学校卒		基礎実習3 基礎実習4 制作実習2 制作実習4	1前 1後 2前 2後	3 3 3 3	1 1 1 1	文化服装学院 教授 (平21.3まで)	4日
8	専	教授	ニシタニ　マリコ 西谷　真理子 ＜平成25年4月＞		文学士		クリエイティブ概論 応用実習1 応用実習4	1前 3前 3後	2 3 3	1 1 1	ハイファッション・ オンライン チーフ・エディター (平23.4) ハイファッション・ オンライン チーフ・エディター (平23.4)	4日 4日
9	専	教授	ヤナギダ　タケシ 柳田　剛 ＜平成25年4月＞		専門学校卒		基礎実習6 自由制作1 自由制作2 自由制作3 卒業制作1 卒業制作2 卒業制作3	1後 4前 4前 4前 4後 4後 4後	3 3 3 3 3 3 3	1 1 1 1 1 1 1	有限会社所以 代表 (平17.4) 有限会社所以 代表 (平17.4)	5日 2日

調書番号	専任等区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	年齢	保有学位等	月額基本給(千円)	担当授業科目の名称	配当年次	担当単位数	年間開講数	現　職 (就任年月)	申請に係る大学等の職務に従事する週当たり平均日数
10	専	准教授	オチ　アキコ 落　晃子 ＜平成25年4月＞		教育学修士		京都の文化装置1 京都の文化装置2 基礎実習1 基礎実習2 基礎実習4 制作実習2 制作実習4	2・3・4前 2・3・4後 1前 1前 1後 2前 2後	2 2 3 3 3 3 3	1 1 1 1 1 1 1	京都精華大学 芸術学部 非常勤講師 (平21.4)	4日
11	専	准教授	ボーズ Bose (光嶋　誠) ＜平成25年4月＞		専門学校卒		基礎実習2 制作実習2 制作実習4 応用実習2 応用実習4	1前 2前 2後 3前 3後	3 3 3 3 3	1 1 1 1 1	ミュージシャン (昭63.4) ミュージシャン (昭63.4)	4日 4日
12	専	准教授	ヤスダ　マサヒロ 安田　昌弘 ＜平成25年4月＞		Ph.D (仏国)		ポップ批評 文化産業研究概論 基礎実習3 制作実習1 制作実習3 自由制作1 自由制作2 自由制作3 卒業制作1 卒業制作2 卒業制作3	2前 1後 1前 2前 2後 4前 4前 4前 4後 4後 4後	2 2 3 3 3 3 3 3 3 3 3	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 准教授 (平21.4)	5日
13	専	講師	アシダ　ヒロシ 蘆田　裕史 ＜平成25年4月＞		修士※ (人間・環境学)		ファッション史 作品作家研究 基礎実習5 応用実習2 自由制作1 自由制作2 自由制作3 卒業制作1 卒業制作2 卒業制作3 企画演習4 企画演習5 企画演習6 インターンシップ 制作実務研修3 制作実務研修4	1・2・3・4前 2・3・4後 1後 3前 4前 4前 4前 4後 4後 4後 1・2・3後 1・2・3前 1・2・3後 3・4前 2・3・4前 2・3・4後	2 2 3 3 3 3 3 3 3 3 1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	京都服飾文化研究財団 アシスタント・ キュレーター (平23.4)	5日
14	専	講師	タニグチ　フミカズ 谷口　文和 ＜平成25年4月＞		修士※ (音楽)		ポピュラー音楽史 テクスト分析法研究 基礎実習5 制作実習3 自由制作1 自由制作2 自由制作3 卒業制作1 卒業制作2 卒業制作3 企画演習1 企画演習2 企画演習3 制作実務研修1 制作実務研修2	1・2・3・4前 2・3・4前 1後 2後 4前 4前 4前 4後 4後 4後 1・2・3前 1・2・3後 1・2・3前 2・3・4前 2・3・4後	2 2 3 3 3 3 3 3 3 3 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	亜細亜大学 短期大学部 特任講師 (平21.4)	5日
15	専	講師	ヤマガタ　ヨシカズ 山縣　良和 ＜平成25年4月＞		Bachelor of Art, Fashion Design (英国)		基礎実習1 制作実習1 制作実習3 応用実習1 応用実習3	1前 2前 2後 3前 3後	3 3 3 3 3	1 1 1 1 1	株式会社 リトゥンアフターワーズ 代表取締役 (平19.4) 株式会社 リトゥンアフターワーズ 代表取締役 (平19.4)	4日 4日
16	兼担	教授	アライ　キヨカズ 新井　清一 ＜平成27年4月＞		Master of Architects ※ (米国)		応用実習2 応用実習4	3前 3後	3 3	1 1	京都精華大学 デザイン学部 教授 (平11.4)	
17	兼担	教授	イノウエ　ユウイチ 井上　有一 ＜平成25年4月＞		国際学修士 Ph.D. Candidacy (加国)		科学の歴史	1・2・3・4前	2	1	京都精華大学 人文学部 教授 (平12.4)	
18	兼担	教授	エグチ　エイコ 江口　英子 ＜平成25年4月＞		M.A. (米国)		日本語1 日本語2	1前 1後	2 2	2 2	京都精華大学 人文学部 教授 (平19.4)	

調書番号	専任等区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	年齢	保有学位等	月額基本給(千円)	担当授業科目の名称	配当年次	担当単位数	年間開講数	現　職 (就任年月)	申請に係る大学等の職務に従事する週当たり平均日数
19	兼担	教授	エンドウ　イクエ 遠藤　育枝 ＜平成25年4月＞		M.A. (米国)		世界文学	1・2・3・4前	2	1	京都精華大学 人文学部 教授 (平11.4)	
20	兼担	教授	オンチ　ノリオ 恩地　典雄 ＜平成25年4月＞		工学博士		キャリアデザイン2 キャリアデザイン3 キャリアデザイン4 キャリアインターンシップ	1・2・3・4前 2後 3前 2・3・4前後	2 2 2 2	1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 教授 (平13.4)	
21	兼担	教授	カジカワ　ヨシコ 梶川　よ志子 ＜平成25年4月＞		文学修士		英語1 英語2	1前 1後	2 2	1 1	京都精華大学 人文学部 教授 (平11.4)	
22	兼担	教授	クリス　ミツル 栗巣　満 ＜平成25年4月＞		体育学 修士		健康学1 健康学2	1・2・3・4前 1・2・3・4後	2 2	1 1	京都精華大学 人文学部 教授 (平14.4)	
23	兼担	教授	サワダ　マサト 澤田　昌人 ＜平成25年4月＞		理学博士		政治学 文化人類学	1・2・3・4前 1・2・3・4後	2 2	1 1	京都精華大学 人文学部 教授 (平14.4)	
24	兼担	教授	シマモト　カン 島本　浣 ＜平成26年4月＞		博士 (文学)		身体感覚構造概論	2･3･4前	2	1	京都精華大学 芸術学部 教授 (平14.4)	
25	兼担	教授	タカハシ　シンイチ 髙橋　伸一 ＜平成25年4月＞		博士 (文学)		表現ナビ	1前	2	1	京都精華大学 人文学部 教授 (平19.4)	
26	兼担	教授	タケクマ　ケンタロウ 竹熊　健太郎 ＜平成25年4月＞		高等学校 卒		マンガ文化論1 マンガ文化論2	1・2・3・4前 1・2・3・4後	2 2	1 1	京都精華大学 マンガ学部 教授 (平21.4)	
27	兼担	教授	タケシマ　アキオ 竹島　昭雄 ＜平成25年4月＞		法学学士		図書館概論	1・2・3・4前	2	1	京都精華大学 人文学部 教授 (平22.4)	
28	兼担	教授	ツツイ　ヨウイチ 筒井　洋一 ＜平成26年4月＞		法学修士		キャリアデザイン3 キャリアデザイン4	2後 3前	2 2	1 1	京都精華大学 人文学部 教授 (平15.4)	
29	兼担	教授	ナカジマ　マサズミ 中島　勝住 ＜平成25年4月＞		教育学 修士 ※		人権教育論	1・2・3・4前	2	1	京都精華大学 人文学部 教授 (平9.4)	
30	兼担	教授	ナカニシ　ヒロツグ 中西　宏次 ＜平成25年4月＞		教育学 修士		現代学校論	1・2・3・4後	2	1	京都精華大学 人文学部 教授 (平21.4)	
31	兼担	教授	ナカヒラ　ヨシオ 中平　佳男 ＜平成25年4月＞		体育学士		スポーツ実習1 スポーツ実習2 スポーツ実習3 スポーツ実習4	1・2・3・4前 1・2・3・4後 1・2・3・4前 1・2・3・4後	1 1 1 1	1 1 1 1	京都精華大学 芸術学部 教授 (平7.4)	
32	兼担	教授	ハマダ　クニヒロ 濱田　邦裕 ＜平成25年4月＞		工学修士		創作論1 創作論2	1・2・3・4前 1・2・3・4後	2 2	1 1	京都精華大学 芸術学部 教授 (平20.4)	
33	兼担	教授	ハヤマ　ツトム 葉山　勉 ＜平成25年4月＞		工学修士		表現ナビ	1前	2	1	京都精華大学 デザイン学部 教授 (平19.4)	

調書番号	専任等区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	年齢	保有学位等	月額基本給(千円)	担当授業科目の名称	配当年次	担当単位数	年間開講数	現　職 (就任年月)	申請に係る大学等の職務に従事する週当たり平均日数
34	兼担	教授	ミヤ　カズホ 宮　一穂 ＜平成25年4月＞		教養学士		日本文学 日本近現代史1 日本近現代史2 東洋古典講座1 東洋古典講座2 西洋古典講座1 西洋古典講座2 現代日本社会論1 現代日本社会論2	1・2・3・4前後 1・2・3・4前 1・2・3・4後 1・2・3・4前 1・2・3・4後 1・2・3・4前 1・2・3・4後 1・2・3・4前 1・2・3・4後	2 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 1 1 1 1 1	京都精華大学 デザイン学部 教授 (平18.4)	
35	兼担	教授	ワタナベ　ヒデユキ 渡邉　英之 ＜平成25年4月＞		文学修士		哲学 教育学概論	1・2・3・4前 1・2・3・4前	2 2	1 1	京都精華大学 芸術学部 教授 (平15.4)	
36	兼担	准教授	ウスビ　サコ Oussouby Sacko (佐古　ウスビ) ＜平成25年4月＞		工学博士		国内フィールドワーク1 国内フィールドワーク2	1・2・3・4前 1・2・3・4後	2 2	1 1	京都精華大学 人文学部 准教授 (平19.4)	
37	兼担	准教授	オオシモ　ダイスケ 大下　大介 ＜平成25年4月＞		専門学校卒		領域横断基礎演習1 領域横断基礎演習2 領域横断演習1 領域横断演習2 企画演習6 メディア制作8	2前 2後 3前 3後 1・2・3後 1・2・3後	2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 1 1	京都精華大学 デザイン学部 准教授 (平24.4)	
38	兼担	准教授	カワバタ　ヘイキ 川端　平気 (川端　幹人) ＜平成26年4月＞		学士 (法学)		キャリアデザイン3 キャリアデザイン4 クリエイティブの現場 制作実務研修1 制作実務研修2 制作実務研修3 制作実務研修4 インターンシップ	2後 3前 2・3・4後 2・3・4前 2・3・4後 2・3・4前 2・3・4後 3・4前	2 2 2 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1 1	京都精華大学 キャリアデザイン センター　准教授 (平23.4)	
39	兼担	准教授	コマツ　マサフミ 小松　正史 ＜平成25年4月＞		博士 (工学)		サウンドデザイン概論	1･2･3･4後	2	1	京都精華大学 人文学部 准教授 (平19.4)	
40	兼担	准教授	サトウ　モリヒロ 佐藤　守弘 ＜平成25年4月＞		博士 (芸術学)		芸術学1 芸術学2 視覚認知論 広告文化論	1・2・3・4前 1・2・3・4後 1・2・3・4前 1・2・3・4前	2 2 2 2	1 1 1 1	京都精華大学 デザイン学部 准教授 (平20.4)	
41	兼担	准教授	ハットリ　シズエ 服部　静枝 ＜平成25年4月＞		修士 (経済学)		キャリアデザイン1	1・2・3・4後	2	1	京都精華大学 人文学部 准教授 (平成21.4)	
42	兼担	准教授	モリハラ　ノリユキ 森原　規行 ＜平成25年4月＞		学士 (美術)		応用実習3 企画演習1 企画演習2	3後 1・2・3前 1・2・3後	3 1 1	1 1 1	京都精華大学 デザイン学部 准教授 (平20.4)	
43	兼担	准教授	ヤブウチ　サトシ 籔内 智 ＜平成25年4月＞		修士 (教育学)		海外フィールドワーク1 海外フィールドワーク2	1・2・3・4前 1・2・3・4後	2 2	1 1	京都精華大学 人文学部 准教授 (平15.4)	
44	兼担	講師	サイトウ　ユキコ 西塔　由貴子 ＜平成25年4月＞		M. Litt of classics (英国)		英語1 英語2 英語3	1前 1後 2・3・4前	2 2 2	2 2 2	京都精華大学 人文学部 講師 (平21.4)	
45	兼担	講師	ヒライ　アイ 平井　愛 ＜平成26年4月＞		博士 (学術)		英語3	2・3・4前	2	2	京都精華大学 人文学部 講師 (平21.4)	
46	兼担	講師	マキノ　ヒロキ 牧野　浩紀 ＜平成25年4月＞		修士 (美術)		ワークショップ1 ワークショップ2 ワークショップ3 ワークショップ4	1・2・3・4前集中 1・2・3・4前集中 1・2・3・4前集中 1・2・3・4前集中	2 2 2 2	1 1 1 1	京都精華大学 芸術学部 講師 (平20.4)	
47	兼担	講師	モリ　ユミコ 森　由美子 ＜平成25年4月＞		修士 (教育学) 修士 (言語学)		英語1 英語2	1前 1後	2 2	2 2	京都精華大学 人文学部 講師 (平21.4)	

調書番号	専任等区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	年齢	保有学位等	月額基本給(千円)	担当授業科目の名称	配当年次	担当単位数	年間開講数	現　職 (就任年月)	申請に係る大学等の職務に従事する週当たり平均日数
48	兼任	講師	アオキ　タカマサ 青木　孝充 ＜平成27年4月＞		学士 (文学)		応用実習2 応用実習4	3前 3後	3 3	1 1	音楽家 (平12.4)	
49	兼任	講師	アオキ　ヤミナ 青木　ヤミナ ＜平成25年4月＞		M.A. (仏国)		フランス語1 フランス語2 フランス語3 フランス語4	1・2・3・4前 1・2・3・4後 2・3・4前 2・3・4後	2 2 2 2	2 2 2 2	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平9.4)	
50	兼任	講師	アキヨシ　ヤスハル 秋吉　康晴 ＜平成26年4月＞		文学修士		制作実習2 制作実習4	2前 2後	3 3	1 1	神戸大学大学院 人文学研究科 博士課程後期課程 在籍 (平19.4)	
51	兼任	講師	アライ　ユウゾウ 新井　佑造 ＜平成25年4月＞		神学修士 ※		宗教学 社会学	1・2・3・4前 1・2・3・4後	2 2	1 1	京都造形芸術大学 名誉教授 (平18.4)	
52	兼任	講師	アリヤ　コウサ 有家　高佐 ＜平成25年4月＞		社会学 博士		タイ語1 タイ語4	1・2・3・4前後 2・3・4後	4 2	4 2	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平4.4)	
53	兼任	講師	イイダ　ユタカ 飯田　豊 ＜平成26年4月＞		修士※ (学際情報学)		ストリート表現論	2･3･4前	2	1	立命館大学 産業社会学部 准教授 (平24.4)	
54	兼任	講師	イケガミ　ケイイチ 池上　恵一 ＜平成25年4月＞		修士 (美術)		ワークショップ1 ワークショップ2 ワークショップ3	1・2・3・4前集中 1・2・3・4前集中 1・2・3・4前集中	2 2 2	1 1 1	京都精華大学 芸術学部 非常勤講師 (平12.4)	
55	兼任	講師	イシオカ　リョウジ 石岡　良治 ＜平成25年4月＞		学士 (芸術)		メディア制作2	1･2･3後	2	1	有限会社ename1. 代表取締役 (平20.3)	
56	兼任	講師	イシガミ　カズヤ 石上　和也 ＜平成26年4月＞		修士 (都市情報学)		制作実習1 制作実習3	2前 2後	3 3	1 1	大阪芸術大学 通信教育部 非常勤講師 (平20.7)	
57	兼任	講師	イシカワ　マサエ 石川　正恵 ＜平成27年4月＞		専門学校 卒		応用実習1 応用実習3	3前 3後	3 3	1 1	デザイナー (平14.4)	
58	兼任	講師	イソベ　ヒロアキ 磯部　洋明 ＜平成25年4月＞		博士 (理学)		自然科学論	1・2・3・4前	2	1	京都大学 宇宙総合学研究ユニット 特定助教 (平20.4)	
59	兼任	講師	イトウ　キミオ 伊藤　公雄 ＜平成25年4月＞		文学修士 ※		文化装置論	1･2･3･4後	2	1	京都大学大学院 文学研究科 教授 (平17.4)	
60	兼任	講師	イナガキ　アキコ 稲垣　顕子 ＜平成26年4月＞		言語文化 学修士		スペイン語3 スペイン語4	2・3・4前 2・3・4後	2 2	2 2	スペイン語クラブ 主宰 (平14.10)	
61	兼任	講師	イノウエ　ヤスシ 井上　康 ＜平成25年4月＞		教育学 修士		数学	1・2・3・4前	2	1	京都精華大学 芸術学部 非常勤講師 (平22.4)	
62	兼任	講師	イマダ　ケンタロウ 今田　健太郎 ＜平成26年4月＞		修士※ (文学)		近代社会文化誌	2･3･4後	2	1	四天王寺大学 人文社会学部 専任講師 (平24.4)	
63	兼任	講師	イマフク　ミチオ 今福　道夫 ＜平成25年4月＞		理学博士		生物学	1・2・3・4前	2	1	京都大学名誉教授 (平20.4)	
64	兼任	講師	ウオズミ　ヨウイチ 魚住　洋一 ＜平成25年4月＞		文学修士		倫理と社会	1・2・3・4前	2	1	京都市立美術大学 美術学部 教授 (平13.4)	

調書番号	専任等区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	年齢	保有学位等	月額基本給(千円)	担当授業科目の名称	配当年次	担当単位数	年間開講数	現　職 (就任年月)	申請に係る大学等の職務に従事する週当たり平均日数
65	兼任	講師	ウエマツ　マサムネ 上松　正宗 ＜平成25年4月＞		学士 (芸術)		メディア制作1	1･2･3前	2	1	写真家 (2003年4月)	
66	兼任	講師	ウノ　ツネヒロ 宇野　常寛 ＜平成25年4月＞		学士 (文学)		サブカルチャー論	1･2･3･4前	2	1	文筆家、編集者 (平14.10)	
67	兼任	講師	エンドウ　ミズキ 遠藤　水城 ＜平成26年4月＞		修士※ (比較社会文化)		アートプロデュース論	2･3･4後	2	1	インディペンデント・キュレーター (平18.7)	
68	兼任	講師	オオタ　サヤン 太田　サヤン ＜平成25年4月＞		短期大学卒 (泰国)		タイ語1 タイ語2	1・2・3・4前後 1・2・3・4後	4 2	4 2	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平10.4)	
69	兼任	講師	オカダ　ヨシエ 岡田　芳枝 ＜平成27年4月＞		高等学校卒		領域横断演習1 領域横断演習2	3前 3後	2 2	1 1	株式会社 プリグラフィックス (平15.9)	
70	兼任	講師	オザキ　マサユキ 尾崎　正幸 ＜平成25年4月＞		体育学修士		スポーツ実習1 スポーツ実習2 スポーツ実習3 スポーツ実習4	1・2・3・4前 1・2・3・4後 1・2・3・4前 1・2・3・4後	1 1 1 1	1 1 1 1	京都精華大学 芸術学部 非常勤講師 (平15.4)	
71	兼任	講師	オリイ　ホヅミ 折井　穂積 ＜平成25年4月＞		文学博士		フランス語1	1・2・3・4前	2	2	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平12.4)	
72	兼任	講師	カツヤマ　ヒロコ 勝山　廣子 ＜平成25年4月＞		M.A. (米国)		点字講座1 点字講座2	1・2・3・4前 1・2・3・4後	2 2	1 1	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平6.4)	
73	兼任	講師	カワイ　テツロウ 川合　哲郎 ＜平成25年4月＞		文学修士		英語1 英語2	1前 1後	4 4	4 4	京都精華大学 芸術学部 非常勤講師 (昭55.4)	
74	兼任	講師	カワオ　トモコ 川尾　朋子 ＜平成26年4月＞		学士 (生活科学)		領域横断基礎演習1 領域横断基礎演習2	2前 2後	2 2	1 1	書家 (平20.9)	
75	兼任	講師	カワタ　マナブ 河田　学 ＜平成25年4月＞		博士 (人間・環境学)		現代思想	1・2・3・4後	2	1	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平18.4)	
76	兼任	講師	カワナ　ジュン 川名　潤 ＜平成26年4月＞		学士 (芸術)		領域横断基礎演習1 領域横断基礎演習2	2前 2後	2 2	1 1	株式会社 プリグラフィックス (平15.9)	
77	兼任	講師	カワベ　キョウゾウ 川邉　恭造 ＜平成25年4月＞		高等学校卒		メディア制作7	1･2･3前	2	1	株式会社Aquvii 代表 (平24.1)	
78	兼任	講師	キザラ　イズミ 木皿　泉 (和泉　年季子) ＜平成26年4月＞		短期大学士 (美術)		文章表現1 文章表現2	2･3･4前 2･3･4後	2 2	1 1	脚本家 (昭63.2)	
79	兼任	講師	キヌカワ　ヤスノリ 衣川　泰典 ＜平成25年4月＞		修士 (芸術)		写真技法演習1 写真技法演習2	1・2・3・4前 1・2・3・4後	2 2	1 1	京都精華大学 芸術学部 非常勤講師 (平21.4)	
80	兼任	講師	クムラコウヘイ クムラコウヘイ (久村　幸平) ＜平成26年4月＞		学士 (社会学)		調理表現	2･3･4前	2	1	クムラ 代表 (平16.3)	

調書番号	専任等区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	年齢	保有学位等	月額基本給(千円)	担当授業科目の名称	配当年次	担当単位数	年間開講数	現　職 (就任年月)	申請に係る大学等の職務に従事する週当たり平均日数
81	兼任	講師	クラタ　ユウジ 倉田　勇治 ＜平成25年4月＞		文学修士		ドイツ語1 ドイツ語2	1・2・3・4前 1・2・3・4後	2 2	2 2	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平24.4)	
82	兼任	講師	コウシマ　タカシ 光嶋　崇 ＜平成25年4月＞		専門学校卒		メディア制作6	1･2･3後	2	1	アートディレクター (平7.8)	
83	兼任	講師	サカモト　コウセイ 坂本　公成 ＜平成26年4月＞		修士 (人文学)		身体表現1 身体表現2	2･3･4前 2･3･4後	2 2	1 1	ダンスカンパニー Monochrome Circus 代表 (平2.4)	
84	兼任	講師	シズカ　ハルキ 静　春樹 ＜平成26年4月＞		博士 (仏教学)		日本語3 日本語4	2・3・4前 2・3・4後	2 2	2 2	南山商店 (昭58.4)	
85	兼任	講師	シモモト　ヨシミツ 下元　善光 ＜平成27年4月＞		学士 (美術)		作品ポートフォリオ演習1 作品ポートフォリオ演習2 領域横断演習1 領域横断演習2	3前 3後 3前 3後	1 1 2 2	1 1 1 1	グラフィックデザイナー (平20.5)	
86	兼任	講師	シンカイ　ミドリ 新海　みどり ＜平成25年4月＞		M.A (米国)		英語1 英語2	1前 1後	4 4	4 4	京都精華大学 芸術学部 非常勤講師 (平10.4)	
87	兼任	講師	シングウ　トシヒコ 新宮　利彦 ＜平成26年4月＞		高等学校卒		領域横断基礎演習1 領域横断基礎演習2	2前 2後	2 2	1 1	ヘアメイクアップ アーティスト (平8.4)	
88	兼任	講師	スミジ　マホ 隅地　茉歩 (山下　伸子) ＜平成26年4月＞		文学 修士		身体表現論	2･3･4後	2	1	ダンスカンパニー セレノグラフィカ (平9.4)	
89	兼任	講師	スワ　マサシ 諏訪　雅 ＜平成25年4月＞		学士 (工学)		企画演習5	1・2・3前	1	1	ヨーロッパ企画 (平11.4)	
90	兼任	講師	ソネ　シンイチ 曽根　慎一 ＜平成25年4月＞		学士 (健康福祉学)		スポーツ実習1 スポーツ実習2 スポーツ実習3 スポーツ実習4	1・2・3・4前 1・2・3・4後 1・2・3・4前 1・2・3・4後	1 1 1 1	1 1 1 1	ソネスポーツ (平12.4)	
91	兼任	講師	タカハシ　コウヘイ 髙橋　耕平 ＜平成25年4月＞		修士 (芸術)		写真技法演習1 写真技法演習2	1・2・3・4前 1・2・3・4後	2 2	1 1	京都精華大学 芸術学部 非常勤講師 (平15.4)	
92	兼任	講師	タカヤマ　ユウコ 高山　優子 ＜平成25年4月＞		体育学 修士		スポーツ実習1 スポーツ実習2 スポーツ実習3 スポーツ実習4	1・2・3・4前 1・2・3・4後 1・2・3・4前 1・2・3・4後	1 1 1 1	1 1 1 1	京都精華大学 芸術学部 非常勤講師 (平2.4)	
93	兼任	講師	タケイグッドマン タケイグッドマン (武井　良仁) ＜平成25年4月＞		高等学校卒		メディア制作3	1･2･3前	2	1	WIZ ENTERTAINMENT 主宰 (平20.6)	
94	兼任	講師	タテハナ　ノリタカ 舘鼻 則孝 ＜平成25年4月＞		学士 (美術)		企画演習4	1･2･3後	1	1	NORITAKA TATEHANA 代表 (平22.8)	
95	兼任	講師	タナカ　クニヒコ 田中　邦彦 ＜平成25年4月＞		教育学 修士		スポーツ実習1 スポーツ実習2 スポーツ実習3 スポーツ実習4	1・2・3・4前 1・2・3・4後 1・2・3・4前 1・2・3・4後	1 1 1 1	1 1 1 1	京都精華大学 芸術学部 非常勤講師 (平10.4)	
96	兼任	講師	タナカ　ブパポーン 田中　ブパポーン ＜平成26年4月＞		大学卒 (泰国)		タイ語3	2・3・4前	2	2	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平8.4)	
97	兼任	講師	タニ　マサト 谷　正人 ＜平成26年4月＞		博士 (文学)		比較文化概論	2･3･4前	2	1	神戸学院大学 人文学部 講師 (平20.4)	

調書番号	専任等区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	年齢	保有学位等	月額基本給(千円)	担当授業科目の名称	配当年次	担当単位数	年間開講数	現　職 (就任年月)	申請に係る大学等の職務に従事する週当たり平均日数
98	兼任	講師	タニオク　コウジ 谷奥　孝司 ＜平成26年4月＞		文学士		知的財産権概論 領域横断基礎演習1 領域横断基礎演習2	2･3･4後 2前 2後	2 2 2	1 1 1	株式会社毎日放送 (平8.4)	
99	兼任	講師	タニグチ　マモル 谷口　守 ＜平成25年4月＞		高等学校卒		メディア制作4	1･2･3後	2	1	ヴォイストレーナー (昭49.4)	
100	兼任	講師	ツン　クワンズ 鄭　光子 ＜平成25年4月＞		文学修士		朝鮮語1 朝鮮語2 朝鮮語3 朝鮮語4	1・2・3・4前 1・2・3・4後 2・3・4前 2・3・4後	2 2 2 2	2 2 2 2	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平7.4)	
101	兼任	講師	テラオ　ミドリ 寺尾　美登里 ＜平成25年4月＞		修士 (言語文化)		スペイン語1 スペイン語2	1・2・3・4前 1・2・3・4後	2 2	2 2	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平24.4)	
102	兼任	講師	テルヤ　ミキ 照屋　美紀 ＜平成25年4月＞		体育短期大学士		スポーツ実習1 スポーツ実習2 スポーツ実習3 スポーツ実習4	1・2・3・4前 1・2・3・4後 1・2・3・4前 1・2・3・4後	1 1 1 1	1 1 1 1	フリーインストラクター (平2.6)	
103	兼任	講師	ナガイ　ジュンイチ 永井　純一 ＜平成25年4月＞		博士 (社会学)		文化社会学	1･2･3･4後	2	1	神戸山手大学 現代社会学部 専任講師 (平21.4)	
104	兼任	講師	ナカオ　イクコ 中尾　伊公子 ＜平成25年4月＞		美術学士		情報処理基礎1 情報処理基礎2 キャリアアップ演習1 キャリアアップ演習2	1・2・3・4前後 1・2・3・4前後 1・2・3・4前後 1・2・3・4前後	2 2 2 2	4 4 2 2	株式会社モーリス (平9.4)	
105	兼任	講師	ナガト　ヨウヘイ 長門　洋平 ＜平成26年4月＞		博士 (学術)		視聴覚表現論	2･3･4後	2	1	国際日本文化 研究センター 機関研究員 (平19.6)	
106	兼任	講師	ナガノ　ミツヒロ 永野　光浩 ＜平成26年4月＞		芸術学士		制作実習1	2前	3	1	永野音楽研究所 代表 (平3.4)	
107	兼任	講師	ナカムラ　カズコ 中村　和子 ＜平成26年4月＞		中学校		クラフト1 クラフト2	2･3･4前 2･3･4後	2 2	1 1	デザイナー (平7.12)	
108	兼任	講師	ナカムラ　コウスケ 中村　公輔 ＜平成26年4月＞		学士 (文学)		領域横断基礎演習1 領域横断基礎演習2	2前 2後	2 2	1 1	ミュージシャン / エンジニア (平11.9)	
109	兼任	講師	ナカムラ　ジュンコ 中村　潤子 (門田　潤子) ＜平成25年4月＞		文学修士 ※		考古学	1・2・3・4前後	4	2	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平3.4)	
110	兼任	講師	ナルミ　ヒロシ 成実　弘至 ＜平成25年4月＞		文学修士 MA in Culture, Communication and Society (英国)		ファッションデザイン概論	1･2･3･4後	2	1	京都造形芸術大学 芸術学部 准教授 (平12.4)	
111	兼任	講師	ニシダ　サヤ 西田　彩 ＜平成26年4月＞		学士 (経済学)		制作実習1 制作実習3	2前 2後	3 3	1 1	office saya 代表 (平18.10)	
112	兼任	講師	ニシダ　リョウスケ 西田　亮介 ＜平成26年4月＞		修士※ (政策・メディア)		マーケティング論	2･3･4前	2	1	立命館大学 先端総合学術研究科 特別召聘准教授 (平24.4)	

調書番号	専任等区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	年齢	保有学位等	月額基本給(千円)	担当授業科目の名称	配当年次	担当単位数	年間開講数	現　職 (就任年月)	申請に係る大学等の職務に従事する週当たり平均日数
113	兼任	講師	ニシムラ　オサム 西村　理 ＜平成25年4月＞		Ph.D (米国)		芸術と経済	1・2・3・4前	2	1	同志社大学 経済学部 教授 (昭58.4)	
114	兼任	講師	ニシヤマ　タカシ 西山　孝 ＜平成25年4月＞		工学博士		文明と環境	1・2・3・4前	2	1	京都大学名誉教授 (平15.4)	
115	兼任	講師	ノムラ　ハルミ 野村　晴美 ＜平成25年4月＞		体育学士		スポーツ実習1 スポーツ実習2 スポーツ実習3 スポーツ実習4	1・2・3・4前 1・2・3・4後 1・2・3・4前 1・2・3・4後	1 1 1 1	1 1 1 1	京都精華大学 芸術学部 非常勤講師 (平11.4)	
116	兼任	講師	ハザマ　アキコ 間　晶子 ＜平成25年4月＞		修士 (言語文化学)		日本語1 日本語2 日本語3 日本語4	1前 1後 2・3・4前 2・3・4後	2 2 2 2	2 2 2 2	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平10.4)	
117	兼任	講師	ハシモト　アキヒコ 橋本　章彦 ＜平成25年4月＞		博士 (文学)		民俗学	1・2・3・4前後	4	2	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平16.4)	
118	兼任	講師	ババ　アキコ 馬場　暁子 ＜平成25年4月＞		修士 (芸術)		言葉の科学	1・2・3・4後	2	1	京都精華大学 芸術学部 非常勤講師 (平19.4)	
119	兼任	講師	ハマザキ　アキコ 濱崎　明紀子 ＜平成27年4月＞		B.F.A. conc. Art History, Theory & Criticism (米国)		領域横断演習1 領域横断演習2	3前 3後	2 2	1 1	シーディーエスアイ 株式会社 (平成24.4)	
120	兼任	講師	ハヤシ　エイコ 林　栄子 ＜平成25年4月＞		体育学士		スポーツ実習1 スポーツ実習2 スポーツ実習3 スポーツ実習4	1・2・3・4前 1・2・3・4後 1・2・3・4前 1・2・3・4後	1 1 1 1	1 1 1 1	京都精華大学 芸術学部 非常勤講師 (平2.4)	
121	兼任	講師	ヒラタケ　コウゾウ 平竹　耕三 ＜平成26年4月＞		経済学博士		文化政策論	2･3･4前	2	1	京都市文化市民局 文化芸術担当局長 (平23.4)	
122	兼任	講師	ヒラノ　ヤスコ 平野　泰子 ＜平成26年4月＞		学士 (芸術)		デッサン1	2･3･4前	2	1	大阪府立寝屋川高校 美術教科 非常勤講師 (平22.4)	
123	兼任	講師	フクダ　ユウダイ 福田　裕大 ＜平成26年4月＞		修士※ (人間・環境学)		スタイル素材研究 制作実習2 制作実習4	2･3･4後 2前 2後	2 3 3	1 1 1	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平21.4)	
124	兼任	講師	フジオカ　スミエ 藤岡　住恵 ＜平成25年4月＞		文学修士 ※		英語1 英語2	1前 1後	4 4	4 4	京都精華大学 芸術学部 非常勤講師 (平15.4)	
125	兼任	講師	フジワラ　ヒロシ 藤原　ヒロシ (藤原　浩) ＜平成25年4月＞		高等学校卒		企画演習3	1・2・3前	1	1	音楽プロデューサー (平2.7)	
126	兼任	講師	フジワラ　ミサ 藤原　美沙 ＜平成26年4月＞		修士 (文学) ※		ドイツ語3 ドイツ語4	2・3・4前 2・3・4後	2 2	2 2	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平24.4)	
127	兼任	講師	マサダ　タケシ 政田　武史 ＜平成26年4月＞		修士 (美術)		デッサン2	2･3･4後	2	1	美術作家 (平15.4)	
128	兼任	講師	マスダ　サトシ 増田　聡 ＜平成25年4月＞		博士 (文学)		メディア論	1･2･3･4前	2	1	大阪市立大学大学院 文学研究科 准教授 (平20.4)	

調書番号	専任等区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	年齢	保有学位等	月額基本給(千円)	担当授業科目の名称	配当年次	担当単位数	年間開講数	現　職 (就任年月)	申請に係る大学等の職務に従事する週当たり平均日数
129	兼任	講師	マスダ　シン 増田　真 ＜平成25年4月＞		修士 (文化・言語学)		タイ語1	1・2・3・4前後	2	2	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平14.4)	
130	兼任	講師	マトバ　カオリ 的場　かおり (的場　香織) ＜平成25年4月＞		博士 (法学)		日本国憲法 法学概論	1・2・3・4前 1・2・3・4後	2 2	1 1	名古屋短期大学 現代教養学科 准教授 (平23.4)	
131	兼任	講師	マナベ　キョウコ 眞鍋　亨子 ＜平成26年4月＞		修士 (芸術)		キャリアのためのデッサン1 キャリアのためのデッサン2 キャリアのためのデッサン3 キャリアのためのデッサン4	2前 2後 3前 3後	2 2 2 2	1 1 1 1	京都精華大学 共通教育センター 非常勤講師 (平23.4)	
132	兼任	講師	ミウラ　モトイ 三浦　基 ＜平成26年4月＞		短期大学士 (演劇)		舞台表現論	2･3･4前	2	1	合同会社地点 代表社員 (平成13.10)	
133	兼任	講師	ミシマ　アキヨシ 三嶋　章義 ＜平成25年4月＞		専門学校卒		メディア制作5	1･2･3前	2	1	亜裸眼株式会社 代表 (平23.4)	
134	兼任	講師	ミズシマ　カツミ 水島　克己 ＜平成25年4月＞		体育学士		スポーツ実習1 スポーツ実習2 スポーツ実習3 スポーツ実習4	1・2・3・4前 1・2・3・4後 1・2・3・4前 1・2・3・4後	1 1 1 1	1 1 1 1	京都精華大学 芸術学部 非常勤講師 (平11.4)	
135	兼任	講師	ミゾイ　ユキエ 溝井　ゆきゑ ＜平成25年4月＞		学士 (経済学)		情報処理基礎1 情報処理基礎2 キャリアアップ演習1 キャリアアップ演習2	1・2・3・4前後 1・2・3・4前後 1・2・3・4前後 1・2・3・4前後	2 2 2 2	4 4 2 2	株式会社モーリス (平23.4)	
136	兼任	講師	モリ　アツシ 森　篤士 ＜平成26年4月＞		専門学校卒		制作実習2 制作実習4	2前 2後	3 3	1 1	レコーディング エンジニア (平2.4)	
137	兼任	講師	ヤマザキ　シュンエイ 山崎　俊鋭 ＜平成25年4月＞		文学修士		中国語1 中国語2 中国語3 中国語4	1・2・3・4前後 1・2・3・4後 2・3・4前 2・3・4後	2 2 2 2	4 2 2 2	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平6.4)	
138	兼任	講師	ヤマザキ　ジロウ 山崎　二郎 ＜平成27年4月＞		社会学士		領域横断演習1 領域横断演習2	3前 3後	2 2	1 1	株式会社 ブラウンズブックス 代表取締役 (平6.3)	
139	兼任	講師	ヤマザキ　シンゴ 山崎　伸吾 ＜平成27年4月＞		学士 (人文)		領域横断演習1 領域横断演習2	3前 3後	2 2	1 1	株式会社 エニアック インターナショナル (平22.12)	
140	兼任	講師	ヤマジ　アツシ 山路　敦司 ＜平成27年4月＞		修士 (音楽)		応用実習1 応用実習3	3前 3後	3 3	1 1	大阪電気通信大学 総合情報学部 教授 (平22.4)	
141	兼任	講師	ヤマダ　サダコ 山田　貞子 ＜平成25年4月＞		教育学修士		スポーツ実習1 スポーツ実習2 スポーツ実習3 スポーツ実習4	1・2・3・4前 1・2・3・4後 1・2・3・4前 1・2・3・4後	1 1 1 1	1 1 1 1	京都精華大学 芸術学部 非常勤講師 (平12.4)	
142	兼任	講師	ヤマモト　テツジ 山本　哲司 ＜平成25年4月＞		文学修士 ※		生涯学習概論	1・2・3・4後	2	1	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平9.4)	
143	兼任	講師	ヨシダ　ユカ 吉田　由佳 ＜平成26年4月＞		学士 (家政学)		スタイル編集研究	2･3･4後	2	1	EPI CONSULTING ファッションビジネス コンサルタント (平22.1)	
144	兼任	講師	ヨシモト　ユウコ 吉本　優子 ＜平成25年4月＞		日本語・日本文化修士		日本語1 日本語2 日本語3 日本語4	1前 1後 2・3・4前 2・3・4後	2 2 2 2	2 2 2 2	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平12.4)	
145	兼任	講師	ロイル　レネイ Ryle Renee ＜平成26年4月＞		学士 (米国)		英語4	2・3・4後	2	2	京都精華大学 デザイン学部 非常勤講師 (平22.4)	

別記様式第３号（その３）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

専任教員の年齢構成・学位保有状況

職　　位	学　　位	29 歳 以 下	30 ～ 39 歳	40 ～ 49 歳	50 ～ 59 歳	60 ～ 64 歳	65 ～ 69 歳	70 歳 以 上	合　　計	備　　考
教　　授	博　　士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	修　　士	人	人	人	人	1人	人	人	1人	
	学　　士	人	人	人	1人	1人	2人	人	4人	
	短 期 大 学 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	そ の 他	人	人	1人	1人	人	2人	人	4人	
准 教 授	博　　士	人	人	1人	人	人	人	人	1人	
	修　　士	人	人	1人	人	人	人	人	1人	
	学　　士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短 期 大 学 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	そ の 他	人	人	1人	人	人	人	人	1人	
講　　師	博　　士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	修　　士	人	2人	人	人	人	人	人	2人	
	学　　士	人	1人	人	人	人	人	人	1人	
	短 期 大 学 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	そ の 他	人	人	人	人	人	人	人	人	
助　　教	博　　士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	修　　士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	学　　士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短 期 大 学 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	そ の 他	人	人	人	人	人	人	人	人	
合　　計	博　　士	人	人	1人	人	人	人	人	1人	
	修　　士	人	2人	1人	人	1人	人	人	4人	
	学　　士	人	1人	人	1人	1人	2人	人	5人	
	短 期 大 学 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	そ の 他	人	人	2人	1人	人	2人	人	5人	

（注）

1　この書類は，申請又は届出に係る学部等ごとに作成すること。

2　この書類は，専任教員についてのみ，作成すること。

3　この書類は，申請又は届出に係る学部等の開設後，当該学部等の修業年限に相当する期間が満了する年度（以下「完成年度」という。）における状況を記載すること。

4　専門職大学院の課程を修了した者に対し授与された学位については，「その他」の欄にその数を記載し，「備考」の欄に，具体的な学位名称を付記すること。

設置の趣旨等を記載した書類

目次

１．設置の趣旨及び必要性
（１）設置の必要性と背景
（２）研究対象とする学問分野
（３）養成する人材像と卒業後の進路
（４）収容定員と学生確保の見通し

２．学部の特色

３．学部、学科の名称及び学位の名称

４．教育課程の編成の考え方及び特色
（１）教育課程の編成
（２）教育課程の特色

５．教員組織の編成の考え方及び特色

６．教育方法、履修指導方法及び卒業要件
（１）授業方法　（※資料１　履修モデル）
（２）履修指導
（３）卒業要件

７．施設、設備などの整備計画
（１）校舎等施設　（※資料２　時間割）
（２）図書等の資料及び図書館　（※資料３　雑誌一覧、資料４　電子ジャーナル一覧）

８．入学者選抜の概要
（１）アドミッションポリシー
（２）選抜方法、選抜体制
（３）科目等履修生、聴講生の受け入れ

９．取得可能な資格

10．学外実習の具体的計画

11. 管理運営

12. 自己点検・評価

13. 情報の公表

14. 授業内容方法の改善を図るための組織的な取組み

15. 社会的・職業的自立に関する指導等及び体制

（１）教育課程内での取組み

（２）大学全体の取組み　（※資料５ キャリアデザイン）

（※資料６ 教員年齢構成と教員に関する年齢の規程）

１．設置の趣旨及び必要性

（１）設置の必要性と背景

＜本学における設置の背景＞

京都精華大学は 1968 年、人間を尊重し人間を大切にすることを教育の基本とし、学問・芸術によって、人類社会に尽くそうとする自立した人間の形成を目的とし、美術科と英語英文科をもつ短期大学として開設した。創立時の短期大学美術科にはじまった本学の芸術分野の教育研究は、1979 年の 4 年制大学化において美術学部の設置、2000 年の日本初となるマンガ学科設置を経て、2006 年にマンガ学部、デザイン学部の開設へと発展してきた。さらに大学院においては、1991 年に芸術研究科の一領域としてマンガ領域を設け、2010 年に日本初の大学院マンガ研究科（修士課程）を設置、2012 年には大学院マンガ研究科（博士後期課程）を設置した。いずれも日本で初めてのマンガ領域の学科、学部、研究科の開設であった。

また、個々のコンテンツ研究や作家研究を行う文献学的方法だけではなく、マンガ文化の出自や特異性、経済性や社会性などの全体像を俯瞰するための教育研究も推進し、その成果を再び社会還元するための施設として、2006 年に国際マンガ研究センターや京都国際マンガミュージアムを開設している。

このように本学では、高等教育において芸術や大衆文化を研究対象とし、アーティスト、デザイナー、マンガ家のような“作り手”の育成はもちろん、編集者やプロデューサー、ディレクターなど“送り手”の育成にも取り組み、豊かな文化の発展に寄与する人材養成を行ってきた。

この、40 年来の実技教育の実績と経験を踏まえ、本学は 2013 年 4 月、ポピュラーカルチャー学部を新設する。ポピュラーカルチャー学部は、現在人々の生活の身近にあり個人の世界観に大きな影響を与えている大衆文化を学問領域として成立させ、その作り手・送り手を育てることで社会貢献を実現したいと考える。多様化する芸術表現のなかで一般的に大きな支持を得ながらも学問として認められていなかったマンガ分野において先進的に取り組んできた本学の教育研究の実績を前提に、この新しい学部を設置するものである。

＜社会的背景＞

クールジャパンと言われて久しい昨今だが、日本政府は日本のコンテンツ産業を、その潜在力と波及効果の大きさから我が国の主要な成長分野として位置付け、市場規模をますます大きく拡大させようとしている。

2010 年 6 月に閣議決定された「新成長戦略」では、「拡大したアジア市場に対して、日本のコンテンツ、デザイン、ファッション、料理、伝統文化、メディア芸術等のクリエイティブ産業を対外発信し、日本のブランド力の向上や外交力の強化につなげるとともに、著作権等の侵害対策についても国際的に協調して取り組む」（第 3 章　7 つの戦略分野の基本方針と目標とする成果）、また、「我が国のファッション、コンテンツ、デザイン、食、伝統・文化・観光、音楽などのクールジャパンは、その潜在力が成長に結びついておらず、今後はこれらのソフトパワーを活用し、その魅力と一体化となった製品・サービスを世界に提供することが鍵」（21 世紀日本の復活に向けた 21 の国家戦略プロジェクト）と述べられている。また、民主党の政権政策（2010 年 6 月 17 日発表）でも「強い経済」の項で「食、音楽、文化、ファッション、デザインなどへの戦略的投資を実施し、海外への情報発信を強化します。映像、アニメ、音楽などのコンテンツ保護強化・

デジタル化などによる新規ビジネス創出を推進します」と掲げている。

知的財産戦略本部が 2011 年 6 月にまとめた「知的財産推進計画 2011」では、「グローバル・ネットワーク時代の新たな挑戦を支える 4 つの知的財産戦略」のひとつとして「クールジャパン戦略」を挙げている。そこでは、クールジャパン関連産業の市場規模を 2009 年の約 4.5 兆円から 2020 年に 17 兆円とする成果イメージが示されている。そして、我が国独自の文化、伝統、ライフスタイルに深く根差したものや、日本人独特のこだわりや丁寧さに基づくクリエイティブなコンテンツを発掘・創造し、グローバルにビジネス化していくことが重要であり、戦略的な情報発信が不可欠と述べられている。また、単独のモノやサービスだけではなく、様々なアイテムを有機的に組み合わせて（例えば、映画・ドラマとファッション・ライフスタイルを一体化して）効果的に発信し、東日本大震災後の過度の自粛による悪循環に陥ることなく、復興を加速することが求められている。施策例には、クリエイターだけではなく、クリエイティブ・ディレクターの育成・設置や、国内でのイベントへの集客の取組み、イメージ戦略の推進や情報発信の強化が挙げられている。

また「知的財産推進計画 2011」では、「クールジャパンの人気の拡大は、東日本大震災を踏まえた日本のブランドイメージの回復にも大きく影響するものであり、その基盤の整備――特にグローバルに通用する人材基盤の強化が必要とされている。海外展開を推進するに当たっては、グローバル・ネットワークを活用してビジネス化できるプロデューサー人材が不可欠である。しかし現状ではこうした人材は十分とは言えず、グローバル展開のビジネスチャンスを創るとともに、優秀な人財が集まる環境を整備し、若手クリエイターも含めた人財育成の仕組みを構築させていかなければならない。また、低年齢層から、情報を多面的に理解する能力を醸成するとともに、様々なコンテンツに触れ、その真の価値を見極める能力を育成していくことが重要である」とも述べられている。ポピュラーカルチャー領域を扱うコンテンツ産業において、クリエイターとプロデューサーの育成は急務であり、本学はこの強い社会的要請に応えたいと考える。

＜設置の必要性＞

ポピュラーカルチャーは、現在もっとも人々の生活の身近に存在する文化領域であり、個人の抱く世界観やアイデンティティの形成にもつながっている。その意味においては、かつて文学や思想が果たしていた役割に代わる、現代における新しい教養であるといっても過言ではないだろう。しかし、社会的要請が高く、日本政府の政策や長期戦略によって推進されているにも関わらず、高等教育はこうした新しい文化と表現に対応しきれておらず、この領域の人材育成は専門学校における技術者養成が中心となっているのが現状である。

本学は、社会的、文化的に意義の高いポピュラーカルチャーを、大学の学部での教育研究領域として確立していくことを目指す。これまでの芸術・文化領域における教育の実績を踏まえたうえで、新しいコンテンツを生み出し、新しい価値観を創造する人材の育成に自負をもって取り組み、社会と文化のさらなる発展を志すものである。

また、ポピュラーカルチャーという文化全体を振興させるため、単にクリエイターに必要な技術や技法を教えるだけではなく、流通の過程、享受・消費・所有される過程も探究し、文化を消費者の元へ届けるための人材や、文化全体を批評・考察する人材も育てることも目的とする。

また、本学部の設置は、学校教育法第 52 条に定められた「大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的、及び応用能力を展開させることを目的とする」という大学の果たすべき使命を、より現実的な社会変化に対応して果たす

ことができると考える。大衆文化（ポピュラーカルチャー）そのものを対象とした、実業教育中心の高度職業人の育成は、本学の実施してきた実技系の教育を基盤として展開することが効率的であり適切であると考える。

（２）研究対象とする学問分野

＜ポピュラーカルチャーとは＞

ポピュラーカルチャーは、19 世紀に西欧文明圏において産業革命を背景に生じた新しい文化形態である。社会的・文化的価値が、複製的に作られ、届けられ、享受され、消費され、所有されるという特色を持っている。既存の社会的・文化的な価値要素を、複製技術や流通技術、メディア技術を動員して編集的に形成し、同一のアイテムを大量に生産するものであり、それまでのハイカルチャーが想定していた“天才的主体が天賦の才能によって唯一の文化的価値を創り出す”という過程とは異なり、遊びの中の偶発性や相互引用・流用のなかに創造性を見出していくものである。また、受け手に知識や教養が望まれるハイカルチャーに比べて、誰もが感覚的に享受できることから、広く一般に楽しまれる文化である。

例えば文学はペーパーバッグのノベルスとして登場し、その後次々に新しい形態を登場させてきた。また、20 世紀後半の日本においてマンガは、1950 年代に月刊マンガ誌や週刊マンガ誌が創刊されることによって、新しい“マンガ的”な社会的･文化的な価値観が若い世代を中心に受容され広まっていった。また、アニメは、各家庭に新しい技術による装置＝テレビが普及する社会的状況を前提とし 1960 年以降は毎週上映される映像作品のコンテンツが、これも若い世代を中心に受容され定着していった。

世界システム論を提唱しているウォーラーステインは､1968 年に世界システムにおける革命的変容があったとしている。これは文化においても同様であり、ハイカルチャー（社会的に価値が高いと認められていた文学、美術、音楽等）とポピュラーカルチャー（知識がなくても享受できる大衆文化）の関係は、この年を一つの象徴的境界として大きく変動した。以前は二次的、末端的な文化現象とみなされていたポピュラーカルチャーが､社会･文化の前景をなすようになったのである。日本でも 70 年代を境に、ポピュラーカルチャーの流通は、社会的・文化的に重要な側面であると認識されるようになり､90 年代以降は世界的に日本のポピュラーカルチャーの重要性に対する認識が広まり深まっていったと考えられる。

ポピュラーカルチャーの作品は、受け入れられ、消費・所有されることで成り立つものであることから、経済的な価値で捉えられることが多いが、実際はそれだけにとどまらない。身に付けた 1 枚のシャツが、部屋に貼ったポスターが、iPhone で聴いている楽曲が、それを選び、身に付け、鑑賞する人のアイデンティティを表し、それを通して他者とのつながりを生み出し、新しい価値観や社会を切り拓いていくことがある。それは感覚的で快楽志向の行動であり、ハイカルチャーから見れば取るに足らないものにみえるかもしれないが、それを愛好する人びとにとっては自分を演出し、世界とつながる上で不可欠なものである。

ポピュラーカルチャーのコンテンツは社会的に強い関心を抱かれながらも、現在のアカデミズムの世界では美学や社会学、文化史などのさまざまな学問領域のなかに散在しており、学問分野としては確立されていない。本学部はそれを明確に教育研究の対象とし、ポピュラーカルチャーの一翼を担うマンガ領域での教育研究の成果を踏まえ、マンガ領域以外のポピュラーカルチャー

領域の研究を開始する。

＜本学部におけるポピュラーカルチャー学＞

本学のポピュラーカルチャー学部では、「ポピュラーカルチャー」という言葉を、日常生活に根ざした実践や、当事者の間で共有されている意味や価値の体系、様々なライフスタイルの総称ととらえ、より広い視野を持って、教育研究の対象とする。なかでも、現在を生きる若者の生活にもっとも密接であり、新しい価値観や他者とのつながりを生み出している分野である、ファッションとポピュラーミュージックをその学びの中心に置き、関連するコンテンツ諸領域も横断的に取り込みながら、幅広くポピュラーカルチャーを扱う。

また、ポピュラーカルチャーは、複製的に作られ、人々に享受されることで成立するものであることから、それを学問として追究する際、従来の芸術史や芸術批評が見落としがちであった“送り手”の存在や、“受け手”の役割、受け手が構成する社会の存在までもが、不可欠な知見として現れてくるはずである。そのため、本学のポピュラーカルチャー学部では、ファッションやポピュラーミュージックの作品をつくるだけにとどまらず、それを社会と結びつけること、あるいは社会の中におけるその価値や意味を検証すること、そして新しいクリエイティビティを提案するというその円環のすべてを研究対象とする。

（３）養成する人材像と卒業後の進路

ポピュラーカルチャーの隆盛に対応して、コンテンツ産業、クリエイティブ産業と呼ばれる産業部門が昨今注目を集めている。ひとつには、メディアの発達と多様化によって、絶対的にコンテンツが不足しており、その作り手や送り手が必要とされている。また、同じくメディアの発達は、地理的・時間的制約を越えて国際的に共有できる環境を生み出したため、日本で生み出されるコンテンツは世界中から熱い支持を集めている。

その一方、ポピュラーカルチャーの諸領域は大きな転換期を迎えている。例えばポピュラーミュージックは、CD の購入から携帯電話やパソコンでのダウンロード配信へと流通スタイルが大きく移行した。またファッションに関しては、最新の流行を低価格で短いサイクルで大量に生産・販売するファストファッションが隆盛である。

ポピュラーカルチャー学部では、グローバル化、メディアの発達などによるコンテンツ産業、クリエイティブ産業界の社会変化の動向を見据え、次世代の文化産業を創造する、専門知識と技能を有した人材を育成する。一層の大衆性と創造力を持ったクリエイター、企画から流通までをコントロールできるプロデューサー、世界とそのジャンルのあり方を見通す批評家等を育成し、ポピュラーカルチャーに関する作品や手法を広く社会へ還元し、文化として世界各国へと伝播させることに貢献することを目指す。

具体的な進路として想定されるのは、まず、ポピュラーカルチャーのコンテンツを制作するクリエイター、そしてそのコンテンツを届けるプロデューサーや編集者、違った側面でその分野を支える批評家や研究者である。

例えばファッション分野では、個別のブランドごとのクリエイション能力だけではなく、プロデュースとビジネス展開ができる人材の育成が必要とされている。ファッションデザイナー、パタンナー、プレス、ディレクター、プロデューサー、キュレーター、ショップオーナー、イベン

トプランナー、スタイリスト、バイヤー、編集者、ライター、評論家等である。
　また、ポピュラーミュージックの分野では、グローバル化、メディアの発達などによるコンテンツ産業、クリエイティブ産業界の社会変化の動向を見据え、幅広い専門知識と技能を有した人材を育成し、次世代の文化産業を創造するクリエイターを輩出する。ミュージシャン、DJ、作編曲家、プログラマー、スタジオエンジニア、サウンドデザイナー、ディレクター、プロデューサー、イベントプランナー、レーベルオーナー、バイヤー、編集者、ライター、批評家等である。
　加えて、文化とビジネスの両側面から体系的な理論を修め、実践的な創造に関する技術や知識を有したクリエイターは、産業界のみならず、広く社会全体から求められている。一般企業や公共団体においてもその能力を活かすことができると考えられる。広告会社、デザイン会社のほか、企業の企画部門、広報部門、調査開発部門、研究部門等が考えられる。

（４）収容定員と学生確保の見通し

　ポピュラーカルチャー学部は、ポピュラーカルチャー学科 1 学科のみを設置し、その定員は 1 学年 118 名、収容定員を 472 名とする。
　京都には数多くの大学があるが、現在、ポピュラーカルチャーのみを専門的に扱い、実技教育を行う学部は他大学に存在していないため、受験生の興味を惹くものと考えられる。また、本学部では、ポピュラーカルチャーのなかでもファッションとポピュラーミュージックの 2 分野を軸とするが、現在このジャンルは専門学校への進学志望者が多い。文科省の学校基本調査によると、2011 年度、ファッション分野（和洋裁、ファッションビジネス）の専門学校には約 7800 名、音楽分野には約 7200 名が進学している。専門学校では、技術習得が中心で専門教育が授業の 8 割を占めるが、本学部では世界に向けて発信するポピュラーカルチャーのコンテンツを制作するには技術を身に付けるだけではなく、深い教養とともに消費者への届け方、考え方を身に付ける必要があると考えており、その方針に興味を持つ大学進学希望者は少なくないと思われる。マンガ学部（本学部の基礎となる学部）の入試倍率は約 3 倍～6 倍となっており、本学部の出願者数は収容定員の約 3 倍である 390 名を目標とする。

２．学部の特色

　＜中央教育審議会答申を踏まえて＞
　本学のポピュラーカルチャー学部は、中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像」の提言する「高等教育が多様な機能と個性・特色の明確化」自律的選択に基づく機能別分化に関して、「高度専門職業人養成」と「特定の専門分野の教育研究」に比重を置きたいと考える。18 歳人口が約 120 万人規模で推移する時期にあって、ファッションとポピュラーミュージックを書くとしたポピュラーカルチャー領域の教育研究を行い、専門性の高い人材養成を特色とするものである。

　＜特色＞
　ポピュラーカルチャー領域における作品は、ファインアートのように自己表現の追究だけで完結するものではなく、広く社会に受容されるコンテンツでなければならない。作品が商品として消費されることが前提であり、流通に関するシステムについて、またそれを受け取る人々に対す

る理論的考察を欠かすことはできない。
　そのため、本学部は、クリエイターを養成することを主眼としながらも、作品制作の技能＝つくる」だけではなく、作品の流通＝「届ける」、作品と社会への考察＝「考える」についても十分な知見と手法を得られる教育課程を用意する。
　「つくる」とは作品制作のことであり、「届ける」は、市場の最新動向を把握し、新しいビジネスモデルを提案できること、「考える」は、ポピュラーカルチャーの魅力を社会的に捉え、批評分析を行うことである。
　文化理論や文化史、コンテンツ・ビジネス領域における理論的知見を修得したうえで、美術、デザイン、サウンド、デジタル、文芸などの技法を修得し、ポピュラーカルチャー領域のコンテンツに関して制作からプロデュース、流通、そして研究・批評にも精通した多様な視点と技法が身に付けられる教育課程が大きな特色である。

　また、ファッションとポピュラーミュージックの 2 分野を中核としながらも、幅広くポピュラーカルチャー領域を学ぶことができることも特色である。学生は入学時に選択したいずれかのコースに所属し、現役クリエイターである実務家教員から実践的な制作技術を修得して専門性を高めると同時に、コースを隔てずに取り組む科目も多数配置することで、幅広い文化領域に触れ、複眼的な視点を身に付けられる仕組みを設けている。
　これまでの本学の芸術･文化領域における教育の実績を踏まえ､ポピュラーカルチャーという、現在人々の生活にもっとも密接なクリエイティブ領域において、時代の先端を切り開くコンテンツを創造できる人材を育成し、豊かな文化の発展にも寄与したいと考える。

３．学部、学科の名称及び学位の名称

　設置する学部、学科、学位は以下の通りである。

・学部の名称
　　ポピュラーカルチャー学部　（英文名称　Faculty of Popular Culture）
・学科の名称
　　ポピュラーカルチャー学科　（英文名称　Department of Popular Culture）
・学位の名称
　　学士（芸術）　（英文名称　Bachelor of Arts）

　本学部では、ポピュラーカルチャーという領域において、実践的な教育を通して基礎的な思考力、行動力、教養、そして専門的な知識と応用力を身に付け、次世代のポピュラーカルチャーコンテンツを生み出す人材を育てることを目標とする。ファッション、ポピュラーミュージックを主軸に据えながら、現代の大衆文化を幅広く学ぶ教育内容から、ポピュラーカルチャー学部という名称とする。
　また、本学には、高等教育において芸術や大衆文化を教育研究対象としてきた実績と経験があり、授与する学位を芸術とする既存学部（芸術学部、デザイン学部、マンガ学部）での実技教育における、設置目的や教育課程、教員組織、教育手法などを基盤として本学部を設置することか

ら、学位に付記する専門分野を「芸術」とする。

４. 教育課程の編成の考え方及び特色

（１） 教育課程の編成

ポピュラーカルチャー学部の科目は、基礎教育科目と専門教育科目に大きく分けられる。

基礎教育科目は「基礎講義・演習科目」を設置し、文化と社会の広範な知識と創作の基礎技法を学び、教養教育を推進する。また、専門教育科目は、専門的な知識と理論を学ぶ講義科目と、実制作の基本から応用までを学ぶ実技科目に分けて設置している。

＜科目区分＞

- 基礎教育科目 ―― 「基礎講義・演習科目」
- 専門教育科目
  - 「学部専門講義科目」
    - 分野基盤科目群
    - 文化理論科目群
    - コンテンツ・ビジネス科目群
  - 「学部専門実技科目」
    - 基幹表現科目群
    - 表現融合科目群
    - メディア制作科目群
    - 表現越境科目群
    - 実務研修科目群

① 基礎教育科目

基礎教育科目は「基礎講義・演習科目」として配置する。専門領域ごとの区分は設けず、哲学・文学・歴史などに関する人文科学の領域、社会や政治などに関する社会科学の領域、自然や環境に関する自然科学の領域に加えて、スポーツや健康に関する領域、外国語科目、キャリアデザイン科目等から構成されている。本学既存の芸術の学位を授与する学部（芸術学部、デザイン学部、マンガ学部）と共通した、教養教育を推進するための 107 科目を配した。

中央教育審議会の「新しい時代における教養教育の在り方について（答申）」にもあるとおり、教養とは、個人が社会とかかわり、経験を積み、体系的な知識や知恵を獲得する過程で身に付ける、ものの見方、考え方、価値観の総体であり、規範意識と倫理性、感性と美意識、主体的に行動する力、バランス感覚、体力や精神力などを含めた相対的な概念としてとらえられる。その教養教育が、ポピュラーカルチャー学部における専門性の追究、制作表現を支えるものと考え、「基礎講義・演習科目」は、20 単位以上を必修としている。

必修科目である「表現ナビ（2 単位）」は、大学での主体的な学びについて基礎的な知識とスキルを身に付け、本学の歴史を含めて大学全体のキーワードでもある「表現」について理解することを目的とする。また、「英語 1・2（計 4 単位）」は実践的に使える英語の習得を目指し、必修科

目として 1 年次の前後期に配置する。4 月に実施する英語基礎力調査の点数をもとにクラス分けを行う。2 年次では「英語 3（2 単位）」を必修とする。また、意欲があるものは「英語 4」のほか、フランス語、中国語、朝鮮語、タイ語、ドイツ語、スペイン語を学修することができる。なお、外国人留学生は「日本語 1・2・3（6 単位）」を履修する。

このほか、哲学、文学、歴史、政治、自然科学、健康などに関する講義科目を配置する。また、キャリアデザインに関する演習科目（「キャリアデザイン 1～4」「キャリアアップ演習 1・2」「木作品ポートフォリオ演習 1・2」「キャリアのためのデッサン 1～4」）や、芸術学部の施設を使用し、スキルを身に付ける演習科目（「ワークショップ 1～4」「写真技法演習 1・2」）を配置する。

② 専門教育科目

専門教育科目は、講義科目「学部専門講義科目」、演習・実習科目の「学部専門実技科目」に分類して配置する。講義と実技を連動させながら、年次ごとに段階を経て、制作技術や考え方を修得できるように編成している。

＜年次ごとのステップ＞

1 年次	「導入」	ひも解き、近づく、広く知る
2 年次	「基礎」	技術を習得し、磨く
3 年次	「応用」	制作の実際を経験し、把握する
4 年次	「創出」	オリジナルの視点を持った作品の制作を行う

1 年次は、まずポピュラーカルチャーについて幅広く理解する導入の期間とする。基礎的な技術や知識を学び、その構成要素を理解し、さまざまなジャンルの作品鑑賞や批評を行う。2 年次は制作技術を磨くと共に、感性を広げ、社会調査や情報発信に関する技法も学び、基礎と作る科目を配置している。また、3 年次は学生個人のテーマに沿って制作の実際を経験できるように、科目内に選択可能な複数のクラスを設置する。4 年次は卒業制作に向けて制作や研究を追求できるように科目を配置している。

A 学部専門講義科目

学部専門講義科目には、「分野基礎科目群」「文化理論科目群」「コンテンツ・ビジネス科目群」を設け、ポピュラーカルチャー領域に関する専門的な講義を配置する。文化に関する歴史や理論を知り、客観的な視点からポピュラーカルチャー領域を論じる批評精神を養う。

「分野基礎科目群」では、作品を制作するための理論的根拠となる、ポピュラーカルチャーの領域に関する専門的な理論や歴史などを学ぶ。必修科目として 1 年次前期に配置した「ポピュラーカルチャー概論」「クリエイティブ概論」をはじめ、「サウンドデザイン概論」「ファッションデザイン概論」「身体感覚構造論」「比較文化概論」「ポピュラー音楽史」「ファッション史」等、演習・実習系科目に対しての理論的な支柱となり、また、具体的な対象を追究しながら文化の本質を把握するための 16 科目を配置した。

「文化理論科目群」では、ポピュラーカルチャーに関するコンテンツを制作するための土台となるための理論を学ぶ。2 年次前期に「ポップ批評（2 単位）」「ポップ美学（2 単位）」を必修科目として配置し、制作するうえで必要となる、作品論、作家論、美術批評などの文化に関する基礎知識を広範囲にわたって修得する。ポピュラーカルチャーについて考え、論じることのできる

批評精神を養う。

「コンテンツ・ビジネス科目群」は、1 年次後期の「文化産業研究概論（2 単位）」を必修とする。ポピュラーカルチャー領域は、商業的展開が必須であり、文化政策やマーケティング、アートプロデュース等、複雑化する社会の動向と表現を結びつけるための知識を身に付ける。

B 学部専門実技科目

「学部専門実技科目」には「基幹表現科目群」「表現融合科目群」「メディア制作科目群」「表現越境科目群」「実務研修科目群」を設置した。広く社会に受容されるための作品制作に関する技術や考え方を実践的に身に付ける。

「基幹表現科目群」には、「基礎実習 1～6」「制作実習 1～4」「領域横断基礎演習 1・2」「応用実習 1～4」」「領域横断演習 1・2」「自由制作 1～3」「卒業制作 1～3」の 24 科目を配置した（各 3 単位）。すべての科目を必修とし、ファッション、ポピュラーミュージックの専門領域におけるコンテンツ制作の技術の習得を目的とする。各学年で段階的に発展させ、3 年次以降は学生の志向性に沿ったクラス分けを行って授業を行う。

「表現融合科目群」には「企画演習 1～6」の 6 科目を設置。ポピュラーカルチャーの各領域、各副領域、その他の諸文化領域を、横断して展開している表現活動に実践的に関わることで、企画立案、発信、実践を学ぶことができる。

「メディア制作科目群」は「メディア制作 1～8」を設置。表現活動に関するメディア制作ツールの使い方を学ぶことを目的とする。修得するスキルの到達点を明確にし、制作物を完成させる。写真、グラフィック、映像、ボイス＆リズムトレーニング、エディトリアル、Web サイト制作、プレゼンテーション、インタラクションデザインを扱う。

「表現越境科目群」は、それぞれの専門領域での表現活動に、厚みや幅を持たせるための技術や感性を身に付けることを目的とする。「デッサン 1・2」「身体表現 1・2」「文章表現 1・2」「クラフト 1・2」「調理表現」の 9 科目を設置する。すべて演習科目とし、技術を身に付けると共に 15 週の授業で作品を完成させ、発表を行う。

「実務研修科目群」は実社会のシステムを体験することを目的とする。「インターンシップ」では、地元京都のデザイン会社、クリエイティブ関連の現場で、就業体験を行う。「制作実務研修 1～4」では、ポピュラーカルチャーの専門領域の制作・流通の現場での制作・就業体験を行う。京都市内に点在する個性あるライブハウスやイベントスペース、ショップなどと連携して学外実習をおこなうことで、音楽における地域性やインディペンデントレーベルの流通構造を学んだり、伝統的な素材や製法を活かしながらも現代的なファッションデザインで評価を受ける老舗や、小規模ながらオリジナリティのあるブランドが生まれ育まれてきた実際を学ぶ。

いずれの科目も、4 年次の卒業制作へとつながっていくものであり、学生個人がそれぞれ自由にテーマを定めて取り組む卒業制作が集大成となる。

（２） 教育課程の特色

ポピュラーカルチャー学部では、ポピュラーカルチャー領域のなかでもファッションとポピュラーミュージックの 2 分野を中核とし、学生は入学時に選択したいずれかのコースに所属して学ぶこととなる。

学生は選択したコース（ファッション／ポピュラーミュージック）に所属して学部専門実技科

目を受講し、演習・実習を通じてそれぞれの制作実技の基礎から応用までを修得する。現役クリエイターを実務家教員として配置することで、制作から流通までを実践的に学び、専門的な技術とその考え方を身に付けることができるようになっている。

また、技能の育成＝「つくる」ことだけではないところに本学部の学びの大きな特色がある。本学部の教育課程は、社会に広く受容される作品制作を行うための、「つくる」「届ける」「考える」の 3 つの観点を持って編成されている。ポピュラーカルチャー領域のコンテンツに関して、制作からプロデュース、流通、そして研究・批評にも精通した多様な知識と技法を習得できるように授業を配した。商業的・技術的制約の下でアイデアを作品にする技術や、市場の最新動向を知り、作品を消費者へと届けるための新たな流通の仕組みを作る技術、ポピュラーカルチャーの魅力や意味を社会的側面からとらえ、それを他者へと伝達する手法について修得できるようになっている。これは技術習得が授業の 8 割を占めると言われる専門学校との大きな相違点であり、コンテンツ・ビジネス、プロデュースや批評等、制作面以外の「届ける」「考える」という視点においてポピュラーカルチャー領域の知識や技術を身に付けることは、大学でポピュラーカルチャーを学ぶ意義があると考える。

また、並行して履修する学部専門講義科目を通じて、批評やプロデュース等、制作面以外の視点を身に付け、思考力を鍛えていく。なお、コース間の交流を促進する科目（「領域横断基礎演習 1・2」、「領域横断演習 1・2」、表現融合科目群、表現越境科目群）も多く配置し、異なるジャンルのカルチャーや考え方を知ることで、互いに影響を与え合い、新たな創造力を形成できる仕組みを設けている。

さらに、京都の制作・発信現場とつながりを持った科目（「京都の文化装置 1・2」、「制作実務研修 1～4」）を配置していることで、これまで独自の文化を形成してきた京都の文化を学ぶとともに、ポピュラーカルチャーにおける地域性や流通構造を学ぶことができることも特色である。

これらの複数の観点から学ぶことで、作品制作のみならず批評精神や芸術的文脈、社会動向を理解したクリエイターを養成する。また、実社会でクリエイターのパートナーとして、文化を支える職種であるプロデューサーやディレクター、そして批評家や研究者を目指すことができる教育課程となっている。

５．教員組織の編成の考え方及び特色

本学部は入学定員 118 名、収容定員 472 名である。大学設置基準の別表第一、美術関係の項、「一学科で組織する専任教員数」の欄で定める人数（11 名）に準拠し、開設時には専任教員 11 人（教授 5 人、准教授 3 人、講師 3 人）、完成年次には専任教員 15 人（教授 9 人、准教授 3 人、講師 3 人）となり、設置基準を十分に満たしている。

なお、専任教員 15 名のうち 9 名は実務経験が豊富な実務家教員である。本学部の研究対象であるポピュラーカルチャーは、その作品が大衆に享受されることによって成立する文化表現領域であり、商業的に流通し社会と結びついていることがその存在には不可欠である。よって、現在も作品を制作しそれを社会に向かって発表している現役クリエイター（職業はプロデューサーやミュージシャン、ファッションデザイナー、編集者等）が教員であることで、学生は実社会での制作から流通までの様子を肌で感じることができる。いずれの教員も自身の感性で道を切り拓き

活躍してきたクリエイターばかりであり、学生にとっては卒業後の目標ともなる存在である。実務家教員らは、教育課程の中核的な専門教育科目「基幹表現科目群」の演習科目、実習科目を担当する。実務を通じた知識と経験、すなわち実践知の提供、そしてそれを活かした教育指導を期待するものである。一方で、アカデミズムの世界で学術的な実績を積んだ研究者である教員は、学部専門科目の必修講義科目を中心に担当する。実務家教員と研究者教員が両輪となって実務面と研究面から教育を行い人材育成を推進するものである。

また、すべての科目において設置基準に照らし、研究実績や指導力に十分配慮し、必要な専任教員、兼担教員及び兼任教員を配置している。実務家教員については必ずしも全員が学位は有してはおらず、学術的な研究業績があるわけではないが、研究対象であるポピュラーカルチャー分野においては教育研究領域が未確立でその高等教育機関がほとんどないためであり、彼らはそれぞれの専門領域において数多くの作品発表を継続的に行っており、その実社会における活動実績から、指導に関しては問題がないと考える。また、研究者教員らは学位を十分に保有している。

なお、年齢構成は 60 代 5 名、50 代 2 名、40 代 5 名、30 代 3 名であり、著しい偏りはなく、教育研究上の維持向上と活性化に支障がない。また、完成年次に定年を超えて在籍する教員はいない。

６．教育方法、履修指導方法及び卒業要件

（１） 授業方法

ポピュラーカルチャー学部では､本学既存の芸術分野の学部にならい､主に午前中に講義科目、午後に実技科目（演習・実習）を配置する。

講義科目に関しては履修学生全員を 1 クラスで開講する。実技科目に関しては、入学時に選択したコース（ファッション／ポピュラーミュージック）に沿って受講するため、1 学年 118 名を適正な人数にクラス分けして運営する。1 年次・2 年次の必修科目である「基礎実習」「制作実習」については無作為に 4 クラス（1 クラス約 30 名）に分けて運営する。また、学生個人の志向に合わせて選択する実技科目に関しては 6～7 クラス（1 クラス 15 名～20 名に分けて運営する予定である。

本学部では教育課程を編成する際「つくる」「届ける」「考える」の 3 つの視点をもって教育課程を体系的に編成している。3 年次以降は学生個人の志向により、目指す職業像に合わせて、「つくる」「届ける」「考える」のいずれかの分野に重点を置いて授業を履修することで専門性を深めることができるようになっている。**（※添付資料１「履修モデル」参照）**

（２）履修指導

全学年を通じて、新年度のオリエンテーション期間において、教務部主催の履修説明会を実施する。特に初年次に関しては、学生生活全般の指導とともにシラバスを提示し、１年間の授業について、また卒業までのプロセスについても説明する。

なお、1 年次・2 年次の必修の実習については、118 名を 4 クラスに分けて授業を行う。各クラスのジェンダーバランスや学生の属性の多様性を考慮しつつ、機械的にクラスに配属させる。

科目の履修に関しては学部主催のガイダンスを行い、各授業でどのような教員が何をテーマにどのような目的で開講するかを説明し、学生個人の志向や、教員からみた適性等で判断し、履修の指導を行う。

なお、本学では 2009 年度より、教学内容の改善・充実の一環として GPA（Grade Point Average）制度を導入している。学生個人の履修科目の成績の平均を数値化し、学業結果を総合的に判断する指標として役立ち、従来の修得単位数という量的な判断に加えて、質的な観点からの判断材料とすることが目的である。学生は自身の学修状況を客観的に把握でき、自らの履修管理に責任を持ち、自主的、意欲的に学修することが期待できる。また、大学においても、学生に対するきめ細やかな学習指導を行う。なお、GPA はセメスターごとに交付される成績通知書にも記載し、学生に通知する。

（３）卒業要件

卒業要件は下記の通りの科目単位数を満たし、124 単位以上を修得することとする。

計 124 単位以上を修得すること	
基礎講義・演習科目 （107 科目 206 単位）	20 単位以上
	「表現ナビ」2 単位、 「英語」（留学生は「日本語」）6 単位を含む
学部専門講義科目 （31 科目 62 単位）	20 単位以上
	「ポピュラーカルチャー原論」「クリエイティブ概論」「ポップ批評」「ポップ美学」「文化産業研究概論」 各 2 単位、計 10 単位を含む
専門実技科目 （52 科目 124 単位）	78 単位以上
	「基礎実習」18 単位、「制作実習」12 単位、「領域横断基礎演習」4 単位、「応用実習」12 単位、「領域横断演習」4 単位、「自由制作」12 単位、「卒業制作」12 単位、計 68 単位を含む

基礎講義・演習科目では、大学での学びの方法や大学の理念を理解する「表現ナビ」と語学のみを必修とし、ほかは 107 科目配置する教養系科目から選択して履修する。

学部専門講義科目は、本学部の研究領域であるポピュラーカルチャーの基礎知識を学ぶ 5 つの講義科目を必修とし、学生個人の希望によってほか 26 科目から選択して履修する。

専門実技科目は本学部のカリキュラムの要となる実習科目を必修とし、ファッション、ポピュラーミュージックの専門領域におけるコンテンツ制作の技術を修得する。学生個人の志向に合わせてほか 26 科目から選択して履修する。ほか、表現融合科目群やメディア制作科目群、表現越境科目群、実務研修科目群の 28 科目より学生個人の必要性に合わせて選択して履修する。

なお、履修単位の登録については、原則として 1 セメスターにつき 24 単位、年間 48 単位の上限を設ける。年次ごとに目標に沿って計画的に履修するよう指導する。

７．施設・設備等の整備計画

（１） 校舎等施設　　※「６．校地校舎等の図面」参照

本学は京都市左京区の山あいに立地し、校地の半分は森林である。この恵まれた環境を最大限に活かすことに主眼を置き、講義室、実習室などの各学部の授業に用いられる校舎や、図書施設や食堂などを備えている。運動施設は、充実した設備の体育館や十分な大きさのグラウンド、テニスコートをキャンパス内に確保しており、授業ではもちろん、サークルや有志による課外活動や他大学との交流にも活用されている。

また、食堂とカフェのほか、各校舎にはロビーや休憩スペースを設け、屋外にもベンチ等を設置し、学生の憩いにも十分に配慮している。

ポピュラーカルチャー学部に関しては、キャンパス内に新しい建物を建設する計画を進めている。2014年春竣工予定で、情報館（図書・情報施設）の隣の現在駐輪場として使用している場所に建設し、演習・実習教室を中心に、500人収容の大講義室を設置する予定である。
なお、本学既存の美術分野の学部と同様、コース単位でホームルーム（HR）教室を設置し、多くの演習・実習科目はその部屋で行う。そのほか、コースをわたる選択科目については、その他の演習・実習室（プロジェクトルームやその設備を備える教室）へ移動して受講する。講義科目に関しては、「黎明館」「春秋館」「明窓館」の講義教室を他学部と共同で使用する。**（※添付資料２「時間割」参照）**

・HR 教室

ファッションコースは 1～4 年とも各 1 教室、ポピュラーミュージックコースは 1・2 年は各 3 教室、3・4 年は各 1 教室を配置する。HR 教室は実習科目を行うメインの教室となるため、学生個人のデスクとロッカーを用意し、十分な電力、インターネット回線を確保・整備する。また、学生各々の専門性が高まる 3～4 年生は授業内容に応じてプロジェクトスペース等、その他の演習・実習室でも授業を行うことが増える。

・プロジェクトスペース

広めのエリアを可動式のボードで間仕切りし、履修人数に応じて可変できるスペースを用意する。プロジェクト形式で行う授業（「領域横断基礎演習」「領域横断演習」「企画演習」「メディア制作」等）で使用するほか、ゼミや産学連携活動のような授業外活動でも利用可能とする。

・PC ルーム

パソコンを使用する演習科目（「企画演習」「メディア制作」等）で使用するほか、実習科目でも必要に応じて使用する。

・工房（ミシン、シルクスクリーン）

ファッションコースの特殊ミシンを設置するほか、シルクスクリーン印刷を行える設備と設備を用意。演習・実習科目の内容に応じて使用するほか、個人制作でも利用可能とする。

・練習室

防音性、吸音性を優先した環境で、主にポピュラーミュージックに関する演習・実技科目で使用する。個人制作や、課外の自主活動の練習スペースとしても利用可とする。

・録音スタジオ

主にポピュラーミュージックの演習・実習科目で使用する。

・講義室

500 名収容の大講義室を設置する。学部専門講義のほか、講演会やシンポジウム、ファッションショーやコンサートイベントが開催できるホール機能も兼ねるため、適切な照明や音響設備を備える。授業成果の発表の場としても利用する。

・研究室

各教員が研究に集中できる環境と整える。また、研究室の前は教育用資料を保管・閲覧できるスペースも設け、学生が相談に訪れやすいレイアウトを計画している。

・その他

機材倉庫やギャラリーを各所に設けるほか、非常勤講師控室、アーカイブルームを設ける。

なお、新しい校舎の竣工は開設2年目の2014年春のため、開設初年度である2013年度の1年間はキャンパス内の既存の校舎を整備して利用する。

HR教室4部屋、その他演習・実習に使用するプロジェクトルーム5部屋、機材倉庫1部屋、教員研究室（個室8部屋と共同スペース）を用意する。

HR教室は、現在講義棟として使用されている「清風館」3階を使用。教員の研究室は人文学部教員研究室棟の「流渓館」を使用。その他、演習や実習に使用する部屋は、「清風館」3階に1部屋、「明窓館」1階に1部屋のほか、「情報館」メディアセンターホール、スタジオ、セミナールームも学部専用の演習室として利用する。また、講義科目に関しては、「黎明館」「春秋館」「明窓館」の講義教室を他学部と共用する。よって、初年度の授業運営には問題はないものと考える。

（２）図書等の資料及び図書館

本学には図書資料、視聴覚資料、博物資料の所蔵、またデジタル機材の充実をはかる方針によって、全学共用の施設である「情報館」を設置している。

情報館は、4階構造約4,700㎡の延べ床面積を持ち、その内閲覧スペースは約1,900㎡、閲覧席数約530席であり、視聴覚および情報末端スペースは約1,100㎡が確保されている。書庫および事務スペースは約1,000㎡である。

図書資料の収蔵冊数は約230,000冊となり、既存学部の研究領域である芸術・文化関連の図書資料が豊富である。また、毎年経常的に図書・視聴覚資料の追加など、整備を行っているため、カルチャー領域の資料は一層充実される方向にある。今後も、教員や学生のニーズを想定し、さらに充実した図書・視聴覚資料等の準備を進める予定である。

ただし、ポピュラーカルチャーは、社会的・学問的諸領域においては大きな影響を与え続けてきたことからその分野の研究論文そのものは多数発表され続けているものの学問としては未確立であり、美学や社会学、文化史などの様々な学問領域の学術雑誌のなかに散在するかたちとなっ

ている。そのため本学では、一般的なカルチャー誌についても多く取り扱うこととする。（**※添付資料３「関連雑誌一覧」参照**）また、上記以外に電子ジャーナル589タイトル、デジタルデータベースが15種利用できる。（**※添付資料４「電子ジャーナル、デジタルデータベースについて」参照**）

また、図書資料の他、約1万点の視聴覚資料を所蔵し、その他の施設として、デジタル機器での制作支援、機器貸出を行うメディアセンター、撮影用スタジオや上映用機材を備えたメディアホールといった施設を館内に設置している。

８．入学者選抜の概要

（１） アドミッションポリシー

ポピュラーカルチャー学部では、文化表現を通して産業界の将来を担う人材の養成を目的としている。特定のジャンルに偏ることなく、ファッションやポピュラーミュージック、その他のポピュラーカルチャーの多様性に対して寛容な人材を求める。

ポピュラーカルチャー学部が求める人材は以下の通り。

1.文化について関心があり、知識を深め、経験を高めたいと考えている。
2.創造的な活動に対して積極的に取り組むことができる。
3.ポピュラーカルチャーを通して新しい社会生活や価値観を創造することに意欲がある。

（２） 選抜方法、選抜体制

本学既存学部と同様、AO入試、推薦入試、一般入試を中心とした選抜方法及び各選抜方式を行う。入学者の定員配分は以下のとおり計画している。

入試種別		開催時期	日数	募集人数	形式
ＡＯ入試	一期	８月	２日	53名	ワークショップ形式
	二期	９月	２日		ワークショップ形式
公募制推薦入試		11月	２日	35名	実技／学科
一般入試	一般方式	２月	２日	18名	実技／学科
	センター併用方式	１月	（２日）	６名	センター試験
その他		９月～10月		６名	

ポピュラーカルチャー学部では、すべての入学試験で、現役、既卒を問わず受験することができ

る。AO入試は授業体験型で行い、ワークショップに取り組む姿勢やコミュニケーション能力を中心に評価、判断する。公募制推薦入試は実技形式・学科形式・小論文形式で、適性や基礎能力を判定する。一般入試は実技形式・学科形式、小論文形式で行い、専門能力で判定する。一般入試センター併用方式に関しては、センター試験2科目の合計200点を本学個別試験に加算して判定する。

なお、選抜判定に関する事項は教授会にて行う。

（３） 科目等履修生、聴講生の受け入れ

ポピュラーカルチャー学部では、本学規定に沿って、科目等履修生を受け入れる。科目等履修生の入学は、教授会の議を経て学長が許可するものとする。基礎資格は、高等学校卒業以上のもの、本学教授会が本学入学資格に相当すると認定したもの、図書館司書課程科目および博物館学芸員課程専門科目を希望する場合は大学を卒業しているものとする。なお、本学学部および研究科が開講する授業科目のうち演習・実技科目を除くもので、特に受講人数を制限していない授業科目に限る。受講制限に関しての規定を設けているため、教員や校舎など教育に支障はないと考える。

なお、本学の規定では、聴講生が受講できる授業科目は教職に関する専門科目のみとなるため、本学部には該当せず、聴講生は受け入れない。

９. 取得可能な資格

ポピュラーカルチャー学部で取得可能な資格は以下の二つを予定している。

・図書館司書（国家資格）
・学芸員（国家資格）

資格取得が可能であるが、いずれも追加科目の履修が必要となる。

10. 学外実習の具体的計画

本学部では、学外で行う実習として、学部専門実技科目のなかに実務研修科目群を置き、「インターンシップ」「制作実務研修 1～4」を配置している。

「インターンシップ」では、地元京都を中心に、デザイン会社などのクリエイティブ関連の企業の現場での就業体験を行う。「制作実務研修 1～4」では、ポピュラーカルチャーの専門領域の制作・流通の現場での就業体験を行う。

いずれも各実習先とは事前に実習計画の確認を行い、参加学生の目標が十分に達成できるよう計画立案を行う。実習状況については実習先ごとに専任教員が担当につき、実習状況を把握。実習終了後には実習先と実習内容についての報告や意見交換を行い、改善につなげる。履修者には事前にガイダンスを行い、担当教員が目的や目標について説明、ミスマッチがないようにつとめ

る。また成績評価に関しては、実習先より実習中の評価を受けると共に、事前と事後のレポートを合わせて評価する。

本学が他にも美術分野の学部を有していることから、他学部との連携したプログラムも計画されており、多様な学外実習プログラムを拡大していきたいと考えている。

11. 管理運営

本学では、教授会はこれを分けて全学教授会と学部教授会とする。全学教授会は学長を、学部教授会は学部長を中心とし、授業担当となる専任の教授、准教授、講師をもって構成する。

教授会では本学の教授会規定に定められた通り、以下に掲げる事項を審議する。

・全学教授会

学長、専任の教授、准教授および講師その他教授会が認めた教員で構成する。学長が招集しその議長となり議事を主宰、以下の事項を審議決定する。

(1) 全学に関する重要事項
(2) 各学部間の連絡調整に関する事項
(3) その他学長が必要と認める事項

・学部教授会

各学部に属する専任の教授、准教授および講師その他教授会が認めた教員で構成する。部長がこれを招集し、その議長となり議事を主宰する。原則として毎月1回これを開き、以下の事項を審議決定する。

(1) 学生の入学、編入学、転入学、休学、退学、転学、除籍、復学および卒業に関する事項
(2) 教育課程の編成に関する事項
(3) 学生の試験および課程修了の認定に関する事項
(4) 教授および研究に関する事項
(5) 教員の人事に関する事項
(6) 学則および諸規程の制定、改廃に関する事項
(7) 学長の諮問した事項
(8) 学部内の連絡調整に関する事項
(9) 学部長の選出に関する事項
(10) その他全学教授会から付議された事項

なお、本学では、教学上の問題点を共有し、改善・向上につながるよう、教授会以外の管理運営機関として全学教務委員会、各学部教務委員会を月に1回行っている。また、学長および副学長と各学部・事務局の連携を図るため、教学連携会議も開催する。教学連携会議は月1回、学長、副学長、各学部長、教務部長、学生部長、入学部長を構成員とする。

共通する教養教育やキャリア教育等、大学全体の教務事項の共有や調整を図りやすい体制を整えている。

12. 自己点検・評価

本学では1996年以来「京都精華大学自己点検・自己評価規程」にもとづき自己点検・評価委員会を設け、自己点検・評価活動に取り組んできた。

2005年度までは、主な活動方針として、年度ごとに特定の部署や教学プログラムをとりあげ、集中的に点検・評価を加えきた。この間の点検・評価結果はこれまで4冊の報告書として刊行されている。

2006年度以降は各学部、研究科から1名、また教務部、総務部、企画室、学長室といった教学と組織運営の要となる事務部門の各部署から委員を選出し、全学で連携して、自己点検・評価委員会を組織した。また、それまでの特定の部署や教学プログラムを年度ごとにとりあげる方式をあらため、大学基準協会の点検・評価項目（A群・B群）すべてにおける点検・評価に取り組むこととした。また、すべての開講科目を対象とした授業評価アンケートにも取り組んだ。

2007年度は引き続き自己点検・評価に取り組み、この結果にもとづいて、2008年度には財団法人大学基準協会での審査を受け認証評価された。

さらに2009年度より自己点検・評価に関する専門部局として教学推進センターを設立した。「自己点検評価報告書」および「大学基礎データ」と大学基準協会による「京都精華大学に対する相互評価結果ならびに認証評価結果」をまとめた自己点検・評価報告書を刊行、本学ウェブサイトにおいても公開している。

新たに設置するポピュラーカルチャー学部においても、教学推進センターを中心とし、自己点検・評価を実施しながら、継続的な改善を進めていく。

13. 情報の公表

本学では広報紙、ウェブサイトなどのメディアを通じて、広く社会への情報公開を行っている。ポピュラーカルチャー学部に関しても、学部の教育目的、教育課程や担当教員など、教育研究活動の状況を積極的にウェブサイトにて公開していく計画である。

① 大学の教育研究上の目的に関すること
http://www.kyoto-seika.ac.jp/about/
「大学概要」
http://www.kyoto-seika.ac.jp/about/policy/
「教育の 3 つの方針」

② 教育研究上の基本組織に関すること
http://www.kyoto-seika.ac.jp/edu/
「学部・大学院」

③ 教育組織、教員の数並びに各教員が有する学位及び業績に関すること
http://www.kyoto-seika.ac.jp/about/number/

「在学生数・教員数」

http://www.kyoto-seika.ac.jp/edu/faculty/
「教員紹介」　教員紹介 ＞ 各教員「業績紹介」

④　入学者に関する受け入れ方針及び入学者の数、収容定員及び在学する学生の数、卒業又は修了した者の数並びに進学者数及び就職者その他進学及び就職等の状況に関すること
http://www.kyoto-seika.ac.jp/edu/
学部・大学院 ＞ 各学部 ＞各分野「3 つの方針」

⑤　授業科目、授業の方法及び内容並びに年間の授業の計画に関すること
http://syll.kyoto-seika.ac.jp/syllabus/syllabus/search/Menu.do
「授業シラバス」

⑥　学修の成果に係る評価及び卒業又は修了の認定に当たっての基準に関すること
http://www.kyoto-seika.ac.jp/about/report/
「事業報告・学則・評価 ＞ 学則」

⑦　校地・校舎等の施設及び設備その他の学生が教育研究環境に関すること
http://www.kyoto-seika.ac.jp/about/map/
「キャンパスマップ」

⑧　授業料、入学料その他の大学が徴収する費用に関すること
http://admission.kyoto-seika.ac.jp/procedure/graduate_cost.php
「学費・奨学金制度」

⑨　大学が行う学生の修学、進路選択及び心身の健康等に係る支援に関すること
http://www.kyoto-seika.ac.jp/career/
「進路・就職」
http://stu.kyoto-seika.ac.jp/campuslife/advisement/
「健康・生活の相談」

⑩　その他（教育上の目的に応じ学生が習得すべき知識及び能力に関する情報、学則等各種規定、設置認可申請書、設置届出書、設置計画履行状況等報告書、自己点検・評価報告書、認証評価の結果　等）
http://www.kyoto-seika.ac.jp/about/report/
「事業報告・学則・評価」

14. 授業内容の改善を図るための組織的な取組み

本学には、教員の資質の維持向上を恒常的かつ組織的に推進する組織として、全学的なFD委員会を設置している。FD委員会は各学部・研究科などの部門ごとに設けられていており、ポピュラーカルチャー学部においても新たに委員会を設置する。また、2009年度に各部門のFD活動を統括する専門部局である教学推進センターを設立し、FD活動の推進をはかっている。

FD委員会は、PDCAサイクルによって組織的・継続的に教育効果を高めていく「教育マネジメントサイクル」を構築し、各部門の情報共有、年次ごとの全体目標、部門目標の設定などによって全学的なFDを活性化している。その他、全学的な教育改善・開発に関してもFD委員会が中心となり、教職員を対象とした研修会などを催している。

本学のFD活動は、スムーズな活動展開を推進していること、SD（大学職員の能力開発）の効果を見込んで、積極的に職員を参加させていることが挙げられる。また、日常的な教育開発・改善活動もその活動の対象とし、全学の教学研究組織を活性化させる手段にもなっている。

上記以外にも、教員の資質を向上させる制度として、各セメスターの後半に授業アンケートを実施している。授業アンケートは全科目を対象に行われ、集計結果を担当教員に提示する。当該教員はアンケート結果を踏まえ、今後の改善点を所定様式で提出する。

このように、本学では教員の資質の維持向上を目指すべく、組織的に機能する FD 委員会と授業アンケート制度を整えており、今後さらに継続的な向上を進める。

15. 社会的・職業的自立に関する指導等及び体制

（１） 教育課程内での取組み

社会的、職業的自立に関して、教育課程内にキャリアデザインに関する授業を配置している。

①基礎教育科目

「キャリアデザイン 1～4」「キャリアアップ演習 1・2」「作品ポートフォリオ演習 1・2」「キャリアのためのデッサン 1～4」「クリエイティブの現場」「キャリアインターンシップ」を配置している。これらの科目に関しては、大学に設置されたキャリアデザインセンター（後述）が企画、調整を行っている。

「キャリアデザイン」では、表現者へのキャリア支援と題して、卒業生をゲストに招いた業界研究、仕事研究やコミュニケーション能力、文章力を鍛えるワークショップを行う。「キャリアアップ演習」では、グラフィックソフト Adobe Illustrator、Adobe Photoshop の基本操作から発展的なテクニックまで演習形式で修得する。「作品ポートフォリオ演習」では、クリエイティブ業界に就職する際、応募書類や面接時に必要となる作品ポートフォリオに関する知識と制作スキルを身に付ける。「クリエイティブの現場」ではクリエイティブ業界の現場からプロデューサーやクリエイターを招いて、コンテンツの制作論を聞く。「キャリアインターンシップ」では、広い領域や職種に渡る企業での就業体験を行う。

②専門教育科目

専門実技科目のなかの実務研修科目群の演習として「インターンシップ」「制作実務研修」を設置している。

「インターンシップ」では、印刷、デザイン映像分野などの専門的領域の企業での就業体験を学習、「制作実務研修 1～4」では、ポピュラーカルチャーの専門領域の制作・流通の現場での就業体験を行う。

また本学部にはポピュラーカルチャー領域におけるクリエイターやプロデューサーなどの実務家教員を、学部専門実技科目の基幹表現科目群、表現融合科目群、メディア制作科目群、表現越境科目群等に配置しており、実務を通じた知識と経験を生かした教育指導が期待される。

（２） 大学全体での取組み

本学では､その独自の芸術分野の教育によって創造力と行動力を身に付けた学生を育成し､様々な分野で活躍できる人材の輩出をめざしてきたが、ビジネスの複雑化や競争の激化、技術の進化などの社会的な変化を受けて、大学全体で先進的なキャリア教育・キャリア支援に取り組んでいる。2010 年度に文部科学省「大学生の就業力育成支援事業」に採択され、「職業的実践力を有する表現者育成プログラム」の構築を開始した。企業への就職だけでなく、学生個人の志向に合った将来性のある仕事､進路を提示｡教育課程内に配置したキャリア教育に関する履修科目のほか、さまざまなサポートを行っている。**（※添付資料５「キャリアデザインセンターの体制、キャリアデザインに関する規定」参照）**

① キャリアデザインセンターの設置

2011 年、キャリアデザインセンターを立ち上げ、事務局の就職支援部署だけではなく、各学部の教員や教務課も連携して全学的にキャリア教育に取り組む体制を整備した。キャリアデザインセンター所属の教員を配置し､現場経験をもつ教員と全学を横断する組織が一体となって、時代の変化に対応できるキャリア教育を追究している。

② セイカポートフォリオ

学習成果を学内のサーバーに蓄積し、就職活動に利用するラーニング・ポートフォリオのシステムを用意した。

③ 企業との連携

企業のクリエイティブ部門とのコラボレーション授業や、企画開発部門との共同プロジェクトを実施し、ビジネスの現場に触れる機会を数多く設けている。

④ 作家・起業支援

作家やフリーランスで活躍するデザイナーやマンガ家といったキャリアを選択する学生、起業を視野に入れ、自立したクリエイターを目指す学生も少なくないことから、企業就職以外のキャリア指導にも力を入れている。アーティスト向け就職ガイダンス、ベンチャー経営者の講演会、デザイン会社や出版社による作品講評会などを開催し、自立のために必要な知識やマネジメントの方法論を学ぶ機会を設けている。

⑤ 課外活動サポート

学年ごとに対象を分けて実施している進路・就職ガイダンスのほか、筆記試験・面接試験対策講座、マナー・メイクアップ講座、クリエイティブ系就職対策講座を開催している。また、

有名企業の人事・採用担当者が来校して会社説明を行う個別の企業説明会のほか、150 社以上の企業が参加する合同説明会をキャンパス内で開催し、企業と学生を直接結び付ける機会を作っている。また、クリエイティブ系の企業が集まる東京での就職活動についても積極的に支援し、東京の企業訪問・プレゼンツアーを毎年開催している。

本学では、表現者を育成するという教学内容に即した職業的自立を図るための能力育成に積極的に取り組んでおり、今後も社会の動向を見据えながら、多様な進路に対応したキャリア支援を行っていきたいと考える。

以上

資料1「6. 教育方法、履修指導方法及び卒業要件」 履修モデル

履修モデル①「つくる」に重点を置いた場合　／クリエイターを目指す

クリエイターを目指す場合、「領域横断演習」「応用実習」「領域横断基礎演習」では制作（つくる）に関する技術や考え方を学ぶクラスを受講することを、また、表現越境科目群「デッサン」「クラフト」などモノづくりを直接的に行う科目を、メディア制作科目群から作品を発表する形式等について学ぶ科目等の履修が推奨される。

学年	基礎講義・演習科目	単位数	学部専門講義科目	単位数	学部専門実技科目	単位数	
1年	表現ナビ	2	ポピュラーカルチャー原論	2	基礎実習1	3	
	英語1	2	クリエイティブ概論	2	基礎実習2	3	
	英語2	2	サウンドデザイン概論	2	基礎実習3	3	
	芸術学1	2	ファッションデザイン概論	2	基礎実習4	3	
	数学	2	ポピュラー音楽史	2	基礎実習5	3	
	情報処理基礎1	1	ファッション史	2	基礎実習6	3	
	情報処理基礎2	1	文化産業研究概論	2	企画演習１	2	
					メディア制作4（ボイス＆リズム）	2	1年計
	小計	12	小計	14	小計	22	48
2年	英語3	2	テクスト分析法研究	2	制作実習1	3	
	芸術学2	2	ポップ批評	2	制作実習2	3	
	創作論1	2	ポップ美学	2	制作実習3	3	
	国内フィールドワーク1	2			制作実習4	3	
					領域横断基礎演習1	2	
					領域横断基礎演習2	2	
					企画演習3	2	
					企画演習4	2	
					メディア制作3（映像）	2	
					デッサン1	2	
					デッサン2	2	
					クラフト1	2	
					クラフト2	2	
					制作実務研修1	2	2年計
	小計	8	小計	6	小計	32	46
3年	創作論2	2	比較文化概論	2	応用実習1	3	
	キャリアデザイン1	2	スタイル素材研究	2	応用実習2	3	
	海外フィールドワーク1	2	スタイル編集研究	2	応用実習3	3	
			視聴覚表現論	2	応用実習4	3	
					領域横断演習1	2	
					領域横断演習2	2	
					企画演習5	2	
					メディア制作6（Web）	2	
					メディア制作8（インタラクション）	2	
					身体表現1	2	
					身体表現2	2	
					インターンシップ	2	
					制作実務研修2	2	3年計
	小計	6	小計	8	小計	30	44
4年					自由制作1	3	
					自由制作2	3	
					自由制作3	3	
					卒業制作1	3	
					卒業制作2	3	
					卒業制作3	3	
					調理表現	2	4年計
	小計	0	小計	0	小計	20	20
単位数小計		26		28		104	158

卒業要件：基礎講義・演習科目から20単位以上を必修、学部専門講義科目から20単位以上、専門実技科目から78単位以上、計124単位を修得すること。

履修モデル②「届ける」に重点を置いた場合　／プロデューサー、編集者等を目指す

プロデューサーや編集者等、ポピュラーカルチャーに関する作品を受容する人のもとへ「届ける」職業を目指す場合、「領域横断演習」「応用実習」「領域横断基礎演習」ではメディアや企画に関する技術や考え方を学ぶクラスを受講することを、また、表現越境科目群「文章表現」や、メディア制作科目群の技術習得に関する科目の履修が推奨される。

学年	基礎講義・演習科目	単位数	学部専門講義科目	単位数	学部専門実技科目	単位数	
1年	表現ナビ	2	ポピュラーカルチャー原論	2	基礎実習1	3	
	英語1	2	クリエイティブ概論	2	基礎実習2	3	
	英語2	2	サウンドデザイン概論	2	基礎実習3	3	
	社会学	2	ファッションデザイン概論	2	基礎実習4	3	
	芸術と経済	2	メディア論	2	基礎実習5	3	
	情報処理基礎1	1	広告文化論	2	基礎実習6	3	
	情報処理基礎2	1	文化研究産業概論	2	企画演習2	2	
					メディア制作4（グラフィック）	2	1年計
	小計	12	小計	14	小計	22	48
2年	英語3	2	比較文化概論	2	制作実習1	3	
	法学概論	2	ポップ批評	2	制作実習2	3	
	芸術学1	2	ポップ美学	2	制作実習3	3	
	キャリアデザイン1	2	文化装置論	2	制作実習4	3	
	国内フィールドワーク1	2	知的財産権概論	2	領域横断基礎演習1	2	
			マーケティング論	2	領域横断基礎演習2	2	
					企画演習4	2	
					メディア制作5（エディトリアル）	2	
					文章表現1	2	
					文章表現2	2	2年計
	小計	10	小計	12	小計	24	46
3年	芸術学2	2	舞台表現論	2	応用実習1	3	
	海外フィールドワーク	2	近代社会文化誌	2	応用実習2	3	
			京都の文化装置1	2	応用実習3	3	
			京都の文化装置2	2	応用実習4	3	
			文化政策論	2	領域横断演習1	2	
			アートプロデュース論	2	領域横断演習2	2	
					企画演習5	2	
					メディア制作3（映像）	2	
					メディア制作6（Web）	2	
					メディア制作7（プレゼン）	2	
					インターンシップ	2	
					制作実務研修3	2	3年計
	小計	4	小計	12	小計	28	44
4年					自由制作1	3	
					自由制作2	3	
					自由制作3	3	
					卒業制作1	3	
					卒業制作2	3	
					卒業制作3	3	
					制作実務研修4	2	4年計
	小計	0	小計	0	小計	20	20
単位数小計		26		38		94	158

卒業要件：基礎講義・演習科目から20単位以上を必修、学部専門講義科目から20単位以上、専門実技科目から78単位以上、計124単位を修得すること。

履修モデル③「考える」に重点を置いた場合　／批評家、研究者を目指す

批評家や研究者等、ポピュラーカルチャー領域を「考える」職業を目指す場合、2年以降も基礎講義科目、学部専門講義科目を充実させることや、「領域横断演習」「応用実習」「領域横断基礎演習」では企画や批評に関する技術や考え方を学ぶクラスを受講することが推奨される。

学年	基礎講義・演習科目	単位数	学部専門講義科目	単位数	学部専門実技科目	単位数	
1年	表現ナビ	2	ポピュラーカルチャー原論	2	基礎実習1	3	
	英語1	2	クリエイティブ概論	2	基礎実習2	3	
	英語2	2	サウンドデザイン概論	2	基礎実習3	3	
	社会学	2	ファッションデザイン概論	2	基礎実習4	3	
	芸術学1	2	文化社会学	2	基礎実習5	3	
	情報処理基礎1	1	サブカルチャー論	2	基礎実習6	3	
	情報処理基礎2	1	文化産業研究概論	2	企画演習2	2	
					メディア制作7（プレゼン）	2	1年計
	小計	12	小計	14	小計	22	48
2年	英語3	2	ポップ批評	2	制作実習1	3	
	哲学	2	ポップ美学	2	制作実習2	3	
	現代思想	2	ポピュラー音楽史	2	制作実習3	3	
	法学概論	2	ファッション史	2	制作実習4	3	
	芸術学2	2	作品作家研究	2	領域横断基礎演習1	2	
	キャリアデザイン1	2	知的財産権概論	2	領域横断基礎演習2	2	
	国内フィールドワーク1	2			企画演習3	2	
					文章表現1	2	
					文章表現2	2	2年計
	小計	14	小計	12	小計	22	48
3年	現代日本社会論	2	身体感覚構造概論	2	応用実習1	3	
	現代日本社会論	2	比較文化概論	2	応用実習2	3	
	海外フィールドワーク1	2	身体表現論	2	応用実習3	3	
			メディア論	2	応用実習4	3	
			文化装置論	2	領域横断演習1	2	
			文化政策論	2	領域横断演習2	2	
			アートプロデュース論	2	企画演習6	2	
					調理表現	2	
					インターンシップ	2	3年計
	小計	6	小計	14	小計	22	42
4年			ストリート表現論	2	自由制作1	3	
					自由制作2	3	
					自由制作3	3	
					卒業制作1	3	
					卒業制作2	3	
					卒業制作3	3	4年計
	小計	0	小計	2	小計	18	20
単位数小計		32		42		84	158

卒業要件：基礎講義・演習科目から20単位以上を必修、学部専門講義科目から20単位以上、専門実技科目から78単位以上、計124単位を修得すること。

資料2「7. 施設、設備等の整備計画　校舎など施設の整備計画）

ポピュラーカルチャー学部　時間割案

※1講時・2講時は選択の講義科目のため省略。演習・実習科目が配置される3～5講時を記載。

◆前期

<table>
<tr><td>曜日</td><td colspan="3">月</td><td colspan="3">火</td><td colspan="3">水</td><td colspan="3">木</td><td colspan="3">金</td><td colspan="3">土</td></tr>
<tr><td>講時</td><td>3</td><td>4</td><td>5</td><td>3</td><td>4</td><td>5</td><td>3</td><td>4</td><td>5</td><td>3</td><td>4</td><td>5</td><td>3</td><td>4</td><td>5</td><td>3</td><td>4</td><td>5</td></tr>
<tr><td>1年</td><td colspan="3">基礎実習1
(4クラス)</td><td colspan="3">基礎実習2
(4クラス)</td><td colspan="3">基礎実習3
(4クラス)</td><td colspan="3" rowspan="3">企画演習
1・3・5
(3クラス)</td><td colspan="3" rowspan="3">メディア
制作1・
3・5・7
(各1クラス)</td><td colspan="3"></td></tr>
<tr><td>2年</td><td colspan="3">制作実習1
(4クラス)</td><td colspan="3">制作実習2
(4クラス)</td><td colspan="3">領域横断基礎
演習1
(6クラス)</td><td colspan="3" rowspan="4">表現越境
科目
(5クラス)</td></tr>
<tr><td>3年</td><td colspan="3">応用実習1
(6クラス)</td><td colspan="3">応用実習2
(6クラス)</td><td colspan="3">領域横断演習1
(6クラス)</td></tr>
<tr><td>4年</td><td colspan="3">自由制作1
(ゼミ)</td><td colspan="3">自由制作2
(ゼミ)</td><td colspan="3">自由制作3
(ゼミ)</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
</table>

◆後期

<table>
<tr><td>曜日</td><td colspan="3">月</td><td colspan="3">火</td><td colspan="3">水</td><td colspan="3">木</td><td colspan="3">金</td><td colspan="3">土</td></tr>
<tr><td>講時</td><td>3</td><td>4</td><td>5</td><td>3</td><td>4</td><td>5</td><td>3</td><td>4</td><td>5</td><td>3</td><td>4</td><td>5</td><td>3</td><td>4</td><td>5</td><td>3</td><td>4</td><td>5</td></tr>
<tr><td>1年</td><td colspan="3">基礎実習4
(4クラス)</td><td colspan="3">基礎実習5
(4クラス)</td><td colspan="3">基礎実習6
(4クラス)</td><td colspan="3" rowspan="3">企画演習
2・4・6
(3クラス)</td><td colspan="3" rowspan="3">メディア
制作2・
4・6・8
(各1クラス)</td><td colspan="3"></td></tr>
<tr><td>2年</td><td colspan="3">制作実習3
(4クラス)</td><td colspan="3">制作実習4
(4クラス)</td><td colspan="3">領域横断基礎
演習2
(6クラス)</td><td colspan="3" rowspan="4">表現越境
科目
(5クラス)</td></tr>
<tr><td>3年</td><td colspan="3">応用実習1
(6クラス)</td><td colspan="3">応用実習2
(6クラス)</td><td colspan="3">領域横断演習2
(6クラス)</td></tr>
<tr><td>4年</td><td colspan="3">卒業制作1
(ゼミ)</td><td colspan="3">卒業制作2
(ゼミ)</td><td colspan="3">卒業制作3
(ゼミ)</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
</table>

資料3　「7. 施設・設備等の整備計画」関連

関連雑誌一覧

ポピュラーカルチャー関連の雑誌一覧は以下の通りである。

1	Adbusters (Media Foundation)
2	Acne Paper (Acne studios)
3	Billboard Magazine (Billboard)
4	Cultural critique (Telos Press)
5	Cultural studies (Methuen)
6	Costume (Benjamin Publications)
7	大学生 (大學生雜誌社)
8	Down beat (Charles Suber)
9	DRESS: The Journal of The Costume Society of America (The Costume Society of America)
10	Dazed&Confused (Waddell)
11	Faces (Cobblestone Pub)
12	fashion theory (berg)
13	fashion practice (berg)
14	Film, Fashion & Consumption (Intellect)
15	Fantastic Man (Top Publishers)
16	International Journal of Fashion Design, Technology and Education (Taylor & Francis)
17	Japan forum (Oxford University Press)
18	Journal of popular culture (Bowling Green)
19	Journal of American studies (Cambridge University Press for the British Association for American Studies)
20	The journal of modern African studies (Cambridge University Press)
21	Journal of sociology : the Journal of the Australian Sociological Association (Longman)
22	Jazz Perspectives (Routledge)
23	Journal of Popular Music Studies (Wiley and Blackwell)
24	Journal of Fashion Marketing and Management (Emerald)
25	Leonardo Music Journal (Pergamon Press)
26	lula (lula Pub)
27	Mad (E.C. Pub)
28	MultiCultural review (GP Subscription Publications)
29	Marie Claire (Marie Claire Album S.A)
30	Modes et travaux (Editions Edouard Boucherit)
31	The New Yorker (New Yorker Magazine)
32	NME : the New Musical Express (IPC Media)
33	Positions : East Asia cultures critique (Duke University Press)
34	Popular Music (Cambridge University Press)
35	Popular Music and Society (Routledge)
36	Purple Fashion (Purple Institute)
37	POP magazine (Bauer)
38	Q (Bauer Media Group)

39	Review of Japanese culture and society (Center for Inter-Cultural Studies and Education, Josai University)
40	Sphere (Illustrated London News Limited)
41	The Source (L. Londell McMillan)
42	SPIN (Spin Media LLC)
43	Textile view magazine (Metropolitan Publishing B.V.)
44	Textile view2 magazine (Metropolitan Publishing B.V.)
45	textile (berg)
46	L'Uomo vogue (Condé Nast)
47	Vogue, Italia (Vogue, Italia)
48	Volume! (Ed Mélanie Seteun)
49	Vogue America (Condé Nast)
50	V magazine (Visionaire)
51	Wire (The Wire Magazine)
52	032C (032C)
53	Vogue, français (Condé Nast)
54	アイデア : デザイン・宣伝・販売 (誠文堂新光社)
55	Axis : アクシス (アクシス)
56	AD select monthly (リブラ)
57	アニメージュ (徳間書店)
58	アニメディア (学習研究社)
59	季刊アルテス (アルテスパブリッシング)
60	Eyescream (音楽と人)
61	季刊iichiko (日本ベリエールアートセンター)
62	イグザミナ (イグザミナ)
63	インパクション (インパクト出版会)
64	Wedge : businessman magazine (ウエッジ)
65	Web designing (毎日コミュニケーションズ)
66	ViVi (講談社)
67	MdN (エムディエヌコーポレーション)
68	演劇ぶっく (演劇ぶっく社)
69	映像学 (日本映像学会)
70	Elle deco (タイムアシェットジャパン)
71	Elle decor : lo stile dell'Estate (Federazione Italiana)
72	egg (大洋図書)
73	大阪人 (大阪都市協会)
74	音楽の友 (音楽之友社)
75	音楽学 (日本音楽学会)
76	オリコンスタイル (オリコン・エンタテインメント)
77	音楽と人 (音楽と人)
78	ORICON エンタメ・マーケット白書 (オリコン・エンタテインメント)
79	Cut : international interview magazine (ロッキング・オン)
80	Casa brutus : life design magazine (マガジンハウス)
81	ギター・マガジン (リットーミュージック)
82	キーボード・マガジン (リットーミュージック)
83	Ginza (マガジンハウス)
84	暮しの手帖. 4世紀 (暮しの手帖社)
85	Courrier Japon (講談社)

86	Quick Japan（太田出版）
87	Groove（リットーミュージック）
88	Ku:nel（マガジンハウス）
89	月刊カラオケファン（ミューズ）
90	広告（博報堂）
91	国際服飾学会誌（国際服飾学会）
92	小悪魔ageha（インフォレスト）
93	サライ ： super premium magazine Serai（小学館）
94	Sound & Recording Magazine ： サウンド & レコーディング・マガジン（リットーミュージック）
95	シーエム・ナウ（玄光社）
96	CG world & digital video（ワークスコーポレーション）
97	ジャズ批評（ジャズ批評社）
98	GQ Japan（コンデナスト・ジャパン）
99	Zipper（祥伝社）
100	Switch（スイッチ・パブリッシング）
101	STYLESIGHT by FASHION FREAKwith QUOTATION（QUOTATION）
102	宣伝会議（宣伝会議）
103	seventeen（集英社）
104	ソシオロゴス（東京大学大学院社会学研究科社会学Aコース自治会）
105	ソシオロジ（社会学研究会）
106	装苑 ： 服装研究（文化服装學院出版部）
107	ソトコト（木楽舎）
108	ダ・ヴィンチ（リクルート）
109	創 ： 月刊総合雑誌つくる（綜合評論社）
110	テアトロ ： 綜合演劇雑誌（テアトロ社）
111	DTM Magazine（寺島情報企画）
112	東京人（東京都文化振興会）
113	東洋音楽研究（東洋音楽学会）
114	なごみ（淡交社）
115	日経デザイン（日経BP社）
116	月刊ニュータイプ（角川書店）
117	日本色彩学会誌（日本色彩学会）
118	日経エンタテインメント（日経BP社）
119	BT. 美術手帖 ： bijutsu techo（美術出版社）
120	HUGE（講談社）
121	+designing（河出書房新社）
122	ふらんす（白水社）
123	プリンツ 21（21世紀美術出版）
124	ブレーン ： 広告とマーケティング（誠文堂新光社）
125	Bridge(Cut増刊)（ロッキング・オン）
126	Black music review（Blues Interactions）
127	Blues & Soul Records（Blues Interactions）
128	Fashion lab（日本色研事業）
129	Figaro Japon（阪急コミュニケーションズ）
130	+81（ディー・ディー・ウェーブ）
131	Bridge （ロッキング・オン）
132	Fool’s Mate（フールズメイト）

133	FRUiTS（ストリート編集室）
134	PROSOUND（ステレオサウンド）
135	Pen ： with new attitude（阪急コミュニケーションズ）
136	ベース・マガジン（リットーミュージック）
137	本の雑誌（本の雑誌社）
138	ポピュラー音楽研究（JASPM）
139	Popeye（マガジンハウス）
140	Marquee（マーキームーン社）
141	みすず（みすず書房）
142	Music magazine（ニューミュージック・マガジン社）
143	ミュージックマガジン（ミュージックマガジン）
144	Men’s non-no（集英社）
145	Mostly classic（産経新聞社）
146	ユリイカ ： 詩と詩論（青土社）
147	Latina（ラティーナ）
148	流行色 ： fashion color（日本流行色協会）
149	リズム＆ドラムマガジン （リットーミュージック）
150	レコードコレクターズ（ミュージックマガジン）
151	Rockin’on（ロッキング・オン）
152	ROCKIN’ON JAPAN （ロッキング・オン）
153	和樂 ： わらく ： 「和」の心を楽しむ ： waraku（小学館）

資料４　「7. 施設・設備等の整備計画」関連

電子ジャーナル、デジタルデータベースについて

＜電子ジャーナル＞

電子ジャーナルの定義

・「電子ジャーナルとは、オンライン及び電子媒体で配布される雑誌（ジャーナル）で、一次情報あるいは一次情報が主体のもの」（文部科学省平成 21 年度学術情報基盤実態調査《大学図書館編》記入説明書８ｐ.による定義

・電子ジャーナルとは、「ウェブ上で電子的に提供される雑誌で、記事・論文の全文が電子的に提供されるもの」、提供とは「図書館で何らかの形で電子ジャーナルへのアクセス手段を整備し利用者に案内していること－「2006 年『日本の図書館』付帯調査　電子ジャーナルについて報告書」（日本図書館協会図書館調査事業委員会　編集
（社）日本図書館協会　2008 年 4 月 30 日　発行　による定義

本学では以下の 589 タイトル（国内 280 タイトル、国外 309 タイトル）を購読している。

- JSTOR　全文閲覧可能 271 タイトル　国外アグリゲータ
- MAGAZINE　PLUS　JSTAGE 連携全文閲覧可能 227 タイトル（2007 年 9 月時点のタイトル数）　国内アグリゲータ
- JAPAN KNOWLEDGE　1 タイトル　『週刊エコノミスト』　国内アグリゲータ
- 日経ＢＰ記事検索サービス　日経ビジネスはじめ 50 タイトル　国内出版社系
- 聞蔵Ⅱビジュアル　2 タイトル　週刊朝日、AERA　国内出版社系
- Journal Web　38 タイトル　国外出版社直（紀伊國屋書店 Journal Web にて管理）

＜デジタルデータベース＞

以下の 19 種のデータベースと契約している。

1. JAPAN　KNOWLEDGE+（ネットアドバンス社提供）
   百科事典・辞書・ニュース・学術サイト URL 集などを集積した日本最大の知識データベースを一括検索　40 コンテンツ
2. Magazine　Plus（日外アソシエーツ提供）
   論文がどの雑誌の何号に収録されているかを検索できる。該当雑誌を所蔵していない場合でも、その情報をもとに ILL サービスを利用して文献複写依頼が可能。
3. 聞蔵 II ビジュアル（朝日新聞社提供）
   朝日新聞・AERA・週刊朝日・知恵蔵の記事が検索・閲覧できるオンラインサービス。
   1879 年から現在までの紙面イメージや切り抜き・図表イメージも見る事ができる。
   人物データベース、歴史写真アーカイブサービスも利用可能。
4. 明治･大正・昭和の読売新聞（読売新聞社提供）
   明治 7 年 11 月～昭和 35 年までの読売新聞の記事をキーワード・分類コード・日付で検

索・閲覧できる。

5. K・O・D 研究社オンラインディクショナリー（研究社提供）
本格派英和辞典の「リーダーズ」「リーダーズ・プラス」を含むオンライン英和・和英辞典 16 コンテンツ収納。収録語彙が随時追加される。

6. ナクソス・ミュージックライブラリー
クラシックを中心に、ジャズ、ポップス、民族音楽等、様々なジャンルの CD5 万枚分を聴くことができる音楽配信データベース。

7. アジア動向データベース（アジア経済研究所提供）
1969 年以降のアジア 22 カ国 1 地域、および中央アジア・ロシア極東地域について、各国の政治・経済情勢に関する信頼性の高い情報を得ることができる。

8. Oxford　Art　Online（Oxford University Press 提供）
グローブ世界美術大事典（Grove Dictionary of Art）のオンライン版データベース。
多様な検索機能とこまめなアップデートにより、世界中の最新の芸術文化情報を入手することができる。

9. First　Search（OCLC 提供）
アメリカの Online Computer Library Center 提供。図書・雑誌などの書誌検索（World Cat）や雑誌記事・目次情報の検索・閲覧（Article First）といった各種データベースを利用可能。

10. Net　Library（提供タイトル 『現代史資料:1-30,別巻』 東京, みすず書房）
インターネット上で図書を閲覧することが出来る。全文検索（本文に対する検索）や印刷も可能。

11. Ci　Nii　論文情報ナビゲータ（国立情報学研究所提供）
学会誌・協会誌・大学研究紀要・国立国会図書館の雑誌記事索引など、日本の学術論文を中心とした論文情報を収録。検索や無料公開されている論文の閲覧は代行でなくても利用が可能。

12. 日経テレコン 21（日本経済新聞社提供）
日本経済新聞社刊行の新聞・雑記事誌を過去 20 年以上遡って検索できるほか、ビジネス関連情報（企業・人事・マーケット等）の提供サービスもある。

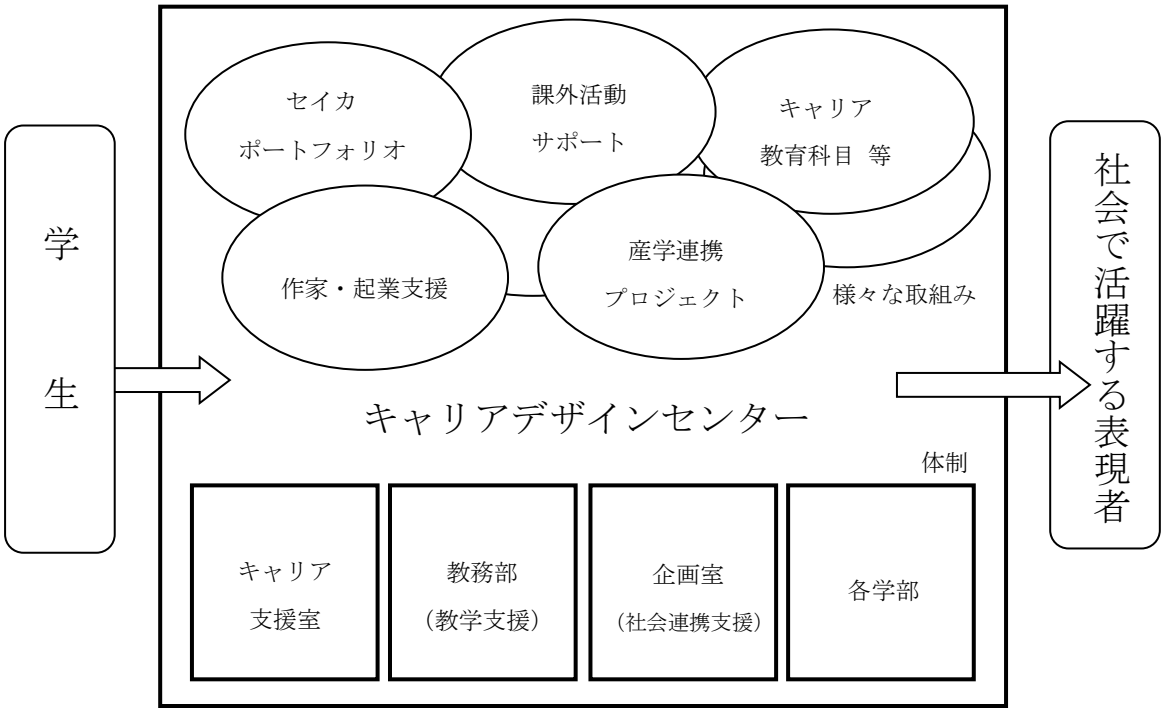
13. G-Search（ジー･サーチ社提供）
企業情報、新聞・雑誌記事、人物プロフィールからマーケティングレポート、法律・特許、科学技術情報、世界の特許・医薬・科学技術・人文・企業情報等膨大な情報ソースから収集されたビジネスコンテンツ。

14. 官報情報検索サービス（国立印刷局提供）
昭和 22 年 5 月 3 日・日本国憲法施行日以降～当日発行分（当日分は午後 3 時以降に公開）までの官報が検索可能。

15. ヨミダス歴史館（読売新聞社提供）
明治 7 年 11 月の創刊から最新号の読売新聞の記事 1,100 万件をオンラインで検索・閲覧できる。

資料５　「15.社会的・職業的自立に関する指導等及び体制」

キャリアデザインセンターの体制



キャリアデザインに関する規程

本学規定でのキャリアデザインセンターに関する本学の規程

（規定　第３編 組織・管理 ＞ 第１章　組織）

第 37 条の 4　キャリアデザインセンターは、学生の生涯を通じたキャリア形成、社会的実践力の育成を推進することにより、本学独自の卒業後の職業的自立および表現者育成支援を担当する機関として、キャリアデザインセンターを置く。

2　キャリアデザインセンターの運営については、「京都精華大学キャリアデザインセンター規程」による。

（京都精華大学キャリアデザインセンター規程）

（設置）　第 1 条　この規程は、「学校法人京都精華大学組織および運営に関する規則」第 37 条の 4 の規定に基づき、本学の教学執行機関として設置する京都精華大学キャリアデザインセンターに関する事項について定める。

（目的）　第 2 条　キャリアデザインセンターは、学生の生涯を通じたキャリア形成、社会的実践力の育成を推進することにより、本学独自の卒業後の職業的自立および表現者育成支援を目的とする。

（業務）　第 3 条　キャリアデザインセンターは、前条の目的を推進するため、学部、教務部、学生部、社会連携センター等関連する各部署との有機的な連携に基づき、以下の業務をつかさどる。
(1)　学生の職業的実践力を高めるための正課および正課外のプログラムの構築および推進に係ること
(2)　本学の正課プログラムにより得られる知識・技術等を、現実社会で実践するための方途について必要なプログラムの構築および指導に係ること
(3)　キャリアデザインの観点による学生へのキャリアガイダンスに係ること
(4)　その他、学長が必要であると認めた業務

（センター会議）　第 4 条　キャリアデザインセンターの運営に関する重要事項を審議・決定するため、センター会議を置く。
2　センター会議は、次に掲げる者で構成する。
(1)　センター長
(2)　学生担当副学長
(3)　企画室長
(4)　教務部事務部長
(5)　キャリア支援室長
(6)　キャリア支援課長
(7)　その他、学長が指名する教職員　若干名
3　前項第 7 号の構成員の任期は 1 年とする。ただし、再任を妨げない。
4　センター会議は、センター長が招集し、その議長となる。
5　センター会議は、構成員の 3 分の 2 以上の出席をもって成立する
6　センター会議の議決は、原則として出席構成員の多数決により決定する。ただし、可否同数の場合は、議長がこれを決する。
7　センター長は、必要に応じ他の教職員などの出席を求めることができる。

（審議事項）第 5 条　センター会議は以下に掲げる事項を審議し、センター長は、その結果について逐次、学長に報告しなければならない。
(1)　キャリアデザインセンターの事業計画に関すること
(2)　キャリアデザインセンターの運営と業務推進についての評価および分析に関すること
(3)　キャリアデザインセンターの予算・決算に関すること
(4)　その他センター長および学長が必要と認める事項

（その他）　第 6 条　この規程に定めのないキャリアデザインセンターに関する事項は、学長が決する。
2　キャリアデザインセンターの業務の執行にあたり必要があるときは、細則を定める。

（事務担当）　第 7 条　この規程に関する事務は、キャリア支援課が担当する。

（改廃）　第 8 条　この規程の改廃は、常務理事会が行う。

附則　　この規程は、2011 年 3 月 26 日に制定し、2011 年 4 月 1 日より施行する。

以上

資料６　「専任教員の年齢構成・学位保有状況」関連

教員年齢構成と教員に関する年齢の規程

ポピュラーカルチャー学科の専任教員の年齢構成は、60 代 5 名、50 代 2 名、40 代 5 名、30 代 3 名であり、著しい偏りはなく、完成年次に定年を越えて在籍する教員はいない。

教員に関する定年の規程は以下の通りである。

学校法人京都精華大学就業規則　（該当箇所の抜粋）

第 1 章　総則

(目的)
第 1 条　この就業規則は、学校法人京都精華大学の職員の就業に関する事項を定めることを目的とする。

(定年)
第 12 条　　教職員は、満 70 歳に達した年度末をもって退職するものとする。

附　則
この規則は、同大学が学校法人木野学園に設置者変更されるにあたって、1993 年 10 月 13 日に改定し、1994 年 4 月 1 日から施行する。